
銀魂～美しき蜘蛛に睨まれて～

梨栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂く美しき蜘蛛に睨まれてく

【Nコード】

N6456V

【作者名】

梨栖

【あらすじ】

何時ものように、家から万事屋へやって来た新八。階段の脇に、怪我をした女性が倒れていた……幸い大した怪我ではなく、意識を取り戻した女性は、自らを「出浦 時雨」（いでうら しぐれ）と名乗った。成り行きで時雨と、お馴染み万事屋トリオとの奇妙な生活が始まる……基本コメディー少しシリアス。 第二部です。

〜あじさつ〜

どうも！初めまして&四度目まして！梨栖です^^

初心に帰って「銀魂〜美しき蜘蛛の巣にかかりて〜」の第二部、

「銀魂〜美しき蜘蛛に睨まれて〜」の執筆にあたっていきたいと思えます。

まず、初めましての方へ。

先程も言いましたように、今作は「銀魂〜美しき蜘蛛の巣にかかりて〜」の第二部です。

本当は、第一部を読んで頂くと一番有難いのですが、如何せん80部近くございます。

ですので最初の方に、初めての方でも第二部から読めるよう考慮した話を作りますのでご安心下さい。

まず、当作品の主人公的ポジションにいるオリジナルキャラクターの紹介をざーっと。

出浦 時雨／いでうら しぐれ

9月18日生まれ A型 170cm 53kg

ふわっとした白みがかった金髪のロングヘアに深海のような青い目をした美女。

沖田に弱音を吐かせるほど病的な毒舌家で、彼女の一言で戦意喪失した人間は数知れない。

（彼女からすれば銀時は「ホコリ」真選組は「黒いゴミ袋」）
沖田には「先輩」、いつの間にか接触していた山崎には「閣下」李麻には「師匠」などと呼ばれている。（近藤も後々「殿下」と呼び、隊士達も様々な呼び方で呼んでいる事から、土方以外は彼女の支配下にあると思われる）唯一、毒舌の効かない屁怒組を苦手としている。

普段は笑顔を絶やさず、女性には優しく振舞っているが過去を探られる事を酷く嫌う。

現在万事屋の従業員として働いている。

（私の活動報告「〓オリキャラ、sプロフィールPart2〓」より引用）

因みにコチラが、時雨さんになっております。下手で申し訳ありませんが！

>i29367—3659<

「〽オリキャラ、sプロフィールPart2〽」には、より長く書いていますので、

「もっと知りたい」と思った方は、是非そちらをお読み下さい^^

それでは、初めましての方、そうでない方。

大したお構いではありませんが、暇潰しにでも、この小説を読んで
いって下さいまし。

この小説をより多くの方が読んでくださることを祈り

梨栖

〽次章予告〽（前書き）

と、言うわけで時雨さんが大暴れする第二部、書いていきますよ！

じゃあ時雨さん。今までのあらすじをよろしく。これカンペね！

〈次章予告〉

学校の体育館にありそうなステージ。

その中心に、パツとスポットライトが光る。カツカツとヒールの音がする。

スポットライトが当てたのは……

ふわふわした髪質の、白髪がかった金髪。サファイアのような切れ長の目の美女。

黒い丈の短い着物は彼女の白い肌と、抜群のスタイルを際立たせる。

着物とお揃いの色のロングブーツは女性にしては背の高い彼女を助長しているようだった。

彼女はマイクを取り出し、口を開く。

「皆さん始めまして。私は出浦時雨いでうらしぐれです。また皆さんに会えて嬉しいわ」

時雨はそう言いながら、何者かに渡された紙を広げて軽く咳払いをした。

「それじゃあ、初めての人達にも分かりやすいよう最初に総集篇を……」

彼女を照らしていたスポットライトが消えたと同時に、彼女の言葉が途絶えた。

「…………え?」

それは突然告げられた事だった。

「幕府おかみからの御達しだよ。しばらくの間、京に遠征に行っちゃくれねえか?」

その言葉に、拒否権などあるはずもなく、渋々と承諾した少女。

「ねえ、総集篇じゃないの？ しかも私がメインの話じゃないの？」

江戸より遥かに治安の悪い京。有名な幕吏が寝首を掻かれるなど
ざらにあるような地。

一人でそこへ行くには、少女にはまだやり残したことが、あまり
にもありすぎた。

「何も進まないまま行くの？」

少年の問いに、少女は答えた

「もう明後日なのだろう。明日、ちょっと頑張ってみる」

「コレ『うつくも』じゃないわよね。明らかに真選組の話よね？
タイトル間違えたの？」

ないよな……

自惚れじゃないよな……夢、見てるわけでも

目撃せよ。少女の想いは、実るのか、儚く散るのか。

＊異動篇＊近日より更新スタート。

「『目撃せよ』じゃないわよ総集編は？
じゃなかったの？」

読者に優しい小説書くん

〈次章予告〉（後書き）

要は「恋歌が京行くので、その前に土方さんとのアレを前に進めるか後ろに倒すかハッキリしておくよ篇」です。

治安の悪さが江戸＜京　なのは私の勝手な想像です＞＜；
何となくそっちのがいい気がして（↑どんだけテキトー）

いや、あの恋歌一人で京に行かせて皆心配してればいいよ！っ
ていう。

「務め人は、いつでも異動のリスクをしょっている」(前書き)

※この小説は「うつくも」です。

「務め人は、いつでも異動のリスクをしょっている」

江戸の町にどっかりと建つ警察庁。

特別武装警察の制服を身に纏った腰まで届く栗色の髪を揺らす少女。

少女が目指すのは最上階。

エレベーターを降りると、いかにも「ガードマン」というオーラを出した男が目の前にいた。

少女は懐から『特別武装警察 真選組副局長 須藤^{すどうれんか}恋歌』と書かれた手帳を出す。

それを見た男は、すぐに部屋に通した。

部屋の奥、オフィスデスクにどっかりと座る中年親父に恋歌という少女は口を開いた。

「何の用じゃとつつあん。見合いならいつ何時如何なる相手でも断ると言うておろう」

とつつあん。そう呼ばれた男は、煙草の煙を吐いて返事の言葉を考える。

机の上にあるプレートには『松平^{まつらいだ} 片栗虎^{かたくりこ}』とあった。

「今回は違エよお。恋ちゃんの将来の旦那を探すだけが俺の仕事じゃねえ」

「だから将来の旦那の心配は無用だと言うて……」

「惚れた男がいるって話か。親父代わりのこの俺に何の挨拶もねえ

奴、オジサン絶対認めねえよオ？」

目の前にいる、そこの親父に言ってやりたい。

とお前の娘になった覚えはないし、その男はお前も良く知っている。

しかし、それはぐっと飲み込んで、松平に用件を促した。

「えーっと……要約すると……京へ、遠征？」

「異動だよ」

間髪要れずに訂正された恋歌は唇を尖らせ、誰の付き添いで？と訊く。

そして恋歌は、次の松平の言葉に耳を疑った。

「恋ちゃん一人だ。幕府は無数の使えねえ奴より一人の腕の立つ奴がほしいそうだ」

「どうか。治安の悪い場所に放って、あわよくば死ねという事であろう？」

男所帯の中に女、それもいい年頃の娘が一人。

士気に関わる。そう思う連中は今でも山のようにいるだろう。

「そう言わずに行ってくれや。帰って来たらなんでもしてやつから」

「……どうせ拒否権など無いくせに」

そう言って、恋歌は警察庁、最上階の一室を出た。

異動を命じられた恋歌が向かったのは、昔通っていた柳生家の道場。

異動の事を、幼馴染であるこの家の時期当主に、真っ先に伝えておきたかった。

茶菓子で迎えてくれた時期当主は、話を聞いて、目を見開いた。

眼帯をしている左目も、同じようになっているだろうか……。

「異動!?!? そんな急に……」

「ああ、だからしばらく九ちゃんと会えぬ日々が続いてしまう」

柳生家の時期当主、九ちゃんこと柳生九兵衛やぎゅうへいは寂しそうな顔だった。

おまけに何時帰って来れるかも分からない上、京は江戸より治安が悪いと聞く。

最悪今生の別れかもしれない。そう言った時、九兵衛は立ち上がった。

そして自分の部屋から貯金箱を取り出してきたかと思うと、地面に置く。

相当貯まっているのか、ゴトンと音がする。

「大丈夫だ。将来妙ちゃんを使うと決めている貯金を崩して……」

「そこまでせずともいーから!! 妙殿のために使って差し上げて!?!」

「そうですぞ若!! こんな小娘のために若の御身を危険に晒すなど……」

少女二人の会話に、突如沸いて出て来たこの男。

彼の名は東条歩。とうじょうあゆむ

柳生四天王なるものの筆頭で、九兵衛の幼い頃から世話役をしていた。

その九兵衛命ともいえる性格は、彼をストーカーキャラにしてしまった。

恋歌は彼に、冷めた目を向けた。

「いや、むしろ京の方が安全かもしれんな。九ちゃんが悪質な嫌がらせに遭わぬ分」

「何を言うか小娘エエエ!!
そこに直れ、成敗して……ゴブルア
!!」

相手にしてられない、とばかりに、九兵衛がバズーカで爆破し、消し炭となる東条。

同時に親指を突き立てグッドサインを出し、恋歌は優しい口調で言った。

「案ずるな。私は絶対生きて帰ってくる」

「本当に？」

「おう！ 他の誰でもない、九ちゃんとの約束ぞ？ 二度と破った
りしない」

恋歌には、不本意とはいえ、一度彼女との約束を破り、傷付けてしまった前科がある。

もう彼女を悲しませることも、約束を破ることも決して許されない。
い。

でも、別の理由も思い出し、慌てて首を振る。

まるで煩惱を断ち切るかのように。

「死んじやったらマヨとも会えなくなっちゃうもんナ」

「副長さん悲しませるものねえ」

「そうそ……」

言いかけて、止めた。

知らぬ間に、当たり前のように恋歌の隣に座っていた少女と女性。

橙色の髪にぼんぼりを付けた、青い瞳のチャイナ娘。

白髪がかった金髪に、深い青い瞳を持つ、黒い丈の短い着物を着た女性。

そして、その二人がニタニタと笑っている。

恋歌は大声で空にシャウトした。

「務め人は、いつでも異動のリスクをしょっている」(後書き)

これを読んだリア友達の感想

師匠「お前コレ『うつくも』要素どこにあんだよ」

Sちゃん「お前コレ時雨がちょっとしか出てきてねーじゃねーかよ」

師匠&Sちゃん「空気読めやカス」

うわああああん！グレてやるうううううう

く女の子が沢山いたら恋バナするしかないく（前書き）

今回の異動篇、流石にやりすぎた。と思ったら、

「うつくもでこんなんやっちゃダメ」と読者様から感想を頂きました。

ご意見頂いた読者様の他にも、沢山の方がそうお思いかと思えます。

その事に、大変深くお詫び申し上げます。本当に申し訳ございませんでした。

本気で自重が出来ない自分が許せません。

でも、途中で投げ出して「異動篇」を無かった事にするのは、もっと許せない。

そんなただのエゴではありますが、どうか最後まで書かせてください。

そして、気が向いたら「このKYめ」でもご意見を下さい。

お願い致します。

く女の子が沢山いたら恋バナするしかないく

人様の家で大声でシャウトした恋歌。

何故当たり前のように会話の中にいる。それ以前に何故ここにいる。

茹蟬みたいな顔で、問う彼女に、時雨は笑顔で返した。

「お妙ちゃんのおつかいよ」

曰く、妙の家に遊びに行って遊んでいれば、案の定ゴリラが沸いて出て来て。

何時もなら鉄拳なり薙刀なりで成敗する妙だが、ここ最近頻繁にストーリーキングされ、心身共に滅入ってるらしい。

恐らく薙刀では彼を止めるには足りない。九兵衛の家から真剣を取って来てくれ。

先日、柳生家と一緒に研ぎ師に出した恒道館の刀を取って来てくれ。と。

まさか逆らえるわけもなく、逃げるように柳生家へ来たのだと言う。

因みに会話の中にいたのは、そろそろ帰ろうとした時、話し声が聞こえたからだとか。

「そ、そのままにしたら局長の御身が危ないナー」

「」「待て」「」

話を聞いて、清々しいほどの棒読みで去ろうとした恋歌を、三人は一斉に止めた。

約二時間後、洗いざらい話し、体育座りで赤い顔を伏せている一人。

話されて、今更白状されても知っているぞそんな事。と思う二人。

幼馴染の衝撃の事実を知り、右目を見開く一人。

「……その男とは、その、こ、こいび……」

「全然。向こうにとっては多分、ただの子供で、ただの一部下、仲間であろう」

まるで自分の事のようにくぐもった声で紡がれていく九兵衛の言葉
を恋歌は遮った。

「贅沢な話よねえ。一体恋ちゃんの何が不服なのかしら」

「全くだ。そもそも君はその男のどこが？」

九兵衛の言葉に、恋歌は目だけを覗かせたと思えば、そろそろと
上体を起こす。

そして、「ここだけの話だからな」と、指先をもじもじさせなが

ら口を開いた。

「そーだなあ。一言で纏めると全部だけど……あのおっきい背中かな？ 怪我した時は背負っ

て貰ってたのをおぼろげに覚えててそれがすごい安心するっていうか何ていうか……本

当は元気な時でも背負ってもら……いやいやそうじゃない。そういうことではない。後、

私が考えておる理想の侍像と似ておるっていうか、普段ぶっきらぼうで無愛想で無口で口

より先に手が出るような奴だけど、アレで意外と優しいところもあってな？ すっごい大人だ

と思うたら、喧嘩っ早いトコもあって、何だかんだでノリ良くて、時々書類整理手伝って

くれたり、終わるまで待っててくれたりしたりな。あと、顔の方はあんま気にしないけど

な？ あのー、思想とか何かそんな……か、か、かつこ……か、かつこ……かつこいいな

……って。も、もー。そんな言わせんなよ！！ 何か照れて来る

ではないかあ！！もー！」

今一瞬でもものすごい情報量が流れたような？

あまりの事で、神楽や九兵衛はおろか、時雨までもが呆気にとられた。

最後のもー！！
でバツシィと二の腕を叩かれても、呆然としていた時雨。

具体的に、何て返せばいいのかも分からず。ただ一つ、誰にでも分かった事実。

「……要するにベタ惚れなんだって事が分かったわ……ありがとう」

三人は、週末のハードワーカーのような倦怠感にドツと肩を落とした。

「ゴリラ、もう帰ってるといいアルな」

「そうね」

柳生家を出て、九兵衛に持たされた、手土産の水羊羹を手に提げ志村邸に向かう。

足取りは、月曜日に登校する学生の如し。

『……要するにベタ惚れなんだって事が分かったわ……ありがとう』

アレは心底そう思って、口にした言葉。

よく分からないけど、九割以上がその男の中身に関するのだもの。

そして、自然と一つの疑問、というより、興味がわいて来る。

「『あの人』の方はどう思ってるのかしら」

「何をアルか？」

「ん？ こっちの話よ。何でもないわ」

不思議そうに見上げる神楽の頭を、優しく撫でた。

全く気乗りはしないが、一度『あの人』と話してみる必要がある
そう。

と、面識はあるものの、こじらせる様な仲も無い『あの人』の事
を思い浮かべた。

勿論、面白半分ではない。純百パーセントで面白だ。

などと考えている時、駄菓子屋の近くで声がした。

「言いがかりすんなこの腐れポリKOH!!」

「うるせえ黙れそこをどけエ!! 公務執行妨害でしょっ引くぞこ
の腐れ天パ!!」

いい大人の声が、小学生のような内容で言い争いをしていた。

どちらも聞き覚えのある声だということが、時雨の頭を痛める。

と、同時に、一つ作が浮かんだ。

「神楽ちゃん。悪いんだけど先言っててくれる？」

彼等の声が聞こえていた神楽は、うん。と頷いて、一人で志村邸へと向かった。

時雨は、駄菓子屋の方へ走った。

駄菓子屋へ向かえば、案の定、そこには彼等がいた。

一人は、黒い洋服の上に白い着物を着流した銀髪の男。

腰には「洞爺湖」と書かれた木刀が刺さっている。

この男は、時雨の就職先の経営者^{オーナー}。つまり上司に値する。

一方、黒髪に琥珀色の、鋭い目を持ち、髪とお揃いの色の役人服を着た男。

彼は「チンピラ警察24時」で有名の武装警察、真選組の二番手。

身内の間の話だが、彼等の中の悪さは折り紙付きだ。

「銀さん、副長さん？　こんな所で何やってるの？」

上司と、その喧嘩相手に付けている愛称で呼べば、喧嘩は止み、時雨の方に目をやる。

「銀さん」と呼ばれた男、坂田銀時^{さかたぎんとき}に至っては、ドタドタとこちらへ来る。

「聞いてくれよ！　アイツ公務執行妨害とかイチャモンつけてくんだぜ！」

「公務執行中にオメーがぶつかったくらいで色々絡みやがるから桂を逃がした。どこに違いがある」

「アイツ」こと土方十四郎^{ひじかたどうしろう}は至極真顔で反論する。

それを銀時は着流しの袖を、土方に見せ付けるように広げた。

「そのぶつかっただけでこんな大惨事が起きてんだろーがアアア
！」

確かに白と水色の波のような模様がある袖は、ピンク色にベッタ
リ染まっていた。

彼の左手に、いちごミルク味のアイスクャンデイの棒切れが握ら
れている。

時雨はソレを見て、真っ直ぐ土方に向き直った。

「まあ、自分の鍛錬不足と不注意を人のせいにするだなんて、酷い
人」

「そーだぞコルァ！ 姐さんがそう仰せになってやがんだ！ 引っ
込め腐れポリ公！」

「テメー等ホントいい性格してんなー!!」

と、土方がツツコミを入れれば、時雨がズカズカと彼のほうへ向かう。

何をするかと思えば、プロレスごっここの中学生のように、彼の首を絞める。

絞めるというか、白い細い腕と、豊満な胸に挟まれているといった方が正しい。

「ウチのオーナーに妙な言いがかりした落とし前はつけてもらおうわよ。何か奢りなさい」

否定の言葉が言えないのは、腕と胸の間隔が狭くなり、息苦しく感じたからで。

その言葉に、便乗した銀時がよし、俺も！ と近くのアミレスへ足を向けた時だった。

「貴方は神樂ちゃんと合流してお妙ちゃんの家へ行きなさい」

「はっ？」

すっかり、土方という名の財布を持ち、一食たかる気でいた銀時。

不平不満の声を出す前に、時雨はより一層の笑顔で言った。

「そっちに行ったら美味しい水羊羹があるわよ。私の分もあげるから行きなさい」

『水羊羹』という甘美な響きに歓喜の声を挙げて、銀時は志村邸へ向かった。

それから、とっ捕まえた土方ごとファミレスへ入店しようとした時、急に全身が重くなった。

他ならぬ、土方が自分の全体重を使ってブレーキをかけているからだ。

「テメツ……何のつもりだ！ 俺ア奢るなんざ一言も……」

と、息苦しそうに言う彼に、時雨はふうとため息をつく。

「不当逮捕をこれくらいでなかった事にしてあげると言っているのがまだ分からないの？」

「だから『不当』じゃ……」

「それとも何？ こんな弱い女に確保されてるって沖田君に言い

ましようか？」

本当にか弱いなら、今頃振り切って逃げてるわ！！

と、ツツコミたかったが、『沖田君』という単語を聞いて、飲み込んだ。

変わりに言った言葉といえは

「悪魔の落胤かよ。テメーは」

「バカ言わないで。降魔剣や青い炎が使えるわけでもなし」

不毛なやり取りを経て、ファミレスの入り口に付いている鈴の音が鳴った。

ゝ女の子が沢山いたら恋バナするしかないゝ（後書き）

私が書く神楽ちゃんってアルアル言い過ぎ？

く女の勘は下手な占いより当たるく（前書き）

※注意※

- ・土方さんがしょんぼりしています
- ・時雨さんが何様な発言をしています

以下の事に、「ヤバ、キモ」と感じた人はお逃げ下さい（U）（

く女の勘は下手な占いより当たるく

ファミレスの一つの机で、向かい合い座る男女。

ハタから見れば、兄妹か姉弟、恋人同士にも見えかねない光景。

ただ、周りの人間は誰もそう思わない。

向かい合って座っている彼等から

「好きでコイツという訳じゃない」

と、口以上に、全身のオーラがそう語っているからだ。

時雨はさつさとメニューが書かれた冊子を手に取り、活字を目で追う。

一通り見たと思えば、「すみません」とウェイトレスを呼び止めた。

「えー……日替わりランチご飯とお味噌汁大盛りとミートスパゲティと醤油ラーメンと……」

「オイイ！！ 『遠慮』 って知ってる！？ ってか何だよその炭水化物のオンパレード！！」

一体それだけの量が、そんな細い体のどこに入り切るというのだ。

と、一度、聞いてみたい。この女然り、あのアホガキ然り。

奢ってやる度、すごい量と数を注文してたっけ。土方は思い出していた。

で、シメには絶対……

「ハンバーグ……ステーキと、後『あずきアイス』と『鯛焼き』もお願いします」

土方の顔は、よほど狼狽していたのだろう。

ウェイトレスが「お客様？」とこちらを怪訝な表情で窺っている。

そして正面の女は、自分の毒の舌を披露した時と同じように微笑んでいた。

その笑みで、今更ながら、この女が目論見が読めた。

「……次はお前か」

ウェイトレスが去った後、土方はさっさと切り出した。

上司も、部下も、部外者共も……必ず、二言目には奴の京行きの事を口にする。

それも、「片想いの女子が転校する前に告つとけよ」というような声色で。

「何が次なの？」

でも、寄越してきた返事は、思いの他白々しくて。

表情^{カオ}からして、とぼけるのが見え透いていた。

それでも他に客はいる。荒げそうな声を必死に抑えた。

「とぼけんなよ。恋歌^{アイツ}のことだろ？」

「何でそこで恋ちゃんが出て来るの？」

「お前こそ、知り合って間もない奴がよく食うモン知ってるもんだな」

時雨はため息をついて、ウェイトレスが来ないか確認してから言う。

「まあ、勘付いたなら単刀直入に効かせて貰うけど、あの子の事どうおもってるの？」

「……仲間だよ。好敵手とか。親しみを込めた言い方なら可愛くない妹ってトコか」

盛大な舌打ちの後、つつけんどんな、荒っぽい口調でそう返した。

「……それだけ？」

「何が言いたいんだよ」

「貴方があの子を、そんな清く美しい目で見てないでしょってこと」

つまりこいつは……つまり……

俺が一人の男として、一人の女のあいっつを見ている。そう言いたいのか。

その問いに対して、時雨は、まるで機械のように答えた。

「こっちから話す手間が省けていいわ、貴方」

「あり得ねえに決まってるだろ……そんな事」

「どうしてそう言い切れるの？　これから、いくらでも、何でも起きるでしょ」

酷だけど、この女の意見はもはや弁論の余地も無いほど正論だった。

それでも退かずに、反論の言葉を考えている自分は子供だなと自嘲する。

「絶対起こさせねえ。意地でもだ。隊士の士気にも関わるしな」

「流石ね。大勢の部下の為に、一人のいたいけな少女が傷付いてもいいだなんて」

「ツテメエいい加減にしろよ!!」

気が付いたら、時雨の襟元を掴んでいた。俗に言う「胸倉を掴む」というやつ。

女だ。一般市民だ。そんな事は分かっていた。

あれ以上何かを言われると、この耳が正気でいられるか分からないからだ。

「じゃあ俺に……アイツの望み通りにしてやれって言うのかよ」

普通、こんな大の男に、胸倉掴まれ、凄まれたら怯えとまでいかずとも、ひるむ筈。

ところが時雨は、ひるむどころか汚物を見下すような目つきを返して来る。

そして一層低い、ドスの聞いた声で、こう言う。

「何？ 嫌なの？」

その発言に土方は何も言わず、そつと彼女の襟元から手を離れた。

核心でも突いたのかな。と、時雨は意地悪染みた笑みを浮かべて続ける。

「……貴方って、自分の惚れたはれたって話が初めてって訳じゃないでしょ？」

その発言に、目の前の男は、ぜんまいが緩んだおもちゃのような表情をしていた。

追い討ちをかけるように時雨は囁く。

「で、その初恋の人にも近づこうとしなかったんでしょ」

差し詰め、その人の幸せは自分と一緒にすることだ。そう勘違いして。

「勘違いも何も俺みたいなの……」

度肝どころか、全身を抜かれた土方は、やっとの事でそう返した。

しかし、時雨の言葉は止むことなく、より一層痛みを増した。

「そうやって尤もらしい理由をつけて、逃げただけじゃない？」

逃げた？ 俺が？

土方の真っ白な頭の中に、黒いパソコン文字が浮かんでくる。

そんな訳が無い。お前なんか何が分かるんだよ。

口に出して言わないと。言って、こいつの減らず口を止めないと。

「逃げてるわよ」

土方が何も言わないのをいい事に、時雨はもう一度そう言った。

怖いだけでしょ。周りから「好きな子一人護れないのか」って後ろ指差されるのが。

「好きな子が」傷付かないように、辛い思いしないように、なんて嘘。

「ホントは『自分が』そんな想いするのが嫌なだけよ、副長さんは」

その後、カラン。と音がしてテーブルを見ると、時雨が箸を置いていた。

箸を置いた時雨は、手を伸ばして、空になっている食器を纏めて
いるではないか。

「ご馳走様。約束通り不当逮捕の件は黙っとくわ。ハナからどうでも良かったけど」

そういう女の目は、いつも通り飄々としたものになっていた。

先程まで、憎悪を込めた目で辛辣な言葉を投げ掛けていたとは思えないほどに。

憎悪、というより、まるで彼女自身が恋歌になったように。

試しに、もう用は無いと言わんばかりに立ち上がった時雨を呼び止めると

「まだ何か用？ 私、これ以上貴方と一緒にいたくないんだけれど」

と、普段通りの言葉が返って来た。

いや、別に。と言うと、時雨はさっさと店を出て行った。

「……ひとつ教えてあげる」

確かに女の子って繊細で、ほんの些細な事でも傷付いてしまう、花のようなものよ。

でも貴方程度に護られなきや生きていけないほど弱くはないし

貴方の屍一つ見たくらいで、自分も後を追おうとするほど脆くも無い。

大事な男ヤッがいればどんなに辛かろうが頑張れる。そういう強さだ
つてある。

つまり貴方が恐れてる事態なんて、万に一つも起こり得ないってこと。

決してこちらに顔を向けることなく言い連ねてから店を出た時雨。

伝票をぼーっと眺めながら、煙草を吸う。

旨味も苦味も感じない煙を杯に溜め込み、ふうつと煙を吐く。

灰色の煙が一瞬宙に舞い、消えた。

く女の勘は下手な占いより当たるく（後書き）

Q..マジでウェイトレスさんいつ料理運んできたの？

A..き、気を遣って己の気配を押し殺しながら料理を運んだよきつと！

く前に進め。話はそれからだく（前書き）

アテンション！！

恋歌がミツバさんに対して、とんでもねー事思ってる（部分がある）
発言します。

ファンの人申し訳ございません。

何かご意見がありましたら、恋歌に、じゃなくて、私に、仰って下さい。

く前に進め。話はそれからだく

明朝。太陽が頭の先端をやっと出したかのようにかなりの明るさ。

それでも、墓地特有の薄気味悪さは信じられないほど緩和されていた。

荷物を両手に抱えた恋歌が、そこにいた。

寝起きに見た時計は、時刻と、京へと発たねばならぬ日の三日前をさしていて。

どうしても行かなければ。と、重い体を起こして、恋歌はある場所へ向かった。

それが、墓地。

探していた墓石が見つかったのか、恋歌はそこで止まり、花を添える。

その辺で摘んできたであろう名も無き小さな花が季節の割に冷えた風に吹かれている。

それから、『激辛せんべい』と書かれた菓子袋を置く。

恋歌は指先で、墓石に彫られた『沖田家之墓』の文字をなぞり、音無く掌を合わせた。

張り合う前に、病気で亡くなってしまった、いわゆる恋敵が静かに眠る場所。

恋歌が知る限りでは、あの土方が唯一愛す女性が眠っている場所。

気持ちは二人とも同じで、女性の方は一緒になる事を望んだ。

しかし、頑として首を縦に振らなかったのは土方の方。

でも、弟にも負けぬくらい彼女の幸せを願ったのは、土方。

「……ミツバ殿」

恋歌は、墓石の下に眠っている女性の名を、ポツリと呟いた。

三日後、江戸を発ち、京へ行きます。世に言う異動です。

とは言うても、一時的なものらしいですが。でも、きっとすぐには帰れますまい。

その前に、貴女に申し上げたい事が山ほどあるのです。

詩人ではありませぬゆえ、まとまりのない内容、お許し下さい。

真選組結成前からの仲間、弟、それから恋焦がれた殿方……^{ヒト}

貴女は皆と離れてしまって、貴女の苦悩を何も知らぬ私がのうのうと皆の傍にいる。

だから、初めて一人で此処へ来た時、貴女にだけ誓いました。

自分の、この気持ちを押し込めて生きていく。そうすれば、

ほんの少しだけでも貴女が笑顔の裏に背負っていた苦しみが分かると思つて。

貴女が空の上でも苦しくならぬように。空から屯所を安らかに見下ろせるように。

そうする事で、貴女の生前の苦しみを受け継ぎ、背負つてゐる氣でいました。

貴女が、貴女の愛しい人と並んでゐる姿を思うだけで、供養してゐる氣でいました。

でも、きっとそうではないのですよね？

自分が傷付くのを恐れ逃げるために、貴女を利用しただけなのですよね。

それに、私は、貴女の気持ちなんて何一つ理解してなどいなかった

た。

だって……私は、何にも言うておりませんから。

「お許し下さい……長い間そう思い、自惚れていた事を」

その時、カツン。と音がしてハッと振り返る。

振り返った先には、ふんわりした髪質の長い髪が、風になびいていた。

「時雨殿？」

「……やっぱり恋ちゃんだった」

いつもの、慈愛に満ちた優しい笑みでこちらへ来る時雨。

どうして此処に？ と聞くと、お墓参りよ。と当たり前前の返事をした。

恋歌は何となく、これ以上訊かない方がいいような気がして口を閉じた。

「『沖田家之墓』？ ……沖田君ったら、いつの間に死んだの？」

「いや総悟じゃないから！」

次の瞬間かまされた、時雨のボケにツツコンだ頃には、その事を忘れてしまった。

「なるほどねえ……沖田君のお姉さんで副長さんの初恋の人のお墓」

「……うん」

俯いたまま言う恋歌を時雨はしばらくじいっと見つめる。

「他人には理解出来ない深い事情があったのよね、この人と副長さんには」

「……多分」

「だから貴女もいっぱい悩んだのよね。『後から自分が、なんてムシが良すぎる』って」

嗚呼、時雨この雨の言うとおり。

詳しくは分からないが、深い事情があるのは分かっている。

お似合いだったのも、邪魔者が……自分が退かねばならないことも。

自分のこんな感情、土方も、沖田も、誰も望んでない事も知ってて。

だから、捨てようとした土方への好意。

でも捨てる事は叶わなくて。それどころか日増しに膨らんでいくだけで。

『いっそ、あんな人いなければよかったのに』

そんな事を平然と思える自分がいることが、何より憎くて仕方ない。

「何で恋ちゃんはそうまでして自分を傷つけるの？」

両頬を手で包まれ、無理矢理、時雨に顔の向きを変えられた恋歌。

時雨の目は、我が子を叱咤する母のような目つきで。

恋敵がいなくなればと平気で思ってたなんて、嘘。

「平気なら、何でそんな自分を否定するの！？
何で憎んだりするの！！」

「時雨殿……？」

初めて聞いた彼女の張り上げた声に、キョトンとした表情になる。

「それにね！！ 誰も望んでないなんて事はない！ そんな事あり得ない！！」

「何でそう言い切れるのじゃ！！」

「私は貴女の幸せを心から願ってる！！ ……それじゃあダメ？」

そこまで言うと、時雨は頬を包んでいた手をそっと離れた。

脚の欠けた椅子のように、恋歌はドサリと崩れ落ちる。

時雨は、小さく肩を震わす彼女の正面にしゃがみ込み、ふわりと抱き寄せる。

こうされる事に慣れていないのか、ビクリと揺れた身体を一層強く抱き締めた。

「第一、私は、貴女を外道だと思わない」

いっそ、あんな人いなければ……。

本物の外道なら、そう思った次に考える事は、それを正当化する事。

貴女は、そんな事考えた？ と聞くと、考えてない！ と強く即答された。

「きっと、この人、悔しいはずよ？ 『私には出来ない事、全部出来るのに』 って」

だってそうでしょう？

この人が、どれほど手を伸ばそうと、声を荒げようと。

もう、副長さんに届きやしないんだから。

でも貴女は、手を伸ばせば、声を荒げれば。

少なくとも彼は貴女の言いたい事を認識してくれるでしょう？

「出来る事をしないなんて、そっちの方がよっぽど傷付くわ」

「……うん！」

その時、また別の、今度は革底のブーツがなる音がした。

時雨は、優しく恋歌の頭を撫でて、ブーツの主に声をかけた。

「ちゃんと買って来た？ 銀さん」

「おう、お袋さんに百合の花と、お婆さんにコスモス、だろ？」

「何で一本だけ？ 何で此处にジャンプがあるの？ 明らかに釣りで買ったのよね」

「違うんだって。お前のお袋さんと通信したらジャンプが読みたいって……」

「分かったわ。今すぐ精神科行って来なさい」

突如の銀時の登場に恋歌はポカンとしていたが、すぐに立ち上がり、

「じゃあ、異動の準備もあるから」

と墓地を後にしようとする。時雨がとっさに呼び止めると

彼女は、何時ものように明るい笑みを浮かべて、親指をグッと突き上げた。

時雨が微笑み返すと、背中を向け、今度こそ墓地を後にした。

「何の話してたの？」

「脳みそホコリの男には到底理解出来ない話よ」

空を仰ぐと、太陽が姿を現し、さんさんと輝いていた。

「告らなきや、フラれない。でも、絶対に結ばれない」(前書き)

今回が異動篇クライマックスになります。

全国の土方さん、ミツバさん及び、全国の土ミツのファンの皆様。

先に、梨栖さんの必殺技

「スーパージャンピングスライディン土下座シャイニング土下座」

をお見舞いいたします。

「告らなきや、フラれない。でも、絶対に結ばれない」

京行き、前日の夜。

何故、私はこんな夜遅くに、屯所の食堂の椅子に腰掛けているのだろう。

何故、私は食堂の机に、サボって溜まっていた書類を山積みにしておるのだろう。

何故、私の右手に、小筆が握られているのだろう。

何より、何故……

ガツン、と頭に衝撃が降り、痛いと言をさすれば、コブが出来て

いる。

「まああたボーツとしやがってお前は！！ さっさと書けゴルア
！！」

土方の右の拳からしゅううと煙が出ているように見えるのを、恋
歌は涙目で確認した。

からんからん。

音を立てて、小筆が机に寝転がって。

山積みの紙束が向かい側に座っている上司の目の前にまとめて置
かれた。

「お、わったあ……ふぁ……し、死ぬ……」

書類の山の向こうの土方が、溜め息交じりの煙草の煙を吐き出すのを耳で聞く。

今なら……今なら顔が見えない。

覚悟を決めた心。後悔したりしない。ちゃんと言うのだから。

「当たり前だろ。何ヶ月サボったツケだと思ってんだよ」

「気の利かん奴!! 『お疲れ様。良く頑張ったな』の一言は!?!」

「『お疲れさん。猿並みの脳みそでよくここまで頑張ったな』」

「一言何か足さねば何か言えんのかオメーはアアアアア!!」

「俺はリクエスト通りに言ってやったんだよ感謝しろクソガキイイ
イ!!!」

「何を……」

ここまで来て、恋歌はハッとなった。

そうだ。こんな時に、下らない言い争いをしている場合ではない。

これでは何の為にわざと捕まって、一日書類とランデブーしたか
分からなくなる。

「……土方」

「んあ？」

障子の向こうの相手の名前を呼んで、声が帰って来て。

向こうにいるのが間違いなく土方だと確認して、深く息を吸う。

「……好き」

「……知ってる」

考えていた言葉の三分の二以上も言えなくて。

でも、相手にはちゃんと伝わって。

でもその声は決して、喜んでいる声色ではなくて。おまけに

「お前も知ってるだろ。一緒にはいれないんだって事ア」

聞きたくなかった言葉を、言われてしまった。

「……嫌ほど知っておる。でもな……もう、いい」

もう、いい。

そう。もう、いい。

土方は土方で、ミツバはミツバであるように、恋歌は恋歌だ。

自分の言い分を突き付けるのに、他の誰の意思も関係ない。

「私はミツバ殿じゃない。普通の街娘でもない。それでも、一緒にいたい」

「ンなもん、俺の知ったこっちゃねえよ」

「……その台詞、そのままそっくりバットで打ち返す」

低い声で、そう呟いた恋歌は、椅子から立ち上がった音がした直後。

土方は、書類の向こうにいたはずの恋歌に、胸倉を掴まれていた。

二人を隔てていた書類の山は崩れ去っており、彼女の身体は机の上にある。

行儀悪いだろ。離せよ。言いたいことは山のようにあった。

それでも何も言えなかったのは……

「刀振り回してるとか、上司だぞとか、そんなモン散々考えたわ阿呆!!」

でも、今ここで、こんな事を言うのは。

そんな事が小さく思えるくらい、好きで仕方ないから。

それくらい好きな人に対して、一緒にいたいと思って何が悪い！！

「……傍に、隣に置いて欲しい。そしたらもう後生我が尽言わんから！！」

「悪いが、その我が尽だけは聞いてやれねえ。聞くわけにいかないんだ」

その時、少しずつ、掴まれた着流しが緩んでいくのを感じた。

完全に緩んだ頃には、着流しを掴んでいた手の甲の感覚も消えていて。

先程まで、あんなに力ごもって告白、と言うより脅迫していた恋歌は俯いて机の向こうに立っていた。

まるで、燃料切れしたブリキのように少しの間だけそこに佇んでいた。

その顔が、少し寂しそうに微笑んでいるように見えて。

しかしそれは一瞬の事で、すぐに彼女は踵を返して食堂を後にした。

「……御休み」

聞こえるか否かくらいの声量での台詞を捨て台詞に、恋歌は音もなく寝室へ向かった。

『御休み』

取り残された土方は、聞こえる筈のない御休みを言い返す。

もう何が何だか分からない。

ただ、さっきの恋歌の笑顔を見た瞬間、頭の中で昔の事が映像化されていた。

武州を出る時、見送ってくれた寂しげ笑顔を浮かべた彼女の事を。

自分は一切振り返らなかった笑顔の事を。

旅立ちの朝。

恋歌は手荷物と一緒に、「局長室」と書かれたプレートをくぐった。

そこには人柄のよさそうなもうすぐ三十になる男がいた。

彼こそが、恋歌も含み、大将と崇める近藤勲。こんどういさお

近藤は、娘を嫁にやる父親のような表情でいる。

「すまねえな。俺が代わってやればよかったものを」

「いえ、大将である貴女様が京におられるほうが皆は不安がります」

年相応の声色で、言う恋歌に、近藤は満足した表情などしない。

「辛くなったら途中だろうが帰って来いよ！ 責任は俺が……」

「局長」

自分よりうんと若い、年頃の少女にそう呼ばれ、近藤は諦めたように肩を落とした。

「……ちゃんと『ただいま』って言ってから敷居またぐんだぞ？」

「はい」

恋歌は一切振り返ることなく、屯所を出た。

「最近の京は例年以上の治安の悪さだと聞くわ、道中も着いた先でも、気を付けてね」

「お土産に八橋買って来いヨ！」

「ありがとう。分かった」

屯所を出たら、神楽と時雨が当たり前のように目の前に現れ、道を共にしだして。

見送ってくれるのは嬉しいけど、一人で大丈夫だから。

そう言いたかったけど、彼女等に着いて来た九兵衛を見ると何も言えなくて。

そんな他愛もない会話をしていたら、あっという間に駅に着いた。

「僕も道場同士の手合わせがあって、その内京へ行くことになったんだ」

駅に着いた途端、唐突に切り出した九兵衛。

「なら詰め所まで遊びに来てくれっ！　いつでも歓迎じゃ！」

「モチロ……」

改札口前が見えた時、九兵衛が言葉を止めた。

そして、改札口売店の前に新聞売り場の辺りを見つめている。

何事だと思って、彼女の目線を追って、固まった。

「あ、マヨラーアル」

まさか。きつと夢だ。

そう思った事が、神楽の言葉で現実の物なのだと冷静に処理した。

『その我が侘だけは聞いてやれねえよ。聞くわけにいかないんだ』

昨日、ああまで言って徹底的に突き放したくせに。

何故今更？

「……じゃあ元気で」

「アレ？ 九ちゃん、ホームまで見送る言ってたのに……あ、朝ご飯まだだったアル」

「あ、大変。昨日の家計簿まだつけてなかったわ」

待て。そう言えぬ間に、土方の姿を確認した三人はさっさと駅を後にしていく。

恋歌は諦めて、土方に歩み寄る。

別に上司として、部下の旅立ちを見送る事に何の不思議もない。

上司の行為を無碍にするのは、部下として出来ない。

だから、おう。と小さく挨拶をして

「何じゃ。荷物持ちにでも来たか？」

何時も通り。何時も通り。心の中で何度も言いながら嫌味を飛ばす。

いつもなら

『大人をアゴで使うなガキ！ 自分で持て！！』

と嫌味で返してくるものだが、今日の彼はそうしない。

引ったくりのように、恋歌の手から鞆を取り、さっさと改札を通ってしまう。

「あ、オイ！」

あまりにもあり得ない行動に、呆氣にとられていたが、恋歌は土方の後を追った。

そうしてホームの女性専用車両前で足を止めた二人。

特に言葉も交わす事はなく。だが、決して離れる事はなく。

本当にどうしたんだ。と思い、思い切って土方の顔を覗き込んでみる。

「うっわ！ 顔赤っ！！ 熱か！？」

「ちっ、違エよ！」

いきなり声をかけられたのと相俟って、声の上擦る土方。

そんな声を聞かなかったかのように、恋歌はホームの外へ体を向ける。

「待ってろオオオオ！ 医者呼んでくっ！？」

今にも走り出しそうな恋歌の右手首を、鞆を置いて掴んで止める。

「風邪じゃねえよ！」

都会の駅特有の騒がしさも、ものともしないような声。

「違うのか？」

「……お前が昨日、その、あんな事言うからだが……」

その言葉で、何時も通りのあどけない顔が、昨日の恋歌に戻っていく。

「……嫌だったら忘れろ。お前の得意分野であろう」

「確かに困ったよ。でも、嫌じゃなかった。嫌ならここまで来るかよ……」

掴んだままの右手首を引き寄せて、一緒について来た身体をそのまま抱き留める。

相変わらず、自分の胸に、腕に、すっぽり収まる程度の小さな身体。

ただ、病院で同じ事をした時の違いは……彼女の身体の具合。

「ひえっ!?! ちよっ……やっ……」

突然の事で驚いたのか、何とか離れようとする恋歌。

しかし、本当に嫌がっているとは思わないので、一層強く抱き締めたら抵抗を止めた。

本当は、昨日の夜、こうしたかった。

手を伸ばして、彼女を止めて、そのままぎゅうつと抱き締めて。

でないと、このまま永遠^{とわ}に会えなくなってしまう気がして……

「……置いてかないでくれよ」

いよいよ、苦しいぐらいに抱き締められて。

まるで、空っぽのペットボトルから僅かなジュースを絞り出すような声でそう言われて。

まだ何か言葉を紡ごうとする土方に、恋歌は彼の背中に手を回した。

隊服の上着を握って

「置いてかん。絶対、置いて行ったりせんから。ちゃんと帰ってくるから」

『間もなく、3番線に、電車が到着いたします。白線より……』

それが、魔法の言葉のように、恋歌は握っていた手を離し、土方の腕からスリと抜けていく。

それからそばに置かれてある鞆の取っ手を掴んだ。

間もなくやって来て、開いた電車の扉の向こうへ歩く。

乗ったところで、また振り返って

「帰って来たら今みたいに甘えてやるからな!!」

『電車が発車します』

勇気を出して言ったその一言の直後にアナウンスがなり、扉が閉

まる。

間もなくして、電車は江戸から遠く離れた京へ、決められたレールを辿って進んでいく。

電車が豆ほどの大きさになっても、見送っていた土方。

ようやく見えなくなつて、懷から煙草の箱とライターを出そうと、上着を探る。

その時一瞬、シトラスの甘酸っぱい香りが立ち込めて鼻をくすぐったような気がした。

「お嬢さん。何処まで乗っていくんだい？」

「仕事で京まで行くんです」

京へ向かっている電車内。相席になったサラリーマンに聞かれて恋歌はそう答えた。

「へええ。お若いのに大変だなあ」

「おじさん。……夢ではないのですよね？」

へ？ ああ、夢だったらいいのにねえ。

と、慌てふためきながら言うサラリーマンの言葉は、もう恋歌には届かなかった。

今自分は夢を見ていて、目が覚めたら屯所の布団にいるんじゃないかな。

ドアが閉まる前に言ったあの言葉の土方の返事。

優しい苦笑いを返して、優しく頷いたように見えたのは、幻覚じやあないんだよな。

信じていいんだよな？

「報われたって、そう信じても……それを喜んでも、いいんだよな……っ」

f
i
n

「告らなきや、フラれない。でも、絶対に結ばれない」（後書き）

上着を探っていた手を止め、土方が帰路へ付こうとしたその時

「どうなったアルか！？ 全然見えないヨ！！」

「わ！ちよっ……押すなってバカ！！」

「ちよっと何して……！？」

喫煙所の影から妙に聞き慣れた声がする。

まさか。と背後を見れば、妙に見覚えのある連中が雪崩のように倒れていた。

「アイタタ……銀チャン！ 新ハイ！！ 何やってるネ！！」

「しょーがないじゃん！！ 僕、写真に夢中だったんだからさ！！」

と、使い捨てのインスタントカメラを持った新八。

「全く、新八君たら。デリカシーってものが無いんだから」

「……お前のその手のソレ何。明らかにビデオカメラだよなソレ？」

銀時は無表情でビデオカメラを持つ時雨を問い質した。

「でも李麻君に至っては撮った写真人に送りつけようとしてんのよ？」

「師匠！？ 何でバレた！？」

『こんどーさん！ えらいこっちゃだよ……』という文面のメール送信画面の携帯を持つ李麻が騒ぎ出す。

「若！ 警察の不祥事が撮れましたぞ！！」

「全部ピントが僕に合わせられてるじゃないか！！」

「心配要りませんわ若。こんな事もあるうかと、芽衣子が携帯に……」

「お前等揃いも揃って何やってんだアアアアアアア！！」

土方とシャウトに、野次馬達は静まり返り、一斉に土方に言う。

「あ、どもども。お疲れ様でしたー」

「待て」

そそくさと駅を後にしようとする一行と、低い声で呼び止める土方。

その顔は、先程まで少女一人にオロオロしていた人間と同じには見えなくて。

「撮ったモン全部消してから行け」

「あ！ 空飛ぶマヨリンだ！！」

「え？」

背後を指差した李麻の言葉に、素直に首を傾けた土方。

あ、と気付いて振り返った頃には、もう誰もその場にはいなかった。

「オイコラ待てゴラァ……」

行方の知れなくなった彼等を追おうとして、ピタリと足を止める。

まあ、いいか。

走り出そうとした時に立ち込めた甘酸っぱいこの香りが、そう思わせた。

f
i
n,

〜第二部やるとき、初めての人への配慮もすべし〜（前書き）

皆様、前回までの「異動篇」に温かいメッセージをありがとうございます
ハブッ！！

銀「メインの俺達そっちのけで脇役達のキャツキャウフフとか誰得
なんだよ！！！」

新「ッて言うか！！ 異動篇で僕の台詞一個だけ！？ いくら何でもその扱いはヒドすぎんだろ！！！」

神「新八はどうでもいいとして、私があんまり出てないってどういうことアルかああん！？」

時「予告の時点で散々忠告したでしょ！？ 読者の人から本気で苦情来たの知ってるのよ！？」

わ、ワタシ仮にも作者ですよ！？ リンチなんてあんまりじゃない！？？

銀「そうか。分かったよ作者^{バカ}」

新「作者^ム」

神「作者」^{カス}

時「作者」^{ヘンタイ}

作者って書いて誹謗中傷すんなアアアアアアア！！

あ、ちよつと武器はダメ。冗談抜きで死ぬ……

ああああああああああああああああああああああ……

く第二部やるとき、初めての人への配慮もすべしく

こうして、万事屋一行は、ちやぶ台を囲むようにして座る。

「よし、作者はゴミ箱に出せたな」

主役席に座る銀髪頭の男、坂田銀時さかたぎんときが言う。

彼が主役席にいるのは、彼がここ『万事屋銀ちゃん』という自営オーナー業の経営者だからで。

その左横に従業員の志村新八しむらしんぱち、右横に神楽かぐら。

そして、銀時の正面に出浦時雨いでつらしぐれが畳に腰を落す。

「さて、こんな感じで何だかんだで始まった『うつくも第二部』だが……」

「まさか出鼻を脇役にくじかれると思わなかったネ」

「作者の暴走も大概にして欲しいわね」

と三人が思っている事を口々に言う中、新八だけが無言で俯いていた。

「……時雨さんは何だかんだでほとんど出てたじゃないですか」

神楽ちゃんもそれにくつつく形で割りと出てたし。

銀さんは時雨さんに土方さんと接触する理由を与えるという役割

があつたし……

「でも僕は何？ 最後のオマケで盗撮してただけじゃん。下手したら別になくていいじゃん……」

新八の放つ、重々しい負のオーラに三人は

「貴方の影の薄さを私のせいみたいに言わないでくれる？」

「男のひがみはみつともないアル」

「だってそれが新八だろ？」

と、とどめを刺すように毒舌で一斉攻撃をする。

新八がちゃぶ台に突っ伏したのを確認し、三人は「さて」と仕切りなおす。

「俺思うんだよ。第二部を始めるにあたって、過去を振り返る必要があるって」

「そうね。第一部見てなくて、第二部からこの小説を読み始めた人達の事も考えなきゃ」

「そうアルな。私達で過去を語って、うつくもの世界観を分かって貰おうヨ！」

と煎餅をかじりながら三人は言う。さも真面目に会議しているかのように。

「じゃあ、第一部をダイジェストに見て貰えばいいんじゃないですか？」

「そんな浅ましい手が通用すると思ってるアルか」

「ソレあわよくば『第一部も見て貰おう』っていう欲が現れてるじゃない」

「俺達はその手間を省くための話をしてんだよ。じゃあ俺がさくつと言おうわ」

昔、昔……ある所にどこにでもいそうな眼鏡がありました。

眼鏡は、いつものように仕事場へと足を向けている途中、血の水溜りを踏みました。

おかしいと思った眼鏡が見たのは、血だるまで転がっている精神破壊兵器。

眼鏡の悲鳴を聞きつけた酢昆布娘と絶世の美男子は下へ降り、精神破壊兵器を発見。

寛大な心の持ち主である絶世の美男子は行く当てのない精神破壊兵器に従業員として雇う事に……

神楽の飛び蹴りが顔面にクリティカルヒットした銀時は説明をやめ、倒れた。

倒れた瞬間に、残りの従業員たちは殴る蹴るの暴行を加える。

「誰が眼鏡だアアアアア！！ 普通に少年でいいだろうが！！」

「絶世の美男子って誰アルか！！ そんな銀チャン宇宙中探してもいないネ！！」

「精神破壊兵器って私の事？ ねえ、そうなの？ ホコリサンドバツク」

「一部虚偽はあるけど、私達の出会いのシーンはこの説明で十分でしょ」

「よし、総集編終わりー……」

「待ってくださいよ!!」

さっさとちゃぶ台から立ち上がろうとする三人を新八は止める。

「まだネックの話はして無いでしょ!？」 時雨さんの生い立ちの話がまだ!!」

と言う新八に、銀時達はあからさまに面倒くさそうな顔を向ける。

「入れなきゃダメなのかソレ」

「人間そう長々と過去は振り返らないものアル」

「……まあまあ。あの子の意見も一理あるわ。私が大雑把に説明します」

最初に会った男は、ただのクズ。次に会った男は、最低な女たらし。

その次に会った男は自己中心野郎。また次に会った奴は、自己至高主義者で……

「大雑把過ぎるわアアアアアアアアアア！」

「だから最初に大雑把だって断っておいたじゃない」

「いや、断ってても限度があるから！ アンタ自分の生い立ち何だ
と
思
っ
て
ん
だ
よ
！
！」

「私が説明するヨ。過去篇は昨日の事のように思い出せるし、見て
る
ヨ
ロ
シ
」

それは、生を受けたばかりの赤ん坊にとってあまりにも残酷な真実。

「ま、魔王様。貴方のお子です！ 姫様にあらせられます」

「姫では世継ぎにはならぬ。我妻に伝えよ……その赤子、捨てよと」

「しかし……」

「黙らぬか！！ 我がバルムンク王家に魔女王などあってはならぬのだ！！」

だが、どうしても捨て切れなかった母親により、秘密裏に育てられた赤ん坊。

何時魔王にばれるやもしれぬ恐怖の裏に、確かに幸せはあった。

だが……

「魔王である余への背信行為の罪の元……死ぬが良い!!」

「キャアアアアアアア!!」

母の死を目の当たりにする少女。

「私の……古い知り合いに……シノビギルドを経営している男が……
いい……」

「お母様アアアアアアアアアアア！」

こうして、少女の過酷な旅が始まった。

ロード・オブ・ザ・SHIGUREのTHE・LAST
PRI
NCES

「何だコレエエエエエエエ！」

「神楽ちゃああん！？ 何この中二っ気満載な過去篇！ お前の
耳にはそんな風に聞こえてたの！？」

「銀さん。一つ言ってもいい？」

神楽の説明にツツコミを入れる男二人に、時雨は唐突に口を開いた。

「新八君。いつの間に起き上がって参加してたの？」

「あ……」

「そーいえば……」

そこかよおおおおおおおおおおお！

「あ！ ヤバイアル銀チャン。もう尺がそんなに残ってないヨ！！」

「何ィ！？ じゃあ、最後にサクッと説明すんぞ。神楽、時雨！！」

「」
「応っ！..！」
「」

うつくもの世界観は第一部『銀魂』美しき蜘蛛の巣にかかりて』

第一部から第四部、長編名『過去篇』第四十部から第五十三部を
ご覧下さい。

「結局そうなのかよオオオオオオオオオオ！」

新八のシャウトは、遂に誰の耳にも留まる事はなかった。

く第二部やるとき、初めての人への配慮もすべしく（後書き）

劇場版銀魂第二段やるっていう未確認情報が流れているのですが…
…ホントなんでしょうかねえ？

ホントだったらいいなあ

く就職活動するならハローワークに行けく(前書き)

私、地味に長谷川さんが好きです。

（就職活動するならハローワークに行け）

出かける場所もなく、娯楽を嗜むだけの金もなく。

ただぼうっとしていた万事屋四人。

銀時は、事務用の椅子で熟読しきったジャンプ越しに黒電話を眺める。

この黒電話が最後になったのは、どれほど前なのだろう……

塩も砂糖も嘗め尽くした彼等が胃に入れられるものは此処にはない。

耐え難い絶望と空腹が彼等の心を支配する。普段、滅多な事で動じない時雨でさえ。

「定春君って、一体何食分になるのかしら」

と、乾ききった声でうわ言を挙げる始末。

その時、インターフォンが鳴った。

今日は誰を招待しているわけでもない。つまり……

「お客様だぞ野郎共オオオオオオオオ！！ おもてなししろオオオオオオ
オ！！！」

「「オオオオオオオオオオオオ！！」」

などと叫びながら、四人一斉に玄関へ突っ走る。

そして、「いらっしやいませー！」と勢い良く玄関を開けた先には……

「銀さん。皆。ヘルプミー」

見慣れた甚平姿が彼の体にでかかど『貧乏人』と書いてある。

そして、その成りには不釣り合いな高級なサングラス。

銀時を始めとする、従業員達は見知りきった顔で。

この男が客だとしても、金がない事は割れているので素早く玄関を閉めた。

「オiiiiiiiiiiii!! ちよつと待てエエエ!! せめて話くらい聞いてくれてもいいじゃん!!」

ダンダンと玄関を叩くけたたましい音は、しばらくの間鳴り続けた。

男の名は、長谷川泰三。はせがわたいぞう元々は入国管理局局長という立派なポストを持っていた男だ。

その男の転落ぶりは、本人曰く「一時のテンションに身を任せた結果」と言っている。

しかし実際は、皇子のペット取りを銀時達に依頼し、無碍にされた上に皇子に暴行。

上から切腹命令が出されたが、怖気つき妻と夜逃げしようとする

前に妻に逃げられて。

その後就職を目指し職に就き、クビにされてまた職に就き。

その結果、借金と家賃を踏み倒し、住む家すらも失った男だと時雨は聞かされている。

そして長谷川という名こそあれ、多くの人間が彼をそう呼ばない。

「金も無いくせに何しに來たアルかマダオ。帰れヨ。目障りなんだヨ」

「依頼が成功したら後で金を払うって約束するから！ 頼むやってくれよ！！」

マダオ。それが彼につけられた愛称というにはあまりにも親しみの無い呼び名。

「そう言って実際払ったためしがねーだろうが!!」

「まあまあ銀さんそう言わずに。聞くだけでもいいじゃないですか。用件は何です?」

「……俺を雇って下さい」

しばしの間、沈黙が続いたがやがてジャンプを読んでいた銀時が口を開く。

「ぱっつあん。お客様のお帰りだ。お見送りして差し上げなさい」

「こっちです。長谷川さん」

「何でエエエエエ!?」

今と廊下を仕切るドアに挟まれながら長谷川は強く抵抗する。

新八は、長谷川ごと閉める気でドアを圧迫している。

「うっせー! 帰れ! ウチにはアンタまで養う金なんかねーんだよ!!!」

「いや、冗談だって!! 今のは軽いアメリカンジョークだから!!
ちゃんと用件言うから!!」

そこまで言って、やっと新八がドアから手を離した。

ひゅうぜいと息を整えた長谷川は今度こそ用件を言う。

「俺の職探しを手伝ってください。出来れば、初給料でも十万は堅いやつ」

「そんな仕事あったら僕等が紹介して欲しいわアアアアア！」

「何だよソレ！！ 普通に金が欲しいだけじゃねえか！！」

二人がギヤイギヤ言い出すのを時雨は、お止めなさいと言い、制止した。

そして改めて長谷川に向き直る。

「ごめんなさいね、ウチの野蛮人二人組が。ウチもお金がなくて気が立ってるのよ」

「あ、いや……」

若い、それも並々ならぬ美貌を持つ女性にそう言われ長谷川の反

応が固まる。

そういえば初めて見るなこのイカすねーちゃん。新しい従業員？

などと思いながら長谷川は時雨をじっと見る。

「要するにお金さえ手に入れば働けなくてもいいんでしょ？」

「え？ あんの？ そんな方法が！！」

「それどころか。お金が無くとも労働しなくとも楽になれる方法があるわよ？」

見える。彼女の背後に菩薩ぼさつが、慈愛で全てを包み込む菩薩が見える。

長谷川のグラスンの奥の瞳はどれ程輝いていた事だろう。

だが、銀時達には、読者には、この後の彼女の発言が手に取るように分かった。

ゴトン。長谷川の目の前に投げ捨てられたのは、鞘から抜かれた時雨の小刀。

「ソレで腹搔っ捌きなさい」

長谷川は、猫並みの速さで銀時に駆け寄り、耳打ちをする。

「銀さん。何あの人。俺とあの人初対面だよね？ 別に恨まれるような事してないよね俺」

「色々訳あって野朗ってだけで恨めしいんだよ」

「恨み？ 初対面に死ねって満面の笑みで言える程の恨みって何？」

菩薩が消え、能面を付けた夜叉を背後浮かばせた女が、あ。何なら、と続ける。

「死ぬ前に腎臓の一つでも売って、売ったお金を此処に置いてくれると嬉しいわ」

「死ねって言った上に金寄越せって言ってきたんですけどオオオオオオオオ！！」

結局、長谷川をより良い企業へ就職させるイコール報酬もデカイと納得し、依頼を受けることにした一行。

「つつつてもなあ……このご時世大企業どころか就職すらまともに出来んご時世だよ？」

加えて、長谷川は幕命を呑まなかったという前科がある。

つまり、幕府関係の仕事は無理と思われる。となると……

「お水商売しかないんじゃないかしら」

「「「だよねー」「」」」

「それなら俺にもいくつか知り合いがいるし、頼めばどっか入れてくれんだろ」

ここ、かぶき町には履いて捨てるほどの数の風俗店がある。

うち何軒かに、銀時の知り合いが従業員がいたり、オーナー経営者がいたりする。

多少見てくれが悪かろうと、どこかに引っかかるだろう。

そう考えて、彼等は風俗店街に歩を進めた。

「すみません。いくら万事屋さんのお願いでもマダオはちよつと…

…」

「そんなマダオじゃあお客さん逃げちまうよ」

「え？　　ないわー。こないなマダオ客取れるかいな」

「万事屋はん堪忍え。あて、マダオだけは嫌やわあ」

行く店行く店、門前払いする上に全員必ず「マダオ」と言い捨てる。

万事屋一行の期待と甘い考えが店を訪ねまわる度に薄れていく。

店を訪ねる度、長谷川の心が傷付いて行く。

「俺なんかした？　　何で門前払いされた上に罵詈雑言浴びなきゃダメなの？」

「落ち込むなって長谷川さん。まだあるから。ホラ着いた」

ホラ、と銀時が指差した先の店には可愛い文字で『かまっ娘倶楽部』と書かれてあった。

「お前等俺に何さす気だアアアアアアアアアアアア！！」

「いや、仕事……」

「確かに仕事探してとは言ったよ！？　でもオカマにしてくれとは言っていないから！！」

「でもマ……長谷川さん、オカマは嫌だとも言っていないでしょ？」

「今マダオって言いかけなかった！？　確実にマダオって言いかけたよね！？」

店先が騒がしかったのか、中から化け物が一人出てくる。

銀時を見て、常人より遥かにでかいアゴが開く。

「あらヤダ、パー子じゃないの！　お店手伝いに来てくれたの？
嬉しいわぁ」

「違うわよ。貴方達のために新しい子連れて来てやったのよ、アゴ
美ちゃん」

と、投げキッスするオカマに、ドン引きしている長谷川や吐き氣
に襲われた銀時の代わりに時雨は言った。

「あずみじゃポケエ！！　って、新しい子？　アンタが？」

「ええ、こちらの全く以って蛇足な汚物、略してマダオちゃんよ」

「略し方違うから！！　もうちよつと愛嬌あるから！！　そんな笑
える余地の無い略じゃないから！！」

マダ……長谷川のツツコミが、聞こえなかったかのようにアゴ美は長谷川を見渡す。

目つきが気持ち悪い。長谷川は表情を引き吊らせた。

「ママァ〜！ パー子達が新しい従業員について連れて来たわよぉ〜」

そう言いながら店に入っていくアゴ美の声は、段々小さくなっていった。

恐らく、店の奥にでもいる『ママ』という名のモンスターを連れに行ったのだろう。

「待てエエエエ！ 俺はここで働くなんて一言も……」

「じゃあな長谷川さん。店長の前では『ここで働かせてください』以外喋んなよ？」

「普段はマダオでいて、ホントの名前はちゃんと隠すんだヨ？」

いい仕事したな。お金は何時入るのかしら。

などと言い合いながら、帰っていく万事屋一行に、長谷川の悲鳴は聞こえなかった。

否、聞こえないフリをした。

三日後、銀時は散歩中にグラサンをかけたオカマが店先に放り出されているのを目撃した。

くキャプ翼はサッカー少年の教科書く（前書き）

Q：前回、時雨さんは普通にアゴ美と話してましたが、彼女はアゴ美を男だと思っているのでしょうか。女だと思っているのでしょうか。（灘さんからの質問）

A：汚物だと思っています。

〈キャプ翼はサッカー少年の教科書〉

覚えている者はいるだろうか。

かつて全国が期待したストライカーの存在を。

覚えている者はいるだろうか。

そのストライカーが所属していた『大江戸FC』と言うチームを。

大江戸FCで数々のボールをゴールポストに収め

数々のファンタジックな夜を過ごし数々の伝説を残した男。

挙句それが祟って、彼はあまりにも早い引退試合をせねばならなくなかった。

その試合で、渾身のパワーを以ってのシュートは、大事な我が子で受ける羽目になった。

最悪の現役時代に幕を閉じ、今、彼は……

「シュートオ!!」

「ゴゲフ!!」

ゴールキーパーをしながら考えると、小学生の放つシュートを顔面で受けた男。

「お前スッゲーな今のシュート!!」

「トーゼンじゃん！　俺が女遊びで引退した奴に負けっかよ」

嗚呼、俺は何をやっているのだろう。

男……甘羅尾^{あまらお}は鼻から赤い液体を出しながら、ボンヤリとそう考えた。

現、地域の弱小チームの監督は、練習の度に、現役時代の事を思い出す。

倒れたまま、ふと腕時計をしてある右手首を目の前に持っていく。

時間を見て、ガバツと起き上がる甘羅尾。

もうすぐ、頼んでおいたコーチが来る時間だ。土手から人影が四つ見える。

「ア、どうも。お忙シイ中ありがとうございますマス」

「あーいえいえ、貴方が頼んだコーチがね。急に出れなくなったから代わりに俺達が……」

妙に聞き覚えのある声。妙に見覚えのある面構え。

こいつ……まさか

「あ、あんた等ハー!! あの時ノ!!」

「あ、甘羅尾……」

引退試合の際に、お膳立てをしてくれた連中の一部だ。

結局、甘羅尾は立ててくれたお膳を自らひっくり返したのだが。

ただ前回と違うのは、銀髪頭、チャイナ娘、眼鏡に加えて、新たに美女が加わっている。

美女はただニツコリ微笑むと、その口を開いた。

「甘羅尾さんね。TV拝見して知っています」

「エー!? ホントニ!? ドノ試合? ドノ試合が気に入って……」

「女遊びと酒に浸って引退しなきゃならなくなった上にその試合で無様に散った人でしょ?」

眉一本動かさず、笑顔でさらりと、言葉をオブラートに包まない発言。

甘羅尾は立ったまま、動かなくなった。

そして、気が付いた少年達はコーチとして来た胡散臭い四人組み

に駆け寄る。

「わー、コーチだあ」

「甘羅尾が連れてきた奴だー！」

信頼ないの監督より、外部から来たコーチ。

「よしお前等。今からサッカーの真髄をレクチャーするぞ！
まず手本を見せる」

という銀時の合図で、残りの三人がフィールド内に入る。時雨の前立つ。

新八の蹴りで、ボールは空高くに、ロケットのように旅立つ。

旅立ったボールは一際高く上がり、一瞬止まったと思うとそのま

ま降下して行く。

ゴールの十メートル程上の地点で、既に中を待っていた神楽の足がボールを捉える。

そのフォームはさながら……

「オオオオバアアアアヘッドシューーーーーーシューーーーーッ!!」

時雨が何か反応を示す前に、ボールは綺麗にゴールポストに沈んだ。

「「「カッケエエエエエ!!」」」

衝撃的なシュートに、子供達は歓声を上げた。

「これは勝利のためには必要不可欠な必殺シュートだ。覚えるまでウチに帰さねえからな」

「オイイイイイ！！ ソレ違うウウウ！！ 普通のサッカーに不要ウウウウ！！」

「アホか。コレくらいしねーと、他のチームに出し抜かれる一方だぞ！」

「どこのキャプ翼だよ！！ 出し抜けねーよ！ だって反則だもん！！ 試合で使えないもん！！」

という監督の言葉が聞こえないかのように、子供達は例のシュートを習おうとしている。

「身体後途中に浮かせてシュートを打つんだよ！！」

「今だ！ 飛ぶアルウウウ！！」

「飛べるかアアア！！ こいつ等普通の小学生！！ 才前等バケモンと一緒にすんナ！！」

結局、報酬ナシ。の脅し文句に屈し、普通のシユートのし方を説明する事にした四人。

「いいかぁ！ 本当に優れたストライカーってのはな。足先云々じゃねえ、心で打つんだ」

監督とのミーティングとは比べ物にならない程、静かに聞いている子供達。

そして、練習の瞬間に入った。そして子供達は思い思いにシュートを打つ。

引き続きゴールキーパー役をしている時雨はそのシュートを片手で止める。

全てのシュートを、あまりにも簡単に止められるので、子供達は面白みを失くしたようだ。

「困るヨ。あのオネーさん。せめてもうちょっと手を抜いて……」

と、時雨に言い寄ろうとする甘羅尾を銀時は止めた。

制止の為に掴まれた肩から、微かに震えが伝わってくる気がした。

「アレは野郎相手に優しさは見せねえ。ガキ共の方が強くなるしかねーんだ。ムートンショット打つしかねーんだ」

「無茶言うナ！！ コックになれっテカ！！ サッカー止めてコックになれっテカ！！」

「無理ならゴムゴムのスタンプくらいは出せるようになれヨ」

「もっと無理ダロ！！」

という、ベンチサイドのやりとりが終わった直後にフィールドの子供達は休憩に入った。

休憩が終わり、全員がスポーツドリンクを鞆に入れ、フィールド

に立つ。

今度は子供たちがゴール付近を固め、時雨がボールの正面に立っていた。

銀時はメガホン越しに声を挙げた。

「次はP Kだ。いかに攻める側にプレッシャーを与えるかによって勝負が大きく左右する！！」

P Kが決勝点になった試合は少なくはない。

つまり、P Kを制するものは試合を制するのと同じなのだ。

子供達は驚くほど従順に練習に臨もうとした。

「お前等なんでそんな従順ナノ！？ 怪しくないノ！？」

監督のことばをちくわ耳で聞いたゴールキーパー以外の子供達は
ゴール前に例のポーズで並んだ。

ゴールキーパーには、同じように股間の前に手を添えている新八
がいる。

「目の前のこの女に、自分の最も憎い存在を重ねろ！！ 睨め！！
そして叫べ！！」

「「「「くたばれ！！ 甘羅尾！！」」」」

「何で全員俺の事ダヨオオオオオオオオ！！ 一人くらい違って
てもいいダロ！？」

甘羅尾のツツコミを右から左に受け流し、子供達はもう一度叫ぶ。

「「「監督やめろ！！甘羅……お……」」」

子供達がバタバタと倒れて行く。子供達は一様に、股間を抑えて
痙攣している。

見れば、新八の股間に、直接蹴りを入れている時雨の姿があった。

「ちょっとおおおお！！ 何してんの！！ 何やってんの！？」

「お前それはあんまりじゃねえか！！ それはヒドすぎじゃねえか
！！」

「酷いのは貴方の方でしょ？ どうして私があの下衆に重ねられな
きゃならないのよ」

「ヤッベーよ姐さん。マジでキレてるよブチキレてるよご乱心だよ」

時雨の据わりきった目を夕日がより一層恐ろしく銀時の目に移した。

夕日が、大人五人の影と、子供十一人の影をくっきりと作っていた。

十一人の影が体育座りをしていて、一つの影が死にかけており、一つの影が疲れ切っていた。

「お前等、今日は色々な事を学んだだろう」

「学んだって何を？ 反則技しか教わってないヨネ。後はボコボコにされただけだヨネ!？」

これから、いくらでも伸び悩む時期もあるだろう。いくらでも困難に直面するだろう。

でも、思い出して欲しい。伸びた時の喜びを。達成感を。

そして、常に自分の傍にいる仲間や……監督コーチの事を。

「……いい監督じゃねえか」

欲に狩られて、己の身を滅ぼすな。体でそう語ってくれてる、いい監督さんだ。

と、再起不能な眼鏡を引きずって、後にする臨時雇われのコーチ達。

その背中を見て、子供達は思った。

それ、反面教師じゃね？

くキャプ翼はサッカー少年の教科書く（後書き）

皆さん！今週のジャンプ見ましたか！？見ましたか！？

土方さんの……ん？ 何か負のオーラを感じる気がする……。

恋「まさか、お義兄様にいがいらっしやっただなんて……挨拶してねー」

……そっとしておこう。

〈吉原炎上篇リメイク・序章〉（前書き）

真っ暗で底の知れない宇宙の中を漂う船。行き先は、彼等の仕事先の蒼く美しい星、地球。

しかし船は地球の遥か手前の惑星で止まる。

「ありゃ？　もう着いたの」

「野暮用だよ。獣を上司に持つ部下は大変なんだ、俺達だけじゃどうにもならねえ」

男達がやり取りを終えて、船を数歩分出て、広がる光景。

屍。屍。生きた人間の気配などまるで感じられない。

「……こんな惑星に何の野暮用があるのさ」

「心当たりねえか？　一惑星に住む奴根こそぎ殺っちまえる奴に」

宇宙海賊、春雨。彼等を盤上の駒の様に扱い、上で高みの見物を決め込む存在がある。

その者達が、その力を恐れるあまり長期の任務だと、この惑星に飛ばした人物。

十年かかると推定された任務を、その人物はたったの二年でやってのけた。

しかしその者達は、徹底して彼女を帰還させようとしなかった。

「ああ、あいつね。地球で俺が暴走した時のストッパーになって貰おうってこと？」

「ま、そーいう事だ」

ザリッ。砂利を踏む音が向こうから近づく。土煙で人影がぼんやり見える。

そして、やがて姿を見せた足音の主は、男達を見てニコリと笑って

「もお、迎えに来んの遅いよ！ 団長っ！！」

黒髪のおさげ。黒ブチ眼鏡から覗く空色の、大きなアーモンド形の瞳。整った目鼻立ち。

真っ赤なヘソだしルックのチャイナ服から、白い肌と、良好なスタイルが晒されている。

ミニスカートから伸びた足は、黒いニーソックスとハーフブーツが泥と血で滲んで、乾いて染みを作っていた。

彼女が背中に差していた紺色の番傘は、乾いた血が赤黒くこびりついている。

「迎えに来ただけ有難く思いなよ。上の連中は帰す気なんか更々なかったんだから」

「うー、それもそっかあ。でもこんなトコに何年も閉じ込められちゃ流石に堪えるよ」

でもでも、団長達がお迎えに来たって事は仕事があるって事でいいんだよねえ？

彼女は、無邪気な笑みを浮かべながら聞く。

「そういうこった。さっさと身支度して仕事といこうや、宇宙海賊
春雨・第七師団総長殿」

「アイアイサーッ！」

妙な少女を乗せた船は、今度こそ地球に真っ直ぐ向かっていった。

吉原炎上篇リメイク・序章

出会った少年との関係は、スリの被害者と加害者。

「母ちゃんかもしれないんだ。あの人は……おいらの母ちゃんかもしれないんだ!」

涙を堪えて訴える少年に、影に潜んだ蜘蛛が目を見開く。

真実を何も知らない少年に、蜘蛛は動く。

「……連れて行きなさい。むこうの世情に精通している人間がいた方がいいでしょう？」

少年の願いに、立ち塞がる壁。

「その童^{わっぱ}と浪人……生かして地上に帰すな」

牢獄に身を置き、
護る者の為に生きる番人。

「月詠でありんす」

常夜の国を照らす太陽。

「戦いな……降りの中の手前と」

「アンタは殺すにも値しない」

「かたいこと言うなよ。たかがクイズじゃねえか」

「ふーん、サムライってのは海賊よりも物騒だねえ」

敵か、味方か。真相は大きな後ろ盾に葬られたまま。

「私は、自分の戦場は自分で決める。血ではなく、心で」

「神楽ちゃんは僕が護る!!」

「誰かと問われれば『一般市民』と答えるけれど、今夜はこの名を名乗らせて貰いましょうか……」

ぶつかる巨大な壁に、彼等は真っ直ぐ突き進む。

お前なんぞに、俺たちの陽は消せやしねえ

銀魂く美しき蜘蛛に睨まれてく
吉原炎上篇リメイク、
近日より更新開始。

く財布スリ合うも多少の縁く（前書き）

どうも。先週のジャンプのセンターカラーの土方さんが（タダで）欲しかった梨栖です。今回から「吉原炎上篇リメイク」はっじまるよー！

私「お前の中の土方さんってせいぜい三番目だろ。一番好きな私が貰った方が土方さんも幸せだ。私にセンターカラーだけ寄越しなさい」

友達「いやだ」

私「ごめん（・ω・）」

く財布スリ合うも多少の縁く

空は平等だ。誰にでも分け隔てなく平等に陽の光を浴びせてくれる。

でも空は、時には私達に試練を与える。

夜が来たり、雨が雲で太陽を隠してしまったり。

それでも私達は、決して迷ったりはしなかった。

明けない夜などない。止まぬ雨は決してない。

何より心に太陽があれば、私達は迷わないでいられる。

でもその時、私達は分かっていたなかった。

陽の光が強ければ強いほどに、影をくつきりと闇を浮かび上げさせる事を。

それは、時雨が神楽と新八と共に、お登勢のスナックで一杯引っ掛けようとしている時だった。

ガラリと店の玄関が開いたと思ったら、銀時と薄汚れた8歳くらいの子供がズカズカと入って来る。

銀時は首根っこを掴んだ子供を適当に椅子に座らせ、自分はその隣に腰掛けた。

「どこでこさえて来たか知らないけれど、私達は面倒見ないわよ」

「誰が俺の子だったよ!!」

銀時が怒り任せにまくし立てて施した説明を纏めるところいうことらしい。

すれ違い様にこの子供とぶつかり、レシートとクーポンの詰まった財布をスられた。

しかし、まとまった額が詰まった、子供の財布を銀時はその手の中に収めていた。

出て来た所を成敗し、パフェを奢らせ警察に突き出そうとした時。

この子供は「どうしても金が入用なんだ」とある場所に連れて行った。

そして……

少年の入用を聞き終えた後、店はお登勢とキャサリンの大きな笑い声に包まれた。

「こんなちんくりんが、吉原一の女、オトすって!？」

「ガキが発情シテンジャナイヨ！　ウチニ帰ッテ、母ちゃんのチチデモノンデナ!!」

「笑い事じゃないわ、お登勢さん。キャサリンさん」

笑いがヒートアップしていく二人を嗜めた時雨は、子供をキツと睨みつける。

「珍しいもの見たさにスリ働いているのなら今すぐ止めなさい。吉原は貴方が出入りしていい場所じゃないの。お分かり、坊や」

『珍しいもの』を『日輪様』と言いかけそうになったのを、どうにか防いで時雨は言った。

地下都市吉原桃源郷。中央暗部の職種に支えられ、幕府に黙殺される超法規的空間。

又の名を常夜の街。男の天国で、女の牢獄。

その牢獄の頂点に君臨するのが、太夫である日輪、その人である。

彼女が気に入らなければ、いくら大金積もうと大名だろうと將軍だろうと座敷にさえ上がらない。

こんな薄汚い子供、以ての外だ。

直接、日輪に会う事はおろか、彼女を取り巻く役人や用心棒、百華に殺されかねない。

しかし、何も知らない子供には鬱陶しいお説教以外の何者でもなく。

「坊やじゃない、清太^{せいた}だクソババア」

「時雨さん早まらないで下さいイイイイ!!」

「サツにパクられるヨ時雨姉ちゃんンンン!!」

「なら警察もついでに消せばいいでしょう!? 離しなさい、私も若いのよ!!」

「親がないオイラが金を手に入れる方法あったら……限られている」

今にもクナイを投げそうな時雨を、新八と神楽が押さえているという凄まじい光景を背に、清太はかたり始めた。

「吉原で女に会うつったら、莫大な金が必要だろう? その日を生きるのもギリギリなお前が、何でそんな事してんだ?」

「オイラ……子供の頃に親に捨てられたんだ」

清太は、着物をギュツと握って、水浸しの雑巾を絞るように声を絞り出した。

親の顔など覚えてはいない。

物心がついた時から清太の目の前にあったのは、彼を拾ってくれた老人だった。

しかし、その老人も三年前、病気で帰らぬ人となってしまう。

ただ、その死に際に、老人はこう言っただけらしい。

『恥じるな清太。お前は捨てられたんじゃない。救われたんだ。闇の中から、お前を救ってくれたんだ』

お前の母は今も常夜の闇の中、日輪の如く、燦然と輝いておるわ。

「母ちゃんかもしれないんだ……あの、オイラの母ちゃんかも知れないんだよ！」

会いたいんだよ！ 会って話したいんだよ！！

でも何度呼びかけても、叫んでも……あの人はオイラの方を見ようともしない！！

手なんか、まるで届かないんだ。

「だからオイラ、一時でも会おうとして……客として、あの人に会おうって……！！」

机をダンと叩いて清太はそう言った。

老人の遺言あたりから、借りてきた猫のように大人しく話を聞いていた時雨。

忘れる筈がない……この子が八年前の……

「本末転倒だよ」

遂に泣き出した清太に、お登勢は煙草をふかしながら言った。

「母親に会う為にそんな事して、母ちゃん喜ぶと思うかい？……働いていきな、ここで」

吉原の女に会えるだけの金は出しゃないけどね、少しは足しに

なるだろうさ。

だからスリなんて、もうにどとするんじゃないよ。

顔を見上げてその言葉を聞いていた清太は、もう一度俯いて、また涙を流した。

……りがとう……ありがとうございます。

「俺の財布の10万の方もしっかり稼いでくれよな」

「クソババアって言った事は50万でなかった事にしてあげるわ」

「だから！ 空っぽだったってんだろ！？ つーか何でさり氣に増えてんだよ！ 何で新たに要求されてんだよ」

利息。そう言って店を出た二人。

お登勢は、それを区切りのように、「さてと……」と灰皿に煙草の灰を落す。

スナックの従業員一人と一体は目を光らせた。

その数秒後、少年の断末魔が見せの外にまでこだまする。

（財布スリ合うも多少の縁）（後書き）

このように本来あった神がかったシーンをザクザク切ってオリジナルシーンをザクザク入れていく。それが梨栖流「原作リメイク」でございます。イエア！！

例えば、ぱっつあんの「D●」と言われた時のシーン。好きなのですが、載せていいのか分からないので割愛させて頂いたりするんです^^；申し訳ございません。

話は変わりますが、今度別サイトで書かせて頂こうと思っている学パロ土ミツ小説ですが、秋頃投稿させて頂くために、今からちよつとずつ書いていってます。私恋愛小説苦手すぎて笑えない。

切実にどなたか弟子入りさせてください。（。^O^。）

く綺麗な薔薇には棘があるく（前書き）

ツッキーーーーー！！うをおおおおお！！ツッキ
イイイイイイイイイイ！！俺だアアアアア！！結婚
してくれええええええええええ！！あいらびゅう
ううううう！！ひゃっはああああ！！きゃー！！きゃー
ー！！パソコンの前で愛を叫ぶぜ！！ひゃっは……あ？

は（。D。；）っ！

すみません、取り乱しましたへへ；

「綺麗な薔薇には棘がある」

少年の決意をよそに、常夜の国では牢屋から手を伸ばし色を売る大勢の女達がいた。

自分が明日生きるために。着物の衿から白い素肌を晒す。

それで引つかかる客もいれば、

「触るな下種が。そんじょそこらの女に用はない。ここに日輪と言う江戸一番の女がいると聞いた」

倒幕の志士としては是非に勝利の杯に酒の尺でもしてもらいたいものではないか。

侍がそう発言した途端、遊女の一人が妙に冷めた表情を浮かべ、鼻を鳴らす。

「日輪様があんた等みたいな田舎侍、相手にするか。帰りな、下種が」

そこまで言った遊女の胸倉を田舎侍の一人が掴んで引き寄せた。

「貴様、武士を愚弄するか！ 手討ちにしてくれる、そこに直れ！」

「あ、あんたらこの街でこんな事して、タダで済むと思ってるのかい！？」

ここは吉原。地上^{うえ}とは全くの別世界。

「……女の国だよ」

その時、その店の入り口付近から、吐息が聞こえた。

今にも柵ごとへし折って、引きずり降ろそうとした田舎侍の手が止まる。

吐息の聞こえた方向を向ける。そこにいたのは、飾り気こそないがとびきりの美人。

前髪をクナイを模した簪で纏め、団子状にして縛ってある薄い金髪。

黒い着物のスリットからは、網タイツ越しの白く引き締まった足が見える。

ほお。と、男が感嘆の声を挙げた。

「いるところにはいるではないか。上玉が……いくらだ？」

「わっちを買いんすか？」

凜とした声で、田舎侍に問う美人。

「いくらだ、申してみよ」

早くその女性と座敷に上がりたいのか、焦れた声でにじり寄る浪人。

女性の臉から、紫の瞳が顔を出し、初めて田舎侍達をみやった。

「お代ならもう……もらいんした」

その台詞と、田舎侍の一人がドサリと地面に伏したのはほぼ同時。

遊女達が、慣れたような目つきで見ている中、男達には何が起こったのか理解できなかった。

彼女がヒールを二三度鳴らし、正面に立った時、彼女の右手に小刀が握られているではないか。

男達は各々の刀の柄に手をかける。

「貴様、百華！」

「吉原の自警団、百華の者かアア!!」

いざ尋常に、と鞘から刀身を出そうとした右手に痛みが走る。

女に斬りかかった足を止めれば、クナイが刺さっているではないか。

次の瞬間、足音が聞こえて　まずい　と思ったより早く、女が自分達の背後にいた。

「ぬし等……薔薇にはそつと触れねば棘が刺さるぞ」

後ろで血を噴出しながら倒れた浪人達を背に、女は再び煙管の煙を吸う。

「この間聞いたお前の話からいくと……」

夕暮れ。お登勢の店で管を巻いていた銀時は、椅子一個分空けた隣に座る時雨に言う。

お登勢は買出しに出て、実質店番を任されているようなものだ。

「清太の母ちゃんっていうのは……」

「そうね。あの子を産んですぐ死んでしまった。あの子と日輪様に血の繋がりはないわ」

「知ってて何も言わないたあ随分じゃねえか」

「言った所で信用しないわよ。なら自分の目で、耳で確かめればいいじゃない」

違う？ と訊く時雨に、銀時は俯いた。

「……貴方がどうするつもりか興味はないけど、吉原がどういう街か分かってる？」

「男の夢を叶える場所だろ？」

「違うわよ。……吉原には裏の顔があるって言いたいのは」

考えても見なさいな。氷水をカランと煽り、時雨は呟いた。

吉原とは、地上の法が一切通用しない治外法権の地として有名な国である。

だがそもそも、何故そのような事が可能になっているのか。

それは他ならぬ、ある男一人の力によるものだ。

「それもお前の話に出てきた、確か……『夜王』だろ？ お前は互角以上に渡り合ったって」

「別に。激昂してる相手の隙を突けば誰でも倒せるわよ」

「へえ……」

そう呟いて立ち上がる銀時。そのまま店を出ようと玄関に手をかけた時

「……連れて行きなさい。吉原むじょうの世情に精通している人間がいた方がいいでしょう？」

吉原にも、来た客や、役人の憩いの場に。という意味を込め、団子屋がおいてある。

その店で、役人二人が腰掛けて何かを話していた。

「そういや近頃とんとみかけなくなったな、あの小汚ねえガキはどうしたんだイ？」

「ああ、清太の事か？」

そうそうと、人差し指をぷらつかせて肯定する。

子供が遊女を、ましてや江戸一番の花魁、日輪を買おうという滅多にない話、あつという間に吉原に知れ渡った。

「あー、それが最近ちゃんとした奉公先が決まったらしくてなあ」

以前は毎日野良犬のような小汚い面をしていたなあ。と役人の一人が言う。

しかし最近、ペースは週に一回程度になったが小奇麗になって、表情も年相応になっているとか。

「で、いくら溜まったんだ？」

「は？ 何が？」

「何がって……まさか、お前エさん……」

ある事に気が付いたらしく、一人の役人はここで言葉を止めた。

反対に、もう片方がニタリと性悪な笑みを浮かべる。

「だってなあ、あんな野良犬みてえなガキが日輪に会おうなんざ無理な話なんだよ」

それに、一日一杯引っ掛けるには丁度いい感じだったんだよ、あ

の金。

そこまで聞いた役人は

「オイオイ酷エ奴だねエ。じゃあホントに一銭もないの？」

「無いね」

後ろの椅子では、銀髪で着物を妙な着流し方で来た男が、団子を食していた。

「……んなこったろーとは思ってたぜ」

まあいいか。と、伸びた役人達を見下ろして銀時は思い直す。

最初から金で会える相手などではないのだから、こいつ等がどうしようと知った事ではない。

「おい姉ちゃん！いくらだ」

「お代は結構です。スッキリさせて貰えたので」

懐の財布をあさる銀時に、団子屋の娘はそう言った。

「清太の知り合いか？」

「ここでは有名でしたので。子供の来る様なところではないのでね」

人の良さそうな笑みを浮かべたまま話す娘の声を背に、財布の中を拝見する銀時。

娘の声が聞こえなかったかのように、これっぽっちか などとぼやく。

「日輪と清太を会わせようとお考えで？」

「うるせーガキにいつまでも住み着かれちゃあ迷惑なんであ。金がないきやどう日輪に会えばいい」

「日輪は吉原最高位の太夫。よほどの上客でないと会えません。諦めた方がよろしいかと」

この吉原桃源郷は地上とは別のルールに縛られた一個の国。

上の常識は通じない。ルールを破れば、二度と戻れなくなる。

袖からクナイを出して、構えている娘の言いたい事は分かった、
が……

「悪いな。俺ア上でも下でも手前のルールで生きてんだ」

その瞬間、娘が跳躍し、クナイを雨のように振り下ろす。

一本くらいかすりはしたかと思った時、上からヒュツと音がした。

木製の何かを、帯で擦ったような音……

次の瞬間、銀時の木刀は、娘を完璧に捕らえた。

「曲者ー！！曲者ー！！」

着地と同時に、駆けつけた応援。

今度は綺麗な着物を動きやすく着崩した、いかにも『百華』という女二人。

その背後に、見慣れた人影が現れた。

「あっ！！」

「はうっ！？」

首の後ろを強く叩かれ、気絶する百華達。倒れると同時に、人影が見えた。

人影と合流して、銀時は目的もなく吉原の街を走り出した。

「どうやら既に清太君の事も、私達がいる事も割れてるみたいね」

しかし、百華の者が顔色を変えない辺り、時雨の事までは知られていない様子だった。

「どうすんだ！？ このままだと清太達、殺されるんじゃないのか
！？」

「殺されるなら私も貴方も同じ。それに大丈夫よ。あの子が何か手を打つ筈だから」

「何だって!?! オイラの金が使い込まれた!?!」

路地裏で、全てを知った清太は叫んだ。

「うん。清太君がお金を預けてた店番さん、店のお金にも手を出すような手癖の悪い人らしくて……」

「アノヤロオオ! 心入れ替えて真面目に働いて金溜めたってのに全部無駄だったのかよ」

両手で頭を抱える清太に、新八はフツと微笑む。

「無駄なんかじゃないよ。僕達ちゃんと見てたもの」

スリなんかしてたら、恥ずかしくてお母さんに会えない。って

一生懸命働く清太君

「そんなもん！ 何の意味があんだよ！！ 金がなきゃ母ちゃんに会えない……何の意味もないんだよ！！」

懐に入れておいた溜めた給料を地面に投げ捨てた。

「意味ならあるよ」

清太の両隣に座っていた、新八と神楽が立ち上がった。

「これで堂々とお母さんに会いにいけるだろう」

「元々、母ちゃんに会うのに金がいるだなんて、おかしい話だったアル。会いたい時に会うのが親子アル」

第一、お登勢がそのような金を稼がせるために、清太を働かせたとは思えない。

「依頼金は、しっかりと万事屋が頂いたヨ」

足元に落ちたコインを、拾って懷に仕舞う。

「無理だよ!! 金も無しに花魁に会うなんて! 吉原は地上の常識が通じる場所じゃあ……」

シャキッ……何か金属の擦り合う音がして、新八と神楽は上を見上げる。

二人で清太を抱えて、跳躍してその場を離れると、新八達がいた場所には多数のクナイが刺さっていた。

「な、何だ!？」

屋根の上から、顔に縦横一本ずつ傷を入れた、金髪の美女がそこにいた。

それを見た瞬間、清太の顔が青ざめていくのが分かる。

「あれは……顔の傷は……」

「誰アルか？」

屋根の上の足音が増え、屋根の上には綺麗に武装した女達で埋め尽くされていく。

百華。吉原と吉原の掟を犯す者を処断する吉原の自警団。

その百華を率いる、吉原最強の番人、『死神太夫』と恐れられる
……

「月詠^{つぐよ}でありんす。以後……よしなにつ!!」

百華達と共に屋根から飛び降りた彼女は、挨拶代わりにクナイの雨を降らせた。

〈綺麗な薔薇には棘がある〉（後書き）

Q：原作リメイクの区切りってどのへんなの？

A：基本的にアニメを見直しながらやっていますので、基本AパートBパートで分けております。ただ、「ここカッコイイ！ここで切ろう！」と思ったらAパートの途中だろうがBパート越そうが、そこで区切ります^^

要するに事務的には決めておりません。

く晴れの日にも雨傘差す奴にはご用心く(前書き)

よく、神谷さんと森久保さんと間違えます。

く晴れの日にも雨傘差す奴にはご用心く

何が起こった。新八の脳内はつい数秒前の事を断片的に思い出していた。

確か、百華の頭が仲間を率いて自分達を狙い、殺そうとした。

神楽が食い止めようとしたが、遊女の厚底の下駄のお陰で思うように動けなくなる。

その隙を突かれ、月詠に清太への攻撃を許してしまう。

もう駄目だ。せめて清太の盾になろうと、彼の上に伏せたその瞬間。

ガランとクナイを弾く音がして、見上げれば見慣れた銀髪がいて
……

助かった。と彼の名を呼ぼうとしたら……

「よお。待たせちゃったな？」

最高の笑顔でそう言った、頭にクナイを刺した銀時に新八は何と声をかけようとしたのか忘れてしまった。

クナイの刺さった頭から、夕立ちの五秒前のように血が垂れる。

「あの……すいません銀さん、あの……さ、刺さってます」

その瞬間銀時は素早くクナイを抜き取り、血まみれの、キョトンとした顔を新八に向ける。

「え？ 何が？」

「いや、今、完全に刺さってましたよね、ソレ大丈夫ですか？」

「え？ 何言ってるの、刺さってねーよ、何も。ホラ」

血まみれの顔で言っても説得力が無いという事は誰も何も言わずとも分かる。

しかし本人は断固として認めない。

「だから刺さってないって言ってじゃん。コレはアレだよ？ ちょっと掠って血ィ出たー。みたいな？」

「いやでも……」

「いい加減にしろお前！！ 刺さってないって刺さった本人が言っ
てんだから、刺さってねー事でいいだろーが！！」

果たして彼は、今自ら「刺さった」と自白したと気付いているの
うか。

相変わらず正面に横に冷たい視線を浴びながら銀時はその場に佇
んでいた。

「あのさー、お前さー、ホントにさー、空気読めよ！ ここは流せ
よ！ ここは刺さってない感じにしとこうよ。俺メツチャカッコ悪
いじゃん。完全に全部打ち落とした顔してたじゃん。メツチャ恥ず
かしいじゃん」

新八の肩に腕を置きながら耳打ちをした銀時は、そう言ってから
しばらく呼吸を整え、あ。と呟く。

「ヤベーよ恥ずかしくて振り向けねーよ。笑ってない？ 皆笑ってない？ 大丈夫！？」

「わたちの攻撃を全て打ち落とすとは大した奴。何者じゃ、ぬし」

銀時達の真向かいにいる月詠が一步前にでて言う。

「氣ィ遣ってくれてる！ 全部打ち落した事にしてくれてる！ い子だよ。あの子いい子だよ！」

「攻撃ィ？ そいつぁ悪かった。俺アクナイがのんびり散歩してんのかと思ったよ。おい、清……」

と、清太の方を見やると、彼の頭にクナイが刺さっていた。

「清太アアアアアアアアアア!!」

「銀さん、コレエエエエ! ちよつ、コレエエエエエ!! 颯爽と助けに来といて、思いっきりぶっ刺さってますよ!？」

何しに来たんですかアンタアアア!! という新八のツツコミに何も言えない銀時。

その時、百華の群れの中にいた一人が、手を挙げた。

「あのー。あの、すいません。私、見ちゃったんですけど……」

その者の言う事には、銀時が清太を助けるためにクナイを弾いた（弾ききれていなかったが）。

弾いた内の一本が空中でバックスピンして、切っ先がそのまま清太の頭に刺さったらしい。

言い逃れしようにも、彼女の証言の後、自分も見た。と大勢の者が証言している。

更には、銀時が弾きさえしなければ、清太に刺さる事はなかったと証言する。

「デメエ等アアアア！ 死ぬ覚悟は出来てんだろぅな！」

「ごまかしたアアアア！ 怒って結局全部人のせいにしたアアアアアアア！！」

「ぬしもわっちのクナイの餌食となるがいい。わっちの殺した童の所に、今すぐ連れて行ってやろう」

「超氣イ遣ってくれてるよオオオ！！ くだいくらい自分が殺った事にくれてる！！」

クナイを構えながら言う月詠に、銀時の目からじわりと透明の液体が浮かぶ。

「あ、もうそれ以上氣イ遣わないで。優しくされると……泣きそうに……なる、から」

「何メンドクセー事言っただアアア!!」

「氣イなど遣っておらん。わっちがクナイを投げねばこうはならなかった。過程がどうあれ、原因を作ったのはわっちじゃ。わっちが殺した」

「ヤメテホント。お前の気持ちは分かったから!俺がやったんだア!!」

初対面で、しかも敵同士とは思えない会話に、百華達は武器を振り下ろすタイミングが掴めない。

「わっちがやったと言っ取るんじゃ」

「いや俺だ!!」

「いやわっちじゃ」

「俺……だ?」

ドスツと鈍い音がして、銀時の頭に再びクナイが現れる。銀時はバタリと仰向けに倒れた。

「銀さん!!」

「銀チャン!!」

クナイが飛んで来た方向を目で見やった時、今度は新八と神楽の胸元にクナイが叩き込まれる。

二人がドサリと倒れると、見事に川の字が完成する。

「奴等は全員わっちが始末しんした。そう鳳仙様に伝えなんし。後始末はわっちがしておく」

その言葉を聞いた百華達はそうして鳳仙の元へと駆けて行った。

その背中を見えなくなるまで見送った月詠みは、川の字に死んでいる三人と一人の元へ歩く。

「おいっ!」

そして躊躇うことなく銀時の額のクナイを抜いた。その時、スポンと音がした。

「起きなんし。さっさとせんと、今度は本物のクナイを叩き込むぞ」

クナイの切っ先の吸盤で掌を吸っては離しを何度か繰り返しながら言う。

むくりと起き上がった彼等の感想は

「あり？　生きてる」

もはや死んでしまったものと思い倒れて見せたが、そう言われれば痛みも感じなければ血も出ていない。

と、冷静に考えていくと、ある疑問がふと出て来る。

「あれ、銀さん。時雨さんと一緒じゃなかったんですか？」

「ああ。追っ手を引き付けとくから清太のトコ行けって言われてな」

『時雨』その名前を聞いた途端、月詠の顔色に狼狽が見て取れた。

「いやまさかアンタがアイツの話に出てきた元相棒さんだったとはな」

「驚いたのはわっちの方じゃ。時雨が地上に出た後、ぬし等の元で寝泊りしているとは……」

銀時達は月詠の誘導で、吉原の鉛色の空に近いパイプの上を歩いていった。

先頭の彼女がパタリと止まり、振り返る。

「門は見張りがいる。この中を通って行くがよいわ」

ガコンと音がして床から抜け道らしい闇が広がった。

「一日半はかかるがいずれ外に出られる筈じゃ。時雨も見つけ出して後を追わせる」

さっさとここから逃げろ。次ぎ来たら本当に殺す。

そう言う月詠に清太は握り拳を作っておずおずと口を開く。

「オイラは母ちゃんに、日輪太夫に会いに来てただけだ！」

「だったら尚更帰るがいい。わっちにぬし等を逃がせと頼んだのは

誰でもない。その日輪じゃ」

「母ちゃん？ 母ちゃん。オイラの事知ってるの！？ オイラがここにいてるって」

「吉原の楼主鳳仙は、ぬしと日輪が接触する事を恐れないなんし」

日輪は八年前、まだ赤ん坊だった清太を連れ、吉原を逃げ出した。

「オイラを、連れて……」

二十年前、侍と天人との争いにより一度は姿を消した吉原。

しかし天人がその利に目をつけ幕府に取り入り、地中深くにひっそりと復活させた。

それがここ吉原桃源郷。

中央暗部の関わりがある故に、幕府にも黙殺される超法規的空間。

幕臣達が、公には出来ない政の秘事を語るに利用するのは自然の話。

言ってしまうえば、悪政をはぐくむ温床になっている。

それに酌をしている花魁なら、国が転覆しかねない情報の一つや二つ知り得るのだ。

故に彼女等は一度入ったが最期、二度と太陽を拝む事を許されない。

方々から売り飛ばされた女は商品として扱われ、使い物にならないくなるまで酷使される。

そして、使い物にならなくなったり、逃げ出そうものなら即刻始末される。

終わることなき絶望を、空けることのない夜を生きねばならない。

幼かった月詠は、吉原こしげに売られて初めて知った。

だが、絶望の中物のような目をした女の中に、一人だけ違う目をした女がいた。

それは、禿かむろをしていた花魁の反感を買い、折檻部屋に入れられた頃の話。

真っ暗な部屋の襖が開き、隙間から蛍光灯の光が差す。

外から、一人入って、自分の傍で屈む。

「まあ、アンタ。亀吉ンとこの禿だね？　アレは何かと下の者に当り散らすやな女だからね」

濡れタオルで、殴られた跡をぽんぽんと当てられ、月詠は身じろいだ。

「気持ちも分かるが、アンタも姐さまに逆らってばかりだと殺されちまうよ？」

「殺したければ、殺せばいいんじゃない」

こんな牢獄にいつまでもいれば、自分も初めてここへ来た時に見た遊女達のようになってしまう。

こんなところで物に成り果てるくらいなら、殺された方がどれだけ楽か。

そういうと、その女は牢獄ねえ……と呟き、よいしょと立ち上がった。

「アンタ、地上^{うえ}に行けば自由になれるとでも思ってるのかい？」

アンタみたいな奴はね、どこ行ったって自由になんかなりやしないよ。

所詮人間なんぞ、地球って檻に入れられたエテ公さ

地上も地下も変わりゃしないよ。広いか狭いかだけの話さね

檻が狭いだ何だ不貞腐れてる奴はそりゃ不自由だろうさ。鉄格子
見つめるだけの生活してんだから

ホントの不自由ってのはね、自分で心の中に檻を張っちゃう事さ

「死ぬだ何だ喚いて逃げ回る暇があったら、檻の中で戦いな……手前と」

その五月蠅いエテ公がいなくなりや、少しは檻も広く感じるだろうさ。

と、握り飯を残して女は去って行った。

女の目は、死んではいなかった。

常夜の闇の中にいた彼女に、小さな太陽が出来た。しかし彼女だけではない。

死んだような目をした女達も、日輪の陽気な笑顔に触れる時だけ、顔が綻んでいた。

やがてその小さな太陽は、この吉原を照らす大きな光となったのだ。

それが日輪その人だ。

「わっちが己が顔を傷つけ女を捨てたのは花魁になるのが嫌だったわけでも、百華として吉原を護るためでもない」

ただ、幼かった自分に太陽をくれた日輪を護るため。

そして清太は、その日輪が命を賭して護ろうとした存在。

吉原で子を産めば、母も子も始末される。それでも彼は、この世に生まれた。

掟を犯せば、地の果てまで追いかけられ、始末される中、地上に連れ出された。

この辺りは、確か時雨の話に出て来ていた。

確か、子供を見逃して貰う代わりに、死ぬまで花魁としてここにいろ。

その鳳仙とやらが、日輪にそう脅して連れ帰ったのだと。

「わっちはぬしを死なせるわけにはいかぬ。帰れ、主が死ねば……」

「『日輪の苦勞が水泡に帰す』……そう言いたいのかなあ？」

少女らしき声に、全員がバツと振り返る。

ベージュ色のマントに、紺色の番傘をさした人影に、全員の表情が凍りついた。

く晴れの日にも雨傘差す奴にはご用心く（後書き）

くという話の中、時雨さんは何処で何をしていたかというところ

追っ手を撒いた時雨は、屋根の上から銀時達がいそうな場所を探していた。

騒ぎの起こっている場所にいると思ったが、その騒ぎが収まったらしい。

「あのガキが雇ってた浪人って……」

「ああ、『死神太夫』にやられたみたいだぜ」

そんな話が聞こえたが、月詠は恐らく本気では殺していまい。

きっと芝居か何か打っただけのはず。と大して心配しなかった。

なら、何処に行けばいいのか、それも五分も経たぬ内に察しがつく。

以前、訳ありの賊を逃がそうとした時、二人で組んで始末したフリをして逃がした抜け道がある。

時雨の足は迷う事無くそこへ向かった。そういえば……

「銀さん、あの子に気を遣わせてないかしら」

根っからの善人故に、初対面の人間でも必要以上に気を遣う月詠を思い出した。

「遣わせてたら殺してやろうかしら」

「うっ!!」

「どうしたんですか銀さん」

急にブルツと震えた銀時に、新八が問う。

「いや、何か殺気を感じたような気がして……」

「今この場面で冗談にならない事言うのやめてくんない!？」

あながち冗談でもない事を、誰が知っている由もなく。

く多めに改行して台詞入れると何かカッケーく（前書き）

おおなんてこと。ブルー霊子さんが……沢城さんでしたねっp^
なぜ、なぜゲストキャラに沢城さんなんてお人を呼べたんだ梨栖さ
ん不思議。

WJは最後の方で出てきた見廻組の信女ちゃんに一目惚れしてしま
いました。

「のぶめ」ってなんだよ！響きが可愛すぎるだろうチクショウ！
（個人的に恋歌と戦ってたらしいのに）

く多めに改行して台詞入れると何かカッケーく

「『日輪の苦勞が水泡に帰す』……そう言いたいのかなあ？」

突如現れた、謎の人物。

紺色の番傘のせいで顔は見えないが、はみ出てる長い黒髪、声から女である事は分かった。

そして、その姿に神楽は冷や汗を禁じ得なかった。

「アレは……あの傘は……」

紺色の番傘が、バスンと閉じられ、黒髪おさげ、黒縁眼鏡の可憐

な少女の顔が現れる。

「夜兎……何で、何でこんなところに!？」

「どうやらせっかく用意してくれたアンタの逃げ道も、手が回って
いたようだぜ」

「……違う」

月詠は、真っ直ぐ少女を睨み付けながら、否定の言葉を呟いた。

「アレは鳳仙の回し者じゃない。アレは……」

「その子置いてってくんない？　そしたらお兄さん達は見逃すし、
お姉さんの背信行為も黙っとくから」

今にも戦場に変わりそうなこの場には、あまりに不釣り合いな陽気
な声。

「ぬしの言葉を信じて言う通りにする謂れはないぞ」

「お姉さん。もう一度だけ言うよ？　その子を置いてってちょーだい」

一度目より、幾らか声のトーンを落とした少女から、途端に殺気が溢れ出す。

前線に立つ銀時達に、神楽は口を開いた。

「銀ちゃん、ヤバイアル。あいつ、飛び切りヤバイ匂いがするアル」

血の匂い……幾多の戦場を生き抜き染み込んで来た血の匂い。

本物の、夜兎^{やと}の匂い。

「何で……こんな……!？」

神楽が言葉を途中で止めたのは、目の前に、あの少女がいたからだ。

「ハロー！」

ハミングのBGMでも流れてきそうな声色から、風圧を纏った傘が振り回されている。

風圧だけで、どこかへ飛んでいきそうなところを、銀時達は踏みとどまって耐える。

しかし、耐え切れず全員が何メートルかの単位で後ろへ下がった。

隙を突いて、背後に回った月詠が、その後ろからクナイを投げて

攻撃する。

殺ったか。そう思ったのも束の間の話で、次の瞬間には目を見開いた。

素手でいや、正確には人差し指と中指で挟んで攻撃を止めていた。

「仕事仲間にこんな物騒なモン投げるなんて……酷いよ、ねっ！」
ビジネスパートナー

「ぬあっ!!」

メジャーリーグのスラッガーを凌ぐスイングで、傘を月詠に当てる。

月詠は大きな当たりをしたボールのように数十メートル先に飛ばされた。

「行ったよ……副団長」

そんな呟きが聞こえて、まさかと思ったとの時。

丁度月詠が地面に落下しかかる地点に、別の色の番傘を持った奴が現れる。

「あいよ……」

今度は男の声。その男は、これから落ちてくる獲物を心待ちに、赤い番傘を構えた。

「夜兎というものは、地球人の女の子一人を仕留めるのにこうも人員を割くものなのかしら」

乾いた声と共に、後頭部に空けていた左腕が何者かに捕まれるような感覚がした。

あれ？　と思った頃には、もう自分の体は宙を舞い、背中を思い切り地面に叩き付けていた。

背負い投げをされたのだと、痛めた背中を感じながら男はそう理解する。

背負い投げを極めた瞬間に、相手との距離をあけたその人間。

鉛色の空に、揺れる白髪のが、事なきをえて着地した月詠の視界に入る。

「久しぶりね。しばらく見ない間に随分綺麗になったわねえ、月詠」

「時雨!!」

何か言いたそうな月詠の気持ちを察して、時雨は続いて口を開いた。

「色々言いたい事はあるでしょうけど、全部こいつ等全員始末してから聞いてあげるわ」

早々とクナイを構えて、背を向けながら言う時雨に、月詠は背を向けた。

「一時間では済まさぬからな」

お、新手？ と嬉しそうな顔を向けるこの不気味な少女の笑みを睨みつける月詠。

つかみ所のない表情の渋い顔した中年の男に、不気味な笑みを見せる時雨。

さあ、いざ尋常に……そんな時だった。

「銀チャン!!」

神楽の声に、振り返った二人。

大柄の、黄色い番傘を持った巨漢が清太を脇に抱えているのが遠めで分かった。

「夜兎が……三人？」

もはや絶滅危惧種とまで言われた夜兎が、こんな場所に、こぞつて三人も。

薄々思っていた仮説が、ただの事実になる瞬間だった。

「ちつくしょお!! 離せエエ!!」

巨漢の脇の中でもがく清太に、ハツとなった神楽は立ち向かっていく。

その時、背後の気配を感じ、神楽は全身の血の気が引いていくのをはつきりと感じた。

「邪魔だ……退いてくれよ」

行った筈だ。弱い奴には興味ないって。

「に……っ!」

少年らしき声の主の姿を見た時、神楽は何かを言いかけた。

だが、少年声の主の一撃で、その言葉は紡がれることはなかった。

「神楽アアアアアアアア!」

その時、遠目で、通りで、遊郭の座敷の窓で。

多くの人間が、吉原の空の一部である鉄パイプが碎ける瞬間を目撃した。

「銀さん!! 皆アアアアアアア!!」

パイプと共に落ち行く銀時達を、上から呼びかける清太。

だが、それ以上の発言を、四つ分の殺気が許さなかった。

「やりすぎたかねえ……五月蠅い爺さんにドヤされそうだ」

「大丈夫だよ。鳳仙の旦那はこんな街より花魁様にご執心だ」

自分達の起こした騒ぎを、まるで他人事のように話し出す彼等に、清太の背筋は凍りついた。

「それにさ、ドヤされる前にこの子差し出せばいいじゃん。あー、ホラ、サウンドバッグ？」

「サウンドバッグな」

「……それにこのくらいやらなきゃ死ぬ奴じゃないんでね」

その言葉に、清太の首根っこを突かんだ中年の男が言った。

「知り合いでもいたか？」

「いや、もう関係ないや」

鉛色の空は。月詠の機転で、全員無事に屋根の上で呼吸をしている姿を照らしていた。

く多めに改行して台詞入れると何かカッケーく（後書き）

今で吉原炎上篇二話目に当たる、140話のほとんどが終わった感じ
です！

あと五話分、無事サクサク終わるかすごく不安なものでした^^；

「ジジイは皆エロイって父ちゃんが言ってたってじいちゃんが言ってた」

月詠の機転で、何とかパイプ崩落の被害に巻き込まれず、建物の屋根の上に生きて着地した。

先程の攻撃の打ち所が良くなかったのか、神楽は気を失っている。

銀時がそれを揺する姿を見ながら、新八の心の何処かは、清太が連れ去られた。と冷静に判断している。

「今の奴等……」

「そうね。きっと春雨の奴にちがいないわ」

「春雨って……あの!?! 宇宙海賊春雨!?!」

麻葉の密売をしたり、紅桜の一件で、鬼兵隊と手を組み桂達の前に現れたあの春雨?

新八の問いに、時雨はそうよと答えた。

「……吉原の遊女達は親に売られた者も多いが、その多くが不当な人身売買によるもの。その利権に深く関わるのが、宇宙海賊春雨」

「もっと正確に言うと、吉原の楼主である鳳仙こそが、かつて春雨で幹部を務めた男よ」

夜王、鳳仙。

奴がそう呼ばれているのは、ここ常夜の国の王であるばかりではない。

光に嫌われた一族。夜を生きる者達。それを統べる者。夜を統べる者。

「夜王鳳仙っていうのは、夜兎の頂に立つ者」

夜王は、有象無象のつわものが犇めく夜兎ひしの中でも一大勢力を誇る化け物である。

「それも、あの宇宙最強の掃除屋と名高い『海坊主』と肩を並べるほどだと聞いているわ」

「どうやら俺達は、とんでもねーバケモンに喧嘩ふっかけたらしいな」

「銀……チャン……」

その時、神楽の弱弱しい声が全員の耳に届く。

「ホントに、ヤバイのは、ソイツじゃないネ……」

息子がいる……『海坊主』の……

「私の……バカ兄貴が！」

「これはこれは珍しい御客人で。春雨が第七師団団長、神威殿^{かむい}」

数ある遊郭の中でも、一番の大きさと女の室を誇る遊郭。

バカ兄貴は、その最上階にて、夜王と向き合って座っていた。

実の妹を殺そうとしたその手で箸を持ち、白米を桶ごとかつ食らっている。

そして、既に空になった桶の上に新しく桶を置いた。

「うーん、地球のゴハンは美味しいねー。鳳仙の旦那」

「『春雨の雷槍』と恐れられる最強の部隊第七師団。若くしてその長に上り詰めた貴殿が、こんな下賤な所に何の御用ですか？」

「人が悪いですよ旦那。第七師団作ったのは旦那でしょ。面倒事全部俺に押し付けて、自分だけこんな所で悠々自適に隠居生活なんてずるいですよ」

オペラにでも出てきそうな仮面のような笑顔で話す神威。

鳳仙は、バツと扇を広げ倦怠そうに手首を動かし風を生む。

人は老いれば見も心も乾く。その身を潤すは酒。心を潤すは女。

そこまで言って、鳳仙は嘲るように笑った。

「若い主には分からぬか？」

「いえ、分かりますよ」

「ほーお。しばらく会わん内に飯以外の味も覚えたか。……酒か、女か。言え」

神威は、より一層唇を吊り上げ、人差し指をピッと自分の胸元辺りに持ってくる。

「じゃあ……日輪と一晚」

その瞬間。扇を仰いでいた鳳仙の手はリモコン操作したかのよう
にパタリと止まる。

「手土産もこの通り用意してあるんです。きっと喜んでサービスし

てくれるでしょ？」

襖が開いたと共に、彼の部下と縄で縛られ、怯えた顔をする清太。

「日輪を誰かに取られるのが嫌なら、旦那ですら勝てなかった……
そう、『影蜘蛛』とやらでも」

ギギッ……そのまま扇をへし折りそうな程、怒っている事を音が
知らせてくれる。

「このワシの前で……その名を口にするな」

「嫌ですか？ 自分より強い、それも地球人で女がいることが」

「奴は処断された。百華の……自分の仲間達によってな」

「年は取りたくないもんですね。あの夜王鳳仙とあろう者が、自

分の国に住んだ女の生死さえ正確に判っていない」

男は天国、女は地獄？ いや違う。

ここは、鳳仙が鳳仙のためだけに作った天国。

誰にも相手をされなくなった哀れな老輩が、可愛いお人形を繋ぎ止めておくための牢獄。

「酒に酔う男は絵にもなりますが、女に酔う男は見れたもんじやないですな、エロジジイ」

その瞬間、夜王の手が、腕が振り上げられ、天井に穴が空く。

土煙が晴れ、穴が開いた天井からは、ポタポタと血が流れ落ちる。

それを見た遊女の一人が、恐怖のために悲鳴を上げた。

清太には、すぐには飲み込めない状況だ。

「貴様等ワシを査定に来たのだろう。気付かぬでも思ったか」

立ち上がり、膳を蹴り返す。

「上の差し金だろう。巨大な力を持つ吉原に恐れを抱き始めたか爺ども。吉原に巢食うこの夜王が邪魔だと」

そう言って、袖から腕を抜き、老いても衰えない筋力を目の当たりにした中年の男は冷や汗を禁じえなかった。

「いや、アンタといえど春雨と正面から戦い合う気にはなれんだろう……いよく考えて行動した方が身の為だ」

「いや、やり合おうってならそれはそれで面白そうだけどね」

「総長!!」

「そいつは困るな。そんなんじゃ、俺のこの渴きはどうすればいい」

女や酒じゃ駄目なんだよ。俺はそんなもの要らない。

鳳仙が背後を見やれば、その後ろに、さっき殺したはずの神威がいた。

なら、天井の上で血を流すのは……そんな疑問がわいた時、天井から既に事切れた遊女が落ちて来た。

「そんなもんじゃ、俺の渴きは癒えやしないんですよ」

その台詞の後、戦意的な笑みを浮かべた神威と鳳仙は早くも打ち合いを始めた。

神威の蹴りが頬を掠めたか、ちが泉のように溢れ出る。

「修羅の血……己と同等、それ以上の業なる者の血で初めて……俺の魂は潤う」

その瞬間、笑顔の仮面が剥がれ、獣の目が現れた。

まずい……。

「やめろ！！ 団長オオオ！！」

彼の部下の一人が止めにかかったのと、部屋の壁が砕けたのはほぼ同時だった。

「すまぬ。わっちがもつと早く逃がしていれば……」

「謝る必要なんてねーよ」

あの後、遊郭とは違う、質素な建物へ身を潜めた銀時達。

新八と神楽は、百華のような服装に着替えて、玄関先で慣れない
ヒールブルを履く。

「……行くのか？」

「行かなきゃ、清太君が死にます」

「行けばぬし等が死ぬ。夜兔が五人、軍隊一個あっても足りぬぞ」

「アイツは私が何とかしなきゃいけないネ」

ずれた手首の武具を直しながら神楽は言った。

「他が為に行く。清太か？　日輪か？」

「ちよっくら、お陽さん戻しに行つて来る」

こんな暗がりに閉じ込められているうちに皆忘れちまった太陽を。

どんな場所だろうとよ、どんな境遇だろうとよ、太陽はあるんだぜ？

日輪でもねえ、辻ちゃんの旦那でもねえ、手前のお陽さんがよ

雲に隠れて見えなくなつちまうこともよくあるがよ、

それでも空を見上げてりゃあ、必ず雲の隙間から面を出すときがやってくる。

だからよお、俺達はソイツを見失わねえように、空を仰ぎ見る事

を止めちゃいけねんだ。

「背筋しゃんと伸ばして、お天道様真っ直ぐ見て、生きてかにやあならねえんだ」

しみったれた面した連中にいっといてくれ。「空を見とけ」って

「あの鉛色のきたねー空に、俺達が馬鹿でかいお陽さん打ち上げてやるってな」

そこまで聞いた月詠は、戦闘態勢の四人の数歩前に出て言う。

「悪いが断る。わっちも共に行くからのう」

「……貴女、自分が何を言ってるか判ってるの？」

「言った筈じゃ。わっちが護るのは日輪じゃ。吉原に忠誠を誓った事など一度もない。清太を見殺しにする方がよほどの裏切りぞ」

それに、と月詠は続ける。

「わっちも人に頼るだけでなく自分で探してみたくなったのさ……
『手前のお陽さん』というやつを」

帰るところなくなっても知らねーぜ？

大丈夫じゃ。だって主等、吉原を叩き潰してくれるんじゃないろう？

「ジジイは皆エロイって父ちゃんが言ってたってじいちゃんが言ってた」(後妻

9月18日の時雨さんのお誕生日に、玖月さんがお祝い話を、
灘さんと冬瀬志保さんが、お祝いの言葉を下さいました！

何か私が祝われてるようで嬉しかったです！そして、現在進行形で
嬉しいです！

ありがとうございました！

素晴らしいお話、「二人の女郎蜘蛛にご注意を」はコチラ←

<http://ncode.syosetu.com/n7918w/>

そして操お姉様が大活躍！！「唯一の女隊士」はコチラです←

<http://ncode.syosetu.com/n9978j/>

※次は姫華お姉様と会いたいなっ！！

って言ったら玖月さんにシバかれる上、全国の玖月さんファンの方
々に

「テメーみたいなカスが玖月さんに手間かけさせんなや！！」って
怒られそう^^；

〈喧嘩の横槍は危険〉（前書き）

斎さん、時雨さんのお祝いありがとうございますっ！

※誤字がございましたので訂正いたしました。他にご指摘ある方は、是非お願い致します。

〈喧嘩の横槍は危険〉

吉原に、吉原を潰そうと戦士達が立ち上がったのを知る良しもない鳳仙は神威と打ち合っていた。

それを、ただTVのブラウン管越しの出来事を見ているかのように観ている部下達。

「団長やめろオオ!! 俺たちの目的を忘れたかアアアア!!」

「やめときなって、うっちー」

「そんな悠長な事言っていないでアンタからも止めてくれよ総長!!」

「ヤダよ! あたしがあんなバケモン同士の喧嘩止めろって? 死ぬって……」

総長と呼ばれた少女は、言いかけて少し考え込む。

何か言い策でも思いついたのか、少女はにいと唇を吊り上げた。

「面倒だけど、仕事に支障が出るんじゃないかあ……じゃあ手伝ってようっちー」

「さっきから言おうと思ってたんだが、俺うんぎょう云業だから」

「流石は夜王鳳仙。かつて夜兎の頂に立った男。おいそれと下克上って訳にはいかないようだね」

顔面を鳳仙の掌に覆われ、今にも屋根ごと落とされそうな神威が

戦場の沈黙を破る。

その神威の言葉に、鳳仙はハッと鼻を鳴らして言った。

「下克上？ 笑わせるな。神威、貴様には上も下もあるまい。あるのは強いか弱いかな。ただそれだけ」

弱い者は意にも介さないが、強き者はそれが誰だろうと、師の鳳仙であろうと牙を剥く。

「それが夜兎の血というものですよ」

鳳仙に、もう腕の力がこもってないのか。そう思わせるほどあっさり起き上がる神威。

「こんな土の中に安住し、酒と女に溺れる内、その血まで乾いてし

まいりましたか」

今の貴方に勝っても面白くないや。

神威がそう言つてのけた途端、鳳仙はそのまま神威を持ち上げる。

振りかぶり、それを躊躇いもなく投げて、部屋の壁をまた突き抜けて。

そこから、しばらく沈黙が辺りを包み。

やっと終わったか。そう思った、その瞬間だった。

貴方の居場所は、こんな所じゃない。貴方の居場所は……

「俺たちの居場所
は戦場ですよ」

そうして、第二の打ち合いが始まろうとした時、
彼等の間に、影が入った。

「はいはい。そこまで、そこまで。団長も旦那も、
戦闘態勢解いてくれるう?」

土煙が止んだ頃、云業と名乗った巨漢とが神威、中年男が鳳仙の正面に割って入ってきた。

声高に制止している少女はというと、そんな彼等の間に挟まっていた。

ドシャリと、何か生々しいものが落ちた音がしたと思えば、腕が一本。

背後からブシュウツと音がして、少女が見やると云業の体から手が突き出ていた。

神威が手を抜けば、云業だった肉塊は、そのまま呆気なく崩れ落ちる。

「腕一本と一人で、あんた等と止められれば上出来だこいつの命に免じて、どうか団長の不始末を許してくれ」

残り少ない同族同士で殺し合うのは目覚めが悪い。

そして、忘れて貰っては困るのだが、自分達はここへ鳳仙と戦争しに来たのではない。

よりよい関係を築きに来ただけだ。

中年男がその旨を伝えると、鳳仙はまた嘲るように乾いた笑みをこぼし言う。

「いっそこの街が欲しいと正直に言ったらどうだ？」

「上も怖いんだって。『夜王』の怖さは、仲間だったあたし等が一番良く知ってる。爺さん達は、アンタが裏切らないって言う証が欲しいだけだよ」

「大した仲間だ。隠居し、余生を送る老いぼれにたかろうと言うのだからな」

着物を調えた鳳仙は、すっかり冷めたのか、部屋へ戻ろうと足を向けた。

「金でも商いでも好きにするがいい。そんな下らぬもの、ワシはもう要らん。だが……」

この街……ワシの国を奪おうというのであれば、主ら、夜王の新
の姿、見ることになるであろう。

そうして、横を通り過ぎようとした鳳仙に、神威は言った。

「そんなに自分の作ったおもちゃが大事か？　ならそのままここで
干からびて死んでいけばいい」

機械のアナウンスの様な声色から、人に恐怖心を与えるトーンで
神威は続ける。

「アンタは殺すにも値しない」

それだけ言うと、風のように走り去り、屋根から下へ、飛び降り
て行った。

「……干からびて死んでゆけ？ 当の昔に干からびておるわ」

陽も浴びられぬというのにどうしてこんなに乾くものかな。

鳳仙は、誰にともなくそう呟いた。

「まただ。鳳仙様の部屋から……なあ、やっぱり私達も行かないか？」

「もう仲間が向かった。こういう時ほど、警備を怠ってはいかん。隙を突いて曲者が侵入するかもしれないだろ？」

鳳仙のいる遊郭の門の番をしていた百華達がこのようなりとりを繰り返していた。

彼女等の会話を止めたのは威厳のあるヒールの音。

「その通りじゃ」

「「頭!!」」

彼女が声を揃えて呼んだのは月詠その人。

「今までどちらに？」

「うん。崩壊したパイプの撤去作業にな」

「でも良かった。頭が来てくれれば安心です」

安堵の声と共に、自分に歩み寄る彼女等に月詠は表情を変えずに言った。

「うむ。鳳仙様の事はわっちに任せておけ。ぬし等はここの守りを頼む」

「「はいっ!!」」

その時、シリコンの擦れる音が、彼女等の耳に届いた。

「いゝい？ 不審者は一匹たりとも逃がしちゃダメよ。ちょっとでも来たら110番よ。アタイが許可する。ヘマしたら承知しないからね」

カンッ！ 門番達が、各々持つ薙刀をクロスさせ、曲者四人を通してとしない。

「頭。曲者です」

「いや、違う。それは、あのおー……新入りじゃ」

「新入りイ!? こんな怪しい奴等が!?!」

「パー子でえゝす」

「パチ恵でえゝす」

「グラ子でえゝす」

「シグ子でゝす」

四人合わせて！

「「「はちきれピーチ四太夫！」」「」」

自己紹介をしたところで、彼等の目の前のクロスが解けるはずもなく。

「頭。曲者です」

「いや、新入りだってば」

目の前の、曲者を絵に描いたような曲者達を、百華達は尚もまじ

まじと見る。

「大丈夫なんですか？　こんなの連れてって。鳳仙様の方がはちきれますよ？」

「何が？まさか……」

「堪忍袋だよ！！　早まった想像すんなシリコン四太夫」

「失礼ね。私は本物のはちきれピーチよ」

「この際どっちでもいいよ！！」

早速、ボケ倒す自称新入り達。ツツコミに力みすぎて息切れする百華。

「こんな使えなさそーな奴等連れて行くのは危険です！」

もう一人が無理矢理話を元に戻そうとする。

「大丈夫よ。どうせチン砲様の事だから、また女と座敷遊びしてるだけよ騒ぎすぎ」

「チン砲様って誰だよ鳳仙様！！　どんな座敷遊びしたらあんな騒ぎになんの！？」

「いや夜王とか呼ばれてんでしょ？　そりゃとんでもない攻略法会得してんでしょ？」

「そういう意味じゃねーよ！！」

クロスされた薙刀を持った向こうにいる月詠は、銀時達に助け舟を出す。

「新入りじゃが腕は立つ連中じゃ。心配せずとも良い」

そこまで言うと、頭がそこまで言うならと百華は渋々と門を開ける。

ギギイ……と空き、上手くいったなと通っていく銀時達と月詠。

「お気を付けて下さいね？」

死出の旅路を……

不吉な言葉と共に、門が閉まった瞬間だった。

左右から、正面に向けて、クナイがブリザードのように振る。

「うわあああああああああ！！」

と新八が妙な大勢で避けている間、残った四人は各々の武器でクナイを弾く。

「どうやら……猿芝居は全部無駄だったようだな。ぜえんぶお見通しして訳だ」

全てのクナイが止んだと思うと、前方から雲霞のように百華が迎えに来た。

頭である月詠にさえも、敵意を滲ませて。

「頭。アンタが賊に加担するとは……吉原を裏切ればどうなるか、

アンタが一番知ってる筈だ」

「そうかい？ 一体どうなるってんだ。是非お教え願いたいもんだ」

口元のマスクを外しながら、銀時は言う。

「こんなに沢山集まって、お別れパーティーでも開いてくれるのかい？」

最高の極め台詞を、額から、クナイによる血をたらしながら言った。

「銀さん。ホントにお別れです」

「え、何が」

「『何が』じゃねーだろ。何回ブツ刺さってんですかアンタ！ おでこにブラックホールでもあるんですか！！」

「え？ 何が？ 刺さってないよ？ なんにも」

「刺さってただろオ！？ 今明らかに顔赤くなってるだろ！！ 照れてんだろ！！」

銀時にツツコミを入れている間、どこか別の方向からクナイが人の肉から引き抜かれる音がした。

「オイいい加減にしろヨ。極める時はバシッと極めろよナ」

「君も刺さってたよね。君も明らかにソレ刺さってたよね」

「は。今からその調子じゃ、先が思いやられるわい」

頭部にクナイが見えない月詠が、彼等を嗜める。

「ぬし等、そんな事では百年かかってでも夜王には勝てんぞ！！」

「ツツコミ辛いんですけど。知らない方がいいよねアレ。そつとしたいほうがいいよね!？」

頭部に痛みを感じたと思えば、新八の額にクナイが刺さっており、血を噴出している。

「ちょっとおおお!! アンタ何やってんですか!! こんな時に何なんですかアア!!」

「背後は貴方しかいなかったんだから貴方が刺したんでしょ？」

クナイを新八に刺した時雨は、しれっとそう言った。

「やめてくんない!？ ありもしない疑惑吹っかけて仲間殺すのやめてくんない割とマジで」

「じゃあ一体誰が後ろから刺せるのよ。月詠に手エ出したらブチ殺すわよ割とマジで」

「『裏切り者には死を』その命を以ってして最期の掟、護るがいい
！！」

男にしては高い声を挙げて一斉に襲い掛かる百華達。

「嬉しいねえ。遊女総出たあ、男冥利に尽きる。だがこう貧乳ばかりじゃ興も冷めるってもんだ。」

三人が、襟元を肌蹴た。

「女はやっぱり……爆乳でござんしょオオオオオ！！」

そこから姿を現したのは、黒いインナーとシリコンではない。

黒いインナーと……

百華達が動きを止めた時、月詠と時雨で、火を点ける。

「さゝあ、楽しいパーティーの始まりだゝ」

その直後、凄まじい爆音と煙が、辺りを包んだ。

〈喧嘩の横槍は危険〉（後書き）

こういう長編リメイクで、オリキャラを暴れさせるために用意した新たなオリキャラ（柳生リメイクだと芽衣子ちゃん）ですが、想像以上に気に入ってすぐ出したくなるんですね（´U、´）

今回の夜兎の女の子の絵、出来ました！！次回くらい、ここに貼れたらなあと思います！

く時には道草食ってもよし！く

そっちは子供のほうに回れ！ こっちは侵入者のほうに回る！

などという、声と悲鳴。足音になるたび、神威のアホ毛が小刻みに揺れる。

「大した騒ぎだねえ」

「アンタが起こしてくれた騒ぎよりマシだろ？」

「何だよ怒ってるの？　すぎた事は忘れないと、長生きできないヨ
？　阿伏兔^{あぶと}」

中年男、改め阿伏兔は残った腕の上に、無事だった手で包帯を巻く。

「いや、死んじゃってるからね。一人……なあアンタ」

最初から鳳仙と殺り合うつもりだったんだろ？

阿伏兔の問いに、ばれた？　と大して悪びれもなさそうな返事が返ってくる。

「『ばれた』じゃねーよすつとこどっこい。お陰であのガキも騒ぎの途中で逃げちゃう始末だ」

「へーえ。あの騒ぎの中で逃げられたんだあ。やるなあ、あの子。ね！　団長っ」

「将来が楽しみだなあ。それに引きなんて必要ないよ。吉原が欲しいなら、鳳仙の旦那を殺せばいい」

上司の、あまりの身勝手さに、阿伏兔は深いため息をついた。

上の連中が文句言ったりしたら？

その時は。上も俺が、皆殺しにするよ。

で？　その後、貴方様は。海賊王にでもなれるんですか？

その質問に神威は、空中でバタ足をしながら、気の抜けた言葉を返す。

「それもいいかもねー。上に行けばそれだけ強い奴にも出会える」

「はいはい。志の高い立派な団長を持って、私どもは幸せですよ。コンチキショーオ！」

バサツとマントを纏い。部屋を出ようとする阿伏兔に、はっとして着いて行く少女。

「何処行くのー？　帰ろうよー」

「鳳仙に貸し作っただま帰れねーよ。我々下々の者は団長の尻拭い……」

いや……海賊王への道を切り開きにも行くとしませう。

キヒヒヒヒ。と笑いながら去る阿伏兔達に

「頑張っネー！」

と、神威は陽気に手を振った。

「そう言えば聞くけどな、望朔^{みさく}」

望朔と呼ばれた少女は、ん？　　といたいけな目を阿伏兔に向ける。

「本当はあの二人の喧嘩、お前さん一人で止められたろ」

「買い被り過ぎだよ。ただね、あたしはあたしに指図する部下が嫌いな」

提案までなら許すけどねー。と明るく笑いながら

「思い通りにならねえなら死ねってか。怖い怖い」

「そーお？　あたしって夜兔の中じゃ断然、穏和な平和主義者なのかと思ってた」

そんな末恐ろしい平和主義者があるか。とツツコミながら廊下を並んで歩いていった。

その頃、煙玉に咳き込ませている。入り口付近の遊女達。

「ナメたマネを……女は斬れぬとでも申すか！」

それより、賊達は何処だ。視界を揺さぶらせると、誰かが階段を駆け上がる彼等を指差した。

四人が先に行こうとするのに反し、一人が階段を駆け上がって止

まる。

ついさっきまで、自分達が頭と呼んでいたその人だ。

「……ここでしばらく食い止める。先に行きなんし」

「月詠さん!？」

「お前、ここで死ぬ気アルか？」

「部下の騾は頭がするさ」

食い下がる子供達に、月詠は振り返らずに言う。

そして動きを止めた銀時は、月詠を見据え、掌を差し出した。

「火種を寄越せ。オメーと一緒に無くなれちゃあ困るんだよ。煙^コ玉^{イッ}が使えなくなんだろ」

「最期になるやもしれん。一服……」

「だめだ。さっさと寄越せ」

そこまで言っていると、月詠は何も言わずに、煙管と火種の入った袋を銀時に投げ渡す。

それを受け取った銀時は、また、奥の方へ歩き始めた。

「そんなに吸いたきや戻って来い。必ず吸いに戻って来い。さっさと来ねーとしやぶり倒すからな」

そう言いながら銀時は角を曲がって視界から消えた。

三人を残して。

「ぬし等も早く行け。……何度も言わせるな。わっちが身命賭して護るは日輪のみ。ぬし等ごときを護るために捨てる命など、持ち合わせておらんわ」

「……行くわよ二人とも」

時雨の言葉に、子等二人は、不意を突かれたような顔をする。

「時雨さん!」

「大丈夫よ……月詠も、百華も」
あのこたち

そのまで言うと、二人は、不安を振り払うかのように走り出した。

「……貴女に言いたい事が、一つだけあるの。陽の下で待ってるわ」

時雨が去るのを、一際忙しくなり、段々遠のいて聞こえなくなつた足音が教えてくれた。

横目で見送ってから、目の前の、自分に刃を向ける部下達を見下ろす。

そう。わっちは日輪を命として護る番人。

わっちの太陽を。吉原の太陽を。吉原に、光を導く太陽を。

死ぬる覚悟は出来た。どこからなりとも来るがいい。

何人たりとも、ここより先は通さぬぞ！

「太陽が番人月詠、参る！」

一方、月詠と別れた銀時達は夜王目指して、廊下を真っ直ぐ突き抜けるように走っていた。

元・吉原の番人を先頭に。

「時雨エ！　これどっち！？　これどっちに行けばいい！？」

「鳳仙は普段この最上階にいるけど、今頃、日輪様の元へ向かうとしてるでしょうね」

「じゃあ日輪の部屋はどこだあ！！」

「虫唾がスカイダイビングするから貴方如きが日輪様の名を軽々しく口にしないでもらいた……」

時雨の言葉を止めたのは、襖と、神楽が吹き飛ぶ音。

吹き飛んだ方を見やると、後ろから二人分の足音がした。

「こいつぁ驚いた。誰かと思えばお宅等か」

「ヘー！　すごいじゃん生きてたなんて。団長が知ったら喜びそうじゃない？」

「ああ。地球さんにも、少しは骨のある奴がいたってねえ……」

「オイ！　寝惚けてんじゃネーぞ！！」

神楽の声。その瞬間に、彼女の傘が阿伏兔に当たり、襖を破りな

がら吹き飛ぶ。

「誰が地球さんアルか。こんな田舎モン達と一緒にすんなヨ。こちら根っからのシテイ派ネ！」

プツと血糊を吐き捨てる神楽に、望朔はヒュウと口笛を鳴らす。

「やっぱりか。その傘、その肌。副団長の嫌いな共食い戦勃発しちやったー。ね！」

「何でテメーはそんな嬉しそうなんだよずっとこどっこい」

などと会話する、夜兎二匹を睨みながら、神楽は銀時に言う。

「銀チャン。ここは私に任せるアル。行くヨロシ」

「バカか。四人がかりでもヤベー相手だ」

その時、新八と時雨が武器を相手に構えながら言う。

「行っして下さい銀さん。神楽ちゃんは僕が護ります」

「それでも不満なら私が残ればいいでしょう？」

「は！？ 余計なお世話アル！！ お前は足手まといだし、時雨姉ちゃんは銀ちゃんの道案内が……」

行けヨ！ 残る！ その言い争いを、銀時は留めるように呼ぶ。

「おい、オメー等。待ち合わせ場所は分かってんだろ？ な、オイ」

次会う時は

陽の下で。

夜の明けた

上等だ。

夜王の元へ向かう銀時の背中を見送る三人。

「人生ってのあ、重要な選択肢の連続。なんて言うがねえ。こんだけハッキリババ引いた奴アはじめて見たね」

あちらさん。外れだ。夜王相手に一人。この世に一片の肉片すら残るまいよ。

お前さん達が正解。助かったねえ……

「三人仲良く、ミンチにしてやんよ」

「外れはお前等アル。その粗末なモンと全身の毛エ……」

「「「あらびきウインナー野菜添えにしてやるわ!」」」

お互い戦闘態勢に入った瞬間。望朔がニヒツと不気味な笑みを漏らす。

「じゃーあたし。そっちの夜兔のお嬢ちゃんね!!」

「速……」

新八が言い終わる前に、神楽目掛けて傘を振りかぶる望朔。

そのまま神楽が当たるか。避けるか。その直前だった。

ガギン。

甲高い金属音が、望朔の動きを止める。

「おろろ？」

素っ頓狂な声を挙げたの瞬間。望朔のわき腹に、時雨の蹴りが入った。

流石に防ぎきれなかった望朔は、障子を突き破り無理矢理隣の部屋へ移動させられた。

「あの子は私が預かるから、貴方達はその副団長さんをお願いね」

そう言って隣へ移動しようとする時雨を止めた新八。

「時雨さん！？ 向こうは……敵って言うっても女の子ですよ！？」

パイプの裏道で清太を逃がそうとした時、あの少女は月詠を攻撃した。

そしてたった今、神楽を殺そうとした。

「私はね、新八君。私の大事な人を傷つける奴は例え可愛い女の子でも許せないの」

戸惑う新八達を他所に、時雨は続ける。

「手出しは無用よ。寧ろ加勢に来なようにね。……間違っ
て殺したりしたら目覚めが悪いから」

それぞれの戦いの火蓋が今、
切って落とされた。

く時には道草食ってもよし!く(後書き)

えーっと。今回で名前が明らかになった私の新しい娘の「望朔ちゃん!」ざっと絵にしてみました!!衣装とかただの趣味ですへタクソですゴメンナサイ。

>i31722—3659<

この子の名前は私にしてはちゃんと由来があるんですよ!その経緯をお見せしたいと思います。

ッて言っても大したもんじゃないですよ。満月を意味する望月と新月を意味する朔月をくっつけて名前にしただけです。

「いい人っていうのは、自分で自分を『いい人』だと言わない人」(前書き)

前回の望朔ちゃんのプロフィール書くの忘れてました。失礼。

望朔 165cm B型 10月8日生まれ

スリーサイズ…上から…グハア!!

(。D。)*作者が何者かによる襲撃を受けましたので終了いたします* (。D。)

「いい人っていうのは、自分で自分を『いい人』だと言わない人」

「やれえ!!」

合図と共に、突風のような勢いと量のクナイが月詠目掛けて吹いてくる。

いくら彼女でも、それだけのクナイを捌ききれるはずもなく、止むまでに何度か掠めた。

しかし、攻撃が止んでも月詠は、ただそこに佇んでいるだけだった。

何故……

「……何故反撃しない！ 何故黙って打たれるままにいる!？」

うろたえた気持ちを露にする声色に、月詠は答えた。

「わっちにぬし等を殺す権利はない」

今まで、吉原を護るため、彼女等と共に掟を犯すものを裁いて来た。

時に吉原から逃げ出そうとする女達を。時に客の取れなくなった女達を。

そんな所業を重ねた自分が、掟に背いておきながらのうのと生きていくつもりはない。

「殺すがいい。わっちを。だが、時間は稼がせて貰う」

「己が身を呈して、賊を護るというのかアアア!!」

再び吹いたクナイの突風に、月詠は構えた。

この街に護る価値などありません

そう思いながら、鳳仙の傀儡になり、吉原を……掟を護ってきた。

何も変えられない、何も変わらないと諦め

日輪のいるこの街を護る事が彼女を守る事に繋がる。そう思って
剣を振るってきた。

でも……右手に痛みを感じ、そこで一旦月詠の意識が止まる。

しまった。右手からクナイが滑り落ちる音を聞いてそう思ったと
き、全身に痛みが走った。

「わっちは何も、護ってなどいなかった」

体中にクナイを浴びたのだと理解し、その場に座り込む。

わっちが護ってきたのは、日輪でもこの街でもない。護ったのは、自分の檻。

吉原に檻を張ったのは誰でもない。わっち等じゃ。

鳳仙を恐れるあまり、変わることも変えることもせずに諦観し、心に檻を張ったのじゃ。

己の身の可愛さゆえに檻に閉じ籠り、その檻を必死に護っておったのじゃ。

時雨は鳳仙に再び盾突いたあの日、時雨はそんな檻に閉じ籠った自分達を護ってくれた。

そして、「必ず助けに来る」という言葉通りに、仲間を連れて助けに来てくれた。

彼女の生きた内のたった八年を費やしただけのこの場所に、光を灯すと言ってくれた。

なのにどうして、子供の頃からここにいる自分が、諦められようか。

「わっちはもう逃げん。檻を破るために戦う」

痛々しい身体に鞭打ち、立ち上がって月詠は言った。

「最後の最後まで……太陽に向かって真っ直ぐ立ち続ける!!」

カラン。カランカラン。

覚悟を決め、目を閉じた時、妙な音が耳を振るわせた。

そつと瞼を開けると、そこには、武器を捨て、俯く部下達の姿があった。

「もう、出来ないよ」

「もう嫌だ」

すすり泣く声の中、一人の部下の声が届く。

「頭……アンタは臆病者なんかじゃない。アンタは何も護っていない
くなんかない」

スルリと、彼女等がマスクを解くとそこからは、傷だらけの顔が
姿を現す。

「護ってくれたじゃないか！ あたし達を！！」

吉原から逃げ出そうとした女達。客の取れなくなった女達。

「掟を犯した者を始末したように見せかけ、百華に匿ってくれたのは他でもない。アンタだ!!」

「わっちは、ぬし等が女として生きる道を奪った。女としてのぬし等を殺して来た」

ここに売られた時に、既に女などは捨てています。別の部下がそう言う。

物としてではなく、人として生きる道くれたのは貴女です。

「ここにいる物達は皆、貴女が今まで護ってきたものなんです」

頭……

月詠……

不意に、話を続ける部下と、再会した相棒の声が重なって聞こえた。

太陽も月も、この常夜の街を照らす、かけがえのない光なんですよ。

日輪様だけじゃなく、貴女も吉原を照らす光だという事を忘れないで

月詠は、一度フツと笑うと、そのままドサリと床に倒れた。

部下達が駆け出して、頭、頭と呼んでいるのがまるで遠い場所できているかのように感じる。

太陽と月……わっちはずっと隣でぬしを護り続けていたつもりだったが

ぬしの存在はどこか遠かった。今、初めて、ぬしの隣に立てた気がする。

道は、照らしたぞ。

吉原と……日輪と清太を……頼む。

カタン。廊下に乾いた音がして、銀時は走る足を止め振り返った。

数歩後ろに、受け取った煙管が落ちているのが見えた。

何も言わずにそれを拾い、銀時は奥へと進んでいった。

ゝ人生は選択肢の連続ゝ（前書き）

今回は執筆しながらボロ泣き致しました。お陰で前が見えなくてタ
イプミスが酷過ぎた。

おのれ、新八のくせに！新八のくせに私を泣かせるなんていい度胸
じゃないか！

いや、ぱっつあんはエエ子やでえゝ（つゞ）

「人生は選択肢の連続」

「どーしたあ？ 粗引きウイナー野菜添えはまだ出来んのか」

その頃、阿伏兔と対峙していた新八と神楽は、圧倒的な実力差に苦戦していた。

これだけ全力で戦っているのに、向こうは息の一つも乱れていない。

何より、あの神楽でさえ軽くあしらわれる始末。同じ夜兔でもこれだけ差が出るとは……

新八は苦虫でもかみ殺すような顔で阿伏兔を見上げた。

「俺達ア義理や金でも動かねえ。夜兔は動く時……それは血の匂い煙る戦場がある時だけだ」

それだけのたまいて、阿伏兎はキヒヒと笑い飛ばす。

「なあゝんて言われてたのは昔の話でねえ……何て事アねえ、こつち^{ビジネス}は仕事でここ来てるだけだ」

「……何処アルか？」

口内に溜まった血を、プツと吐き出して、神楽は問う。

「あのガキの事か？」

「……神威は。バカ兄貴は何処に居るって聞いてんだヨー!!」

「兄貴？ まさか……」

「な……」

清太は、今、身の回りに起きた事をはっきりと理解できなかった。

鳳仙と、妙な男が戦っている隙を見つけて逃げていたら百華に見つかり追われ。

百華の者の指先が襟の先に触れたくらいで、血生臭い匂いと、人が倒れる音がした。

振り返ってみると、ついさっきまで自分を追いかけていた者達がただの肉塊に変わり果てていた。

極めつけは……

「こんなところで何してるの？ ひょっとしてお母さんでも探してるのかい？」

両手を真っ赤に飾った青年が不気味な笑みを浮かべて此方へ歩み寄ってくる。

「ねえ、そんなに会いたいなら。俺についておいでよ」

会わせてあげるヨ、日輪に。

そう言う青年の顔を見るのが怖くて、清太は彼の頭の上のアホ毛を見上げた。

『バカ兄貴』。自分の上司の事をそう言った少女の顔を阿伏兔はじいっと見る。

会った時から、誰かに似ているとは思ったが、なるほどそういうことか。

「まいったねこりゃ。同胞で敵方。しかも見方の縁者とは……共食いどころの騒ぎじゃねーやあ」

「余計な心配要らないネ。アイツは、私の事なんて何とも思っていないアル」

同族どころか家族、父親と妹さえ手にかけてようとした薄情者だ。

神楽の言葉に阿伏兎は、そこに部下と師匠も付け加えておくといと返す。

「どうやら俺達ア似た者同士らしいなあ。神威あのバカに振り回される被害者」

「そこを退くアル。バカやらかした上止めんのが下の役目アル」

「悪イなあ。バカやらかした上の尻拭うのが下の役目だ」

その言葉の後、二人は腰を低く下ろし、戦闘体勢に入る。

「か、神楽ちゃん……」

新八が小さく呟いた次の瞬間、最初の傘のぶつけ合いが既に終わっていた。

流石の神楽でも、歴戦の夜兎相手に、傘に伝わる衝撃に耐えられない。

だが、傘を持った腕を無理矢理引き戻し、第二撃、第三撃と傘を繰り出す。

最初は避けるだけだった阿伏兎だったが、次第に痺れを切らせたのか神楽の傘を踏み付け攻撃を収め彼女の動きを封じる。

次の瞬間、阿伏兎の踵が神楽の顎下に当たり、吹き飛ぶ。

しかし、そこで負ける神楽ではない。

天井に、手を蛇腹のように折り畳んで阿伏兎の頬目掛けて綺麗に蹴りを入れた。

だが阿伏兎は、その蹴られた足を掴み神楽を放り投げた。

楔が壊れ、土煙を上げる。

「神楽ちゃあああああん!!」

新八が叫んだのも束の間、土煙が晴れない内から、神楽が歩いて戦場内に戻ってくる。

神楽がまた血の塊を吐き出したと思ったら、阿伏兔の片方の耳が半分なくなり、そこから血が出ている。

それを見た本人は、声高に笑い出した。

「ロクに戦場に出た事もないガキが、俺に食らいついてくるとはねえ……闘争本能だけは親父譲り……いや、兄貴譲りか」

「神威と一緒にするなヨ」
アイツ

「悪い事は言わねえ、お引越しをお勧めするぜ」

こんなシャバい奴等とぬるま湯に浸かっていたら、その一級品の

才能潰れるぜ。

そう続けた阿伏兔に、神楽はもう一度言った。

「お前等と一緒にするなと言ってるアル」

夜兔の血に流され戦場を彷徨うだけのお前等と一緒にされるだけで虫唾が走る。

「私は自分の戦場は自分で決める。血ではなく心で」

自分の護りたいもののために戦場に立つ。

その邪魔をするというのなら、例え同族だろうと兄貴だろうと誰だろうと関係ない。

「ブツ潰すアル!!」

打撃を連続で繰り出す神楽に、阿伏兔はもう一本しかない腕でそれを防ぐ。

血の命ずるままに戦う兄と、心の命ずるままに戦う妹。

いや、もつと的確な言い方をすれば、血で戦う兄と、血と戦う妹。

どうやら和解など端^{ハナ}から無理な話だったようだ。

だが……残念だ。

そんな事ではお前さん、一生かかってもあのバカ兄貴に勝てやしない。

恐らく、彼女の渾身の一発であろう拳を、阿伏兔は頬で受け止め

た。

「さて問題だ」

そう言って、自分の手で拳を作り続ける。

「倒す拳と殺す拳。一体どちらが重いかな？」

正解は……拳を握り締める阿伏兔に、神楽の体は自然と強張る。

そして、次の瞬間。

「殺す蹴りだァ!!」

阿伏兔の蹴りが神楽の腹部に当たり、神楽はそのまま吹き飛んでいく。

一度地面にittedただけで勢いは収まらず、二三度跳ねてヘッドスライディングのように滑っていった。

「腕力よりも脚力の方が遥かに強いからなあ。え？　詐欺だって？
堅い事言うなよ、たかがクイズじゃねえか」

気付かんかね？　お前さん、無意識のうちに拳に急ブレーキをかけてしまっている事に。

そう言って神楽の左腕を踏み潰して、彼女の悲鳴を聞きながら言葉が続けていく。

「夜兎の本能を抑えようとするあまり、拳が俺に届く前に死んじまつてんだよお！」

人を傷付けたくない。人を殺したくない。大層立派な考えだ。

このぬるま湯地球ではな。

だが……戦場ではそうはいかない。戦場では、迷った者から死んでいく。

「血を拒絶するお前と、それを誇る俺達。端から勝負になんてなりやしねえ!!」

神楽の頬を踏み付ける足。彼女の横顔を模^{かたど}って畳がへこむ。

神楽の呼吸が少しずつ弱くなっていく。

ズドン!

その時、一本の薙刀が亜伏兎のマントに風穴を開けた。

「神楽ちゃんを……神楽ちゃんを離せエエエ!!」

薙刀の持ち主、新八の目つきを見て、阿伏兔は低く笑う。

「今のは良かったぜ、坊主。殺す気満々だった。だが残念……」

薙刀の刃を持ち、新八ごと持ち上げて天井にめり込ませる。

新八の低いうめき声が、神楽の耳に入った。

「新八イイイイイ!!」

「さあ、ここでまた選択肢だ。どちらが先に死ぬ？　好きなほうを選べ……」

「止めろオオ!!　新八を離すアル!!」

心のそこから叫ぶ神楽に、阿伏兔は、はんと鼻を鳴らした。

「そんな選択肢はねえ。言ったる。人生は重要な選択の連続だ。後悔しないように、ベストな選択肢を選んだなあ」

「……えがつ、お前が……死ねっ……！」

薄れる酸素を絞り出すように、新八は言った。

「堅い事……言うなよ……たかがっ、クイズだろ……っ!？」

「……決まりだなあ……」

薙刀を天井へ押し上げる力が一層強まる。

それに耐えられなくなった新八が、未消化物や血。要らない者を

吐き出し、空気を欲す。

「ヤメロオオオオオ!!」

踏み付けられた足を退けようとしていた神樂の手が、一度だらんと地面に落ちる。

次の瞬間、グッと強く握り拳を作り、阿伏兔の足に思い切り殴りかかる。

先程までとは威力が明らかに違う。そう思ったときには遅かりし街角。

すぐに地に着けていた足を払われ、天井に殴り飛ばされる。

それから、地面に不時着する隙さえ与えてくれず、壁に蹴りつけられる。

動きが突然……何があったあのガキ。

ゆらゆら。公園に遊びに行く幼児のように定まらない足取り。

瞳孔は完全に見開いており、白目が血走っている。

フツツと笑いながら真っ直ぐにこちらへ歩み寄って来る少女は、間違いなく自分を殺しに来る気だ。

そこまで監察して、やっと合点が行く。

「……鎖が千切れたか」

人を殺める事を恐れるあまり、無意識に夜兎の能力を押さえ込んでいた鎖が……

仲間の危機に直面し、理性と共にはじけ飛んだか。

「待っていたぞ、お前が来るのを！！ 丁度腕一本じゃハンデが足りねえと思っていた所だ」

第二の蹴りを避け、薙刀を投げつける。

その切っ先を、神楽は掌で止めた。

馬鹿な。もう既に片手が使えないんだぞ？

手を失えば、攻撃はおろか、防御もままならないだろう。

阿伏兔が繰り出した、正真正銘の殺す拳。

「所詮獣は獣でも、子兔かあ……」

流石にくたばっただろう。そう思った時だった。

「ンフ……フフフフフフフフフフ……」

ケロリとした表情で笑う少女の目が、真っ直ぐ阿伏兔^{エモノ}に向けられていた。

「オイオイ冗談だろ。今のは結構^{マジ}本気だったんだぜ？ おじさん、傷付いちまうわ」

圧倒している。

新八は、阿伏兔がされたい放題にされているのを見ている事しか出来なかった。

圧倒している。歴戦の夜兔を神楽ちゃんが……いや、神楽ちゃん、なのか？

アレが、僕等の知っている神楽ちゃんなのか。

「まいったねえ……」

薙刀で右肩を貫かれ、屋根の隅にまで追い出された阿伏兔は呟いた。

「俺が解いた鎖に繋がっていたのは獣なんかじゃなかったらしい。バケモンだぜこりゃあ」

戦場では迷った者から死ぬ。

そう説教を垂れておきながら、どうやら迷っていたのは自分の方だったようだ。

目の前の少女を見ると、その兄貴の顔がチラついて仕方ない。

……殺すがいい。本能の命ずるがままに

どれだけ血に抗ったところで、お前は結局、兄貴と何も変わらねえ。

お前は結局、兄貴と一緒になんだ。

血に従って殺せ。夜兎を誇って殺せ。俺たちの居場所には戦場しかない。

戦場で生き残るにはそれしかねえんだ。それが死ぬまで戦い続ける獣達の宿命……

「夜兎の宿命よオオオオオ!!」

確かに、ドゴン。と屋根瓦を突き抜けるほどの力があつた。そんな音を聞いたからだ。

だが、何故自分はその音を聞いている。なぜ今までの怪我が痛んでいるだけなのだ。

そつと目を開けてみると、さっきの薙刀の小僧が化け物を羽交い絞めになっているじゃないか。

「……何のマネだ」

「お前のためじゃない」

最初に新八は言った。　銀さんと……約束したんだ。

「神楽ちゃんは僕が護る！！」

僕が……僕達が信じる神楽ちゃんを護るんだ！！

夜兎でも、イカれた兄貴の妹でもない。

ぶっきらぼうで。生意気で。大食らいで。でも、とっても優しい女の子。

「僕等の、大切な仲間を護るんだ！！　お前なんかのために神樂ちやんの手は汚させはしない」

目を覚ませ神樂ちゃん。

君の敵は、僕等の戦う相手は、こんなチンケな奴じゃないはずだ。

神楽ちゃん!!

「……つくづく甘ったれた連中だ」

阿伏兔の言葉と同時に、衝撃と重さに耐え兼ねた屋根瓦が崩れていく。

「戦場では殺すのを迷った奴から死んでいくんだってよお……」

一層派手な音と共に、落ちていく三人。

「さて、ここでまた選択肢だ」

鳳仙を殺さずに鳳仙に殺されるか。鳳仙を殺そうとして鳳仙に殺されるか。

「さて、どっちを選ぶ？」

阿伏兔に押し上げられたお陰で、何処かの屋根に体を打ちつけた二人。

その様子を、そのまま落ちゆく阿伏兔が見守っていた。

「え？ どっちも殺されるって？ 堅い事言うなよ。たかがクイズ
だろ？」

人生は重要な選択肢の連続だ。お前さん達の甘い選択肢で何処まで
いけるか……

やってみるがいい。

「お前っ……」

言っただろう？
俺は

共食いは嫌いなんだ。

『人生は選択肢の連続』（後書き）

新八は、もう真っ暗闇しか見えない地面の底を見つめていた。

「新八……」

神楽の声がかすかに聞こえ、慌てて駆け寄る新八。

「私、負けてしまったアル。夜兎の本能に。自分自身に」

殺そうとしていた。

偉そうな事を言っておいて、結局、奴等と、兄貴と変わっていいなかった。

「そんな事ないよ。神楽ちゃん、僕等を護って戦おうとしてたじゃないか」

ごめん。僕が弱いばかりに……

新八には、これ以上何も言えなかった。

「何も見えない、何も聞こえない、どす黒い闇の中で聞こえたアル……お前の声が」

私を護ってくれたのは……新八、お前アル。

そこから先は、言葉の代わりに、大粒の涙がボロボロ溢れてくる。

「私悔しい。もっと強くなりたい……！」

皆を護れるくらい。誰にも、自分にも負けないくらい。

「僕もだよ。でも！」

すすり泣く神楽に、新八は力強く声を出す。

「こんな僕等の力でも、必要としてくれる人がいるんだ」

僕等にも、今護れるものがあるんだ。新八は言い連ねる。

いつだって、何かを護るたび、少しずつだけ強くなってきた。

だから、涙は拭いていこう。

「きっと僕等、また一つ強くなれるさ」

新八は神楽を担いで、部屋の中へと歩を進めた。

く何があっても信念は曲げるな。絶対にく（前書き）

近況報告…生徒の会の長になりました。

「何があっても信念は曲げるな。絶対に」

「ったたあ……イキナリ蹴っ飛ばすなんて酷いじゃない、お姉さん」

蹴られたわき腹を擦りながら、よっこいせと立ち上がる望朔。

「ごめんなさいね。女の子と戦うのは気は進まないけど、話し合いじゃ引き下がってくれないでしょ？」

そう言って、シャキンと出したのはクナイ。

戦意どころか、殺意すら感じるその笑顔に、望朔の舌先は彼女の吊り上った唇を張った。

「ふーん、サムライってのは海賊よりも物騒だねえ」

「侍じゃないわ。どっちかって言うとな忍よ」

その瞬間、嵐のように舞う時雨のクナイ。その間を縫うように避う望朔。

番傘の切っ先を時雨に向け、豆鉄砲を乱発して、そこいらに土煙を作った。

悪くなった視界で、女の影を目を細めて探す望朔。その耳が、わずかなヒール音をキャッチする。

「そこだっ！」

音のなる方へ、飛び蹴りを繰り出し障子を吹き飛ばす。

障子が屋根を二、三度跳ねて下の方へ落ちていく。その時、すぐ隣に人の気配を感じた。

「惜しかったわね」

望朔の額を目掛けた小刀を、辛うじて顔を反って避ける。

すぐに反撃の豆鉄砲を撃ったが、すぐさま回避する。

距離を取ってから、クナイを撒き散らす地球人に、かすり傷一つない事が腹立たしい。

番傘を一振りし、風圧で勢いを殺されたクナイは、そのまま急行直下した。

「あらあら……嫌な予感が当たっちゃった。お姉さんすごい強い」

「あら、宇宙最強の血を引く貴女にそう言って貰えるなんて光栄だ」

わ
」

「えへへっ。じゃあこれで……」

望朔は笑った。しかし、今まで浮かべていた笑みとは明らかに種類が変わった。

チャーミングな笑みから、好戦的な笑みへと。

それを、完全に見開かれた彼女のスカイブルーの瞳が物語っている。

「本気出してもいいよね」

そう言った瞬間、望朔の姿が消えた。

まるでゲームや漫画によくある、ワープ機能でも使ったかのように。

何処へ行った。あちらこちらを見渡し、時雨の視界は揺れる。

その時、時雨のすぐ傍に、時雨とは別の影が畳に浮かぶ。

ふと見上げると、視界に番傘を振りかざした望朔。

ウォン！！
五月蠅いくらいの風切り音と友に、番傘が床に大穴を空ける。

時雨も、これには冷や汗を禁じえなかった。

冗談じゃない。速さ、スピード力、パワー先程の討ち合いの比ではない。

こんなもの一発でもまともに食らえば死んでしまう。

反撃で投げたクナイも素手で弾かれる始末。

似てる……焦燥の念の中、時雨はふと思った。強さも。力も。かつて夜兎の頂に立った鳳仙と。

いや、もしかすれば……

その思考の途中、風を感じた。それも、自然者ではなく、もつと人為的な。

「戦いの最中に、考え事はいけないよ」

ズドン！！ 凄まじい音と共に、飛んでいく時雨。

壁にめり込むほどのその威力に、堪らず血が口から噴出す。

そのままずり落ち、重く感じる体に鞭を打って立ち上がった。左手が激しく痛む。

「へーえ。咄嗟に後ろに下がって直撃は避けたみたいだね。風で飛んだ？」

ゆっくり此方へ歩み寄る時雨に、望朔は話しかける。

「これ以上あたしと戦う気イ？ やめときなって。もうその左手、使い物にならないでしょ」

それでも、歩みをやめない時雨に、望朔は、はーあとうんざり気にため息をついた。

「じっとしてりゃ楽に……!?!」

望朔が言葉を止めたのは、掛けていた黒ぶち眼鏡が粉々に壊れて地面に落ちていったからだ。

米神から、伝う温かい液体からは、鉄の匂い。

そして、それをやってのけたであろう時雨は、空中に立って望朔を見下ろしている。

「な……!?!」

時雨は、望朔に反撃の策を与えることなく追撃する。空中から空中へと飛び移り、クナイを投げる。

何で空中を……そんな疑問に囚われた望朔にクナイを避けきる余裕などなかった。

辛うじて、時雨の蹴りを、両腕を胸の前で交差させてガードした。

白い素肌に、焦げた跡と熱気が立ち込める。

「何で、空中を……アンタ……アンタ一体何者!？」

それまで能面のように表情がなかった時雨が、やっと唇を吊り上げて口を開いた。

「誰かと問われれば『一般市民』と答えるけれど、今夜はこの名を名乗らせて貰いましょうか……」

時雨の唇が、続いて動く

「影蜘蛛」

この場所で番人をしていた時、頂戴し、吉原中にも、地上にすら通ってしまった異名。

何時如何なる時も、この名のもと、吉原の遊女や百華の仲間の安全を脅かす賊を処断した。

鳳仙の傀儡となり、死より苦しい日々を送る彼女達を護るために剣を振るった。

常世の国の太陽と、それを護る月を護るために剣を振るった。

もうこれ以上、吉原を、彼女達を賊の身勝手のせいで苦しめないように時雨は戦場に立つ。

「もうこれ以上、殺しを快楽とする貴方達の好きにはさせない」

「……や、ってみなよ!!」

齒車のように回りがなら跳躍し、そのまま時雨に向けて急降下しようとした時。

何かに引っ張られるような感覚と共に動きを止められた。

不思議に思い見てみれば、今度は自分が空中に浮いている。

いや、光に反射したピアノ線を見る事が出来た途端。理屈が理解できた。

これが……影『蜘蛛』の由来……意味が分からないと自嘲しながら望朔は目を閉じた。

カッン、コッン。

予想とは裏腹に、ヒール音が遠ざかっていく。

そっと目を開けると、武器を仕舞い先を歩き出していた。

「……ど、どういうつもり!?!?」

望朔の問いに、時雨は少しだけ顔をこちらに傾け口を開いた。

「私は何があっても女の子は殺さない。見くびらないで頂戴」

最初見た時と同じような笑顔を向け、今度こそ時雨は去っていた。

姿が見えなくなり、遂にはヒール音さえ聞こえなくなった途端、望朔は大きいため息をつく。

「あれが団長や上の連中が探してた『影蜘蛛』……」

確かに、噂どおり。彼女の戦闘能力そのものは化け物としか言いようがない。

しかし、噂ではもっと冷酷な女だと聴いていた。

団長、落胆しないといいけどね。

のしかかり続ける体重に、ピアノ線がプツリと切れた。

く何があっても信念は曲げるな。絶対にく（後書き）

くうちの子が彼氏彼女にやりそうな恋愛NGシチュエーションく

恋歌く逆お姫様抱っこ

李麻くデート中に迷子センターに預けられる

時雨さんく彼氏の存在ガン無視

く腹黒い奴ほど、笑顔が綺麗く（前書き）

荒い息を整えながら折れた左腕の応急処置を施す時雨は、先の望朔との戦いを振り返る。

第一に思ったのは際どい所だったということだ。

望朔が時雨が糸の上を歩き回っている姿に平静を欠いていなければ、今頃亡き者にされている頃だろう。

もう少し経験を積みめば、あの子もまだまだ強くなるのかもしれない。

恐ろしい事を、淡々と考えながら、手当てを済ませ、先を急ごうとした時だった。

ザッザッザ……畳の上を靴を履いた足が歩き回る音がする。

神楽ちゃん達？ いや、確かあの子達はヒールブーツを履いてい

た筈……

となれば……素早く背中の手を回し小刀を取り出して、その手でスパンと襖を開けた。

「……何してるの？」

開けた襖が仕切っていた部屋の隅っこで、体育座りをしている銀時に問う。

銀時は俯いたまま、ぼそっと、しかしハッキリとこう言った。

「……道……間違っちゃった」

「ここまで来ると呆れを通り越してお笑いね」

銀時を先導しながら、時雨は履き捨てた。

「うるせえ！俺からすれば襖だらけの皆同じ部屋なんだよ！！」

「あのね。八年前のあの日から日輪様は監獄囚同然の扱いを受けてるのよ。こんな座敷にいると思う？」

「八年前といやあ……お前、清太に色々言わなくていいのか？」

その言葉に、時雨は少し黙る。小さくため息をついてから、アホらしいと一蹴した。

「あの子は日輪様を慕い、日輪様は心からあの子の身を案じている。血の繋がりはなくとも、間違いなく親子でしょう？」

少なくとも、血が繋がっていても殺意を抱きあう親子よりはね。

銀時には、自分を先導する時雨の足音が、少し重くなったような気がした。

「腹黒い奴ほど、笑顔が綺麗」

「日輪様のもとへ行かせるな!!」

「ここで食い止めろ!!」

日輪のいる部屋のすぐ傍の一本橋。そこで百華の女達が賊の行く手を阻んでいた。

「しつこいなあ……」

ザッ……賊が跳躍して、瞬きをするより早く血飛沫が舞う。

既に事切れて倒れる女と、まだ生き残り、目の前の賊に震える女。

「女を殺すのは趣味じゃないんだよ。女は強い子を産むかもしれないだろ？」

笑顔で言いながら歩み寄る賊に、百華の者はもはや立ち向かう度胸も逃げる気力もない。

それを察したのか、賊は笑顔のままで掌を刀みたいにしてすつと上げる。

「まあ、君等の子供には期待出来ないか」

百華の首から血が噴き出ると、清太が止めると叫ぶのはほぼ同時だった。

「そんなに人を殺して何が楽しいんだ！ 何でそんな人をヘラヘラ殺せるんだよ！？」

「酷いなあ。ここまで連れて来てあげたのに。それにこいつ等、君の母さんをここに閉じ込めた連中だヨ？」

「頼んだ覚えはねえやい！」

賊改め神威は、相変わらず仮面のような笑みを浮かべながら、一室のドアを指して歩く。

「笑顔は俺の殺しの作法だ。どんな人生であれ、最期は笑顔で送って健やかに死なせてやらないとね」

逆に言えば、俺に笑いかけた時は殺意があると取ってもいい。

そう言って笑いかけて怯えた清太に、神威は冗談だよと笑う。

「俺は子供は殺さない主義なんだ。……だってこの先、強くなるかもしれないだろ」

君も笑といい。進む足を、重い木製の扉に向けて神威は言う。

「お母さんに会うのに、そんなシケた面してちゃいけないヨ」

隠していた身を晒し、狼狽した表情でその扉を見つめていた。

八年前。自分の自由と引き換えに、己が自由を奪われた人。

花魁などという呼ばれ名は、彼女にとってはただの飾りだ。

鳳仙は彼女を客寄せパンダとして使う以外は客も取らせず、一切の自由を認めなかった。

ここで腐って死んでいく事を母である日輪に強いたのだ。

正確には、清太の自由を願い、日輪自身がそれを望んだのだ。

つまり、清太のこの行動はそんな日輪の決意を踏み躪る事に他ならない。

でも、それでも会いに来た。日輪の辛苦を覚悟を全て無視してでも。

己が、どれほど危険な目に遭おうとも。

他の誰でもない。清太自身の覚悟を。決意を。貫くために。

清太はゴクリと唾を飲み、震える手を一度そっと伸ばした。

一度退けを感じて、指先を丸めたが、覚悟を決めて再び手を伸ばしたその時だ。

「帰りな」

まさに鈴を転がしたような、凜とした綺麗な声が、扉の向こうから聞こえる。

「ここにアンタの求めるものなんてありやしないよ……帰りな」

「か……母ちゃん!!」

母親の声に、清太を縛っていた何かが外れた。

触れる事さえ躊躇っていた木の錠も放り投げ、清太は扉を両手で力一杯叩く。

「開けてくれよ！　おいらだよ！　アンタの息子の清太だよ！！」

「私に息子なんていやしないよ。アンタみたいな汚いガキ、知りやあしない」

その言葉に、扉を叩く清太の両手はパタリと止む。

代わりにその小さな手が、握り拳を作って小刻みに震えだした。

「……何で汚いガキだって知ってんだよ……！！」

見てたんだろ？　　いっつもおいらがあんたを下から見てた時

アンタもおいらの事見てたんだろ

何度叫んでも答えてくれなかったけど、ホントはおいらを巻き込むまいと必死に声が出そうになるのを我慢してたんだろう？

母ちゃん……おいら、何にも知らなかった。母ちゃんがこんな所で苦しんでるだなんて

何でおいらばかりこんな不幸なんだろう。って

爺ちゃんと貧しい生活してた時も、爺ちゃんが死んで一人ぼっちになった時も

全部おいらを捨てた母ちゃんのせいにしてた

おいら、何にも知らなかった。何にも分かつちやいなかった

母ちゃんが、ずっと……おいらを護っていてくれてたなんて……

嗚咽を漏らしながらそこまで言うと、今度は激しい打撃の音がする。

清太が全身を、扉にぶつけている音だ。

とは言っても、子供の全身タツクルの威力など高が知れている。

数歩下がって助走をつけてからぶつかる。ぶつかってからまた数歩下がる。

それを繰り返しながら、清太は叫んだ。

「今度はおいらの番だ！　今度はおいらがここから、母ちゃんを救

い出す!!」

今度は、おいらが母ちゃんを護る!!

もうこんな所に絶対に置いて行ったりしない

「今度こそここから出るんだ……親子で一緒に地上^{うえ}に行くんだ!!」

だから母ちゃん……ここを開けてくれ! 母ちゃん! 母ちゃん
!!

「やめとくれ!!」

先程より、荒々しい。というより、何かを必死に抑えるような声色で彼女はピシヤリと言った。

「アンタの母ちゃんなんてここにはいない……そう言っただろ」

「そんな事あるまい」

母ちゃん。言いかけたその言葉を、老人の声が遮る。

「そんなに会いたくば会わせてやろう、このワシが」

「ほ、鳳仙!!」

「ありゃー。見つかった」

鳳仙は連中の反応を一通り眺めた後、それを一瞥するように鼻を鳴らし、懷に手を突っ込んだ。

「連れて行くなら連れて行け」

と、懷から出し、投げた髪束がボトンと音を立てて地面に落ちる。

それを、呆然と見つめる清太に、鳳仙は続ける。

「童。それがお前の母親だ……お前の母親は日輪ではない」

とうの昔にこの世に居らんわ。

何を……言って……母だと言われた、髪のを束を開ききった目で見る。
やる。

「吉原の花形たる花魁が、誰にも露見することなく子を産むなど、出来るわけがあるまい」

八年前のあの日、一人の遊女が子を孕んだ。

しかし吉原で子を孕めば、腹の子供もろとも始末される。

そこで日輪を筆頭とした遊女数人は、その遊女を匿い人知れず静かにその子を取り上げたのだ。

そう……それが……

「それがお前だ、童」

その後、清太を産んだ母は衰弱し、清太を産み落とすと共にこの世を去った。

つまり、そこにいるのは清太の母親ではない。

母に憧れながら、母になることも叶わない。ただの母親ごっこに興ずる哀れな女。

「どうして……どうしてこんな所まで来ちまったんだい？」

扉の向こうから聞こえる、か細い声。

「ほっときや良かったんだ、あたしの事なんて」

あたし達の分まで、地上^{うえ}で元気にいてくれりやそれで良かったんだ。

「アンタが命張って、護るほどのモンじゃないんだよ、あたしや」

日輪のその言葉を聞いた鳳仙は、にいと唇を吊り上げて言う。

「お前の母親などこの世の何処にも居らんわ。分かったらその形見だけ持って消えろ」

それとも。冥土で母親に会いたいというのなら別の話だが。

鳳仙の低い、嘲笑。やがてフェードアウトして聞こえなくなった時だ。

ドン！ ドン！ ドン！！
また、無理矢理ここをこじ開けようとする音が聞こえた。

まさか……

「母親ならいる！　ここに！！　オイラの母ちゃんならいる！　ここに！！」

常夜の闇から、地上に産み落としてくれた母親が、ここにいる。

命を張って産んでくれた母親が、ここにいる。

血など繋がっていなくても関係ない。

「おいらの母ちゃんは……この人だアアアアアアア！！」

そう叫びながら、清太は再び木の扉にぶつかる。その様に、鳳仙は深いため息をついた。

そのため息が大気に溶けた瞬間、夜王が拳を作り出し、清太に殴りかかる意を見せた時

ズガン！！

流星の勢いで、扉に何か刺さる。反動で吹き飛んだ清太は、何事だと扉を見上げる。

湯気を上げて、扉に深く刺さっているのは、木刀。

絵に書かれた「洞爺湖」の文字を見て、清太めが大きく見開く。

「おいおい。聞いてねーぜ？　吉原一の女がいるって言うから来てみりゃあよお」

どうやらコブ付きだったらしい。

木刀を中心に、円形に近い形でミシミシとひびが入る。

そつと手で押せば、力なく扉が開き、暗い部屋に明かりが差し込む。

差した光から現れたのは、綺麗な涙を流す、綺麗な女性。

店長。新しい子頼まあ。ドぎついプレイにも耐えられる奴をよお……

「貴様、誰だ」

夜王の問いに、突如現れた男は、進む足を止めて答えた。

「なあに……ただの女好きの遊び人よオ

く腹黒い奴ほど、笑顔が綺麗く（後書き）

く入れ違いく

友達「私さ、冬獅郎めっちゃ好きなんだよね」

私「わかる！ 私も好きだよ！カッコいいもんね！」

友達「そうそう。男らしいよねく。クールだしっ！」

私「だよねー！ あの私、中の人も好きなの！」

友達「あの少年ボイスたまらんよね！！」

私「……は？」

・
・
・
・
・
・
・
・

友達「え、いや、だって朴さんだし。エドだし。謙信様だし」

私「何言ってるの中井さんでしょ？ ゾロでしょ？ 筆頭でしょ？」

友達「……それ土方さんじゃない？」

私「え？　だって十四郎つつたじゃん」

友達「いや私、冬獅郎つつただけど……」

ま、紛らわしいへpへ

それは、まだBLEACHを知らなかった頃の私が、シロちゃんに抱いた第一印象でした。
今は好きですお！

「143話がまだ終わらない。あ、ヤベ。タイトルで愚痴っちゃった」(前書き

お久しぶりです！ 会長業務(?)が鬼畜過ぎておうち帰りたい梨栖です^0^ノ

挨拶で人前出て、メンバーに業務連絡メール送ってやる事指示してウヒイン。です

先代はこんなやってたのか……(・D・、)

は！そんな事より……

神楽ちゃんハピバ！

いつも、色んな神楽ちゃんをストーカーし、色んな神楽ちゃんに萌えてます！

これからも、色んな神楽ちゃんをストーカーし、萌えていきます！

とりあえずもう一回だけでいいから神楽さんを拝ませて下さい(↑自重!!！)

それではお久しぶりの本編、始まり始まり！*^^*

く143話がまだ終わらない。あ、ヤベ。タイトルで愚痴っちゃったく

開いた扉から現れた部屋の中へと歩く清太。

母は、まだ自分に背を向けたまま、こっちを見ようとしなない。

戸惑いながら、清太は恐る恐る口を開いた。

「か……母ちゃん」

「いいのかい？」

清太の台詞に余韻も残さずに、日輪は問う。

いいのかい？ 血も繋がってないのに、こんな薄汚れた女を、母ちゃんなんて呼んでも

いいのかい？ 今までアンタに何もしてやれなかった私を、母ちゃんなんて呼んでも

母のどの問いにも、子はただ一言、母ちゃん。と帰すだけ。

いいのかい？ あたしなんか、アンタの母ちゃんになっても

その問いに、子は拳を握り、ついに駆け出した。

まるで、それまで自分の何かを抑えていた箍を外すように。

「母ちゃあああああん！！」

「清太ああああああ！！」

そこから先に、言葉など必要なかった。

「……そうか」

親子の感動の再会を見届けた傍観者の一人が、銀時達の方に向き直る。

「貴様が童の雇った浪人か」

そして……と鳳仙は続ける。

「見知らぬ顔の中に、一人亡霊が混ざっていたらしいな。……『影蜘蛛』」

浪人の横にいた、見覚えのある美女は、あら。と相変わらずの作

り笑みを浮かべる。

「お久しぶりでございます、鳳仙様。私が付けた傷が癒えたよう
で何よりですわ」

「相変わらず、不愉快な女……百華に処断された筈の亡霊が、何
しに来た」

「夜王の相変わらぬ横暴ぶりに見兼ねてね。蘇ってきたのよ、死
神を連れて」

『影蜘蛛』。その単語を聞いた神威のアホ毛が、ひょこんと揺れ
る。

それに背を向けている鳳仙が気付くわけもなく、今度は銀時に目
を向けて話す。

「……よくもワシの国で好き勝手やってくれたな」

「好き勝手？ 冗談よせよ。俺ア女の一人も買っちゃいねえよ？」

「そうか。ならばこれから酒宴を用意してやる。血の宴をな！」

「……過分な心遣い傷み入るが、そいつあ遠慮するぜ。ジジイのV字の生え際見ながら飲んだって、何も美味かねえ」

こんなところで酒飲んだって、何にも美味かねえ。建物の中を見回して、銀時は言う。

確かに、よくまあこれだけあちこちから別嬪さんを集めてきたものだよ？

だが、どんだけ美女を集めようが、どんだけ美酒を用意しようが

俺ア、テメエの国でさけなんざ一滴たりとも飲まねえ

鎖で繋がれた女から酒なんて注がれても、何にも美味かねえんだよ

……泣きながら酒なんて注がれても、何にも美味かねえんだよ

ババアだらけの薄汚ねえスナックでも、笑って酌してくれんなら、俺アそれがいい

悪辣なキャバ嬢が蔓延るぼったくりバーでも、皆が笑って酒飲めるなら、俺アそれがいい

美女も美酒も、屋根さえもねえ野っ原でも、月見て安い酒飲めるなら、それがいい

「女の涙は、酒の肴には辛すぎらァ」

キン。百華の肉塊から拝借したであろう刀の身を鞘から抜く。

「鎖を断ち切りに来たか……この夜王の鎖から日輪を。吉原の女達を解き放とうと言うのか」

「そんな大層なモンじゃねえ。俺ァただ酒が飲みてェだけだ」

「天下の花魁様に、立派な笑顔つきで酌してもらいたくてな」

「こりゃあ面白い」

急速に緊迫していく空気の中、相変わらず神威は笑いながら、鳳仙の肩に手を置いた。

「たかだか酒一杯のために夜王に喧嘩売るとは、地球にも面白い奴がいるもんだネ」

ねえ。鳳仙の旦那？ 同意を求める神威に、鳳仙は石柱を砕く拳で応える。

シュウウと土煙を上げていく中で、神威は一際大きい渋緑の番傘を咥えた兎の像に腰掛けていた。

「おー怖。そんなに怒らないで下さいよ。心配しなくてももう邪魔はしませんよ」

「神威！ 貴様何が目的だ！」

確かにこの青年がとってきた行動は不可解だ。

鳳仙の命を狙ってみた次は、清太を手助けし日輪の元まで手引き。

そうまでして、鳳仙の邪魔をしたいのか。それとも……鳳仙は憎らしい笑みを浮かべて続ける。

「母を求める童の姿を見て遠き日でも思い出したか？」

「何を世迷言を」

その質問に、瞼だけを開いた神威が一蹴した。

「夜王を腑抜けにした女、一体どれ程の女かと思えばボロ雑巾に縫るただの惨めな女とは……吉原の太陽が聞いて呆れる」

違うんだよ。俺の求めている強さは。そんなしみつたれたものじゃない。

「妹だろうと何だろうと構わず殺す。そういう強さ？」

鳳仙とのやり取り以来黙っていた時雨が、ここでようやく口を開く。

その瞬間、神威の目が光を受けて鈍く光った。

「皮肉ね。実の妹を殺そうとする兄もいれば、血の繋がりはなくとも親子より強い絆がある人達もいる」

時雨はそう言いながら、背中の小刀を鞘から引き抜いた。

「あり、お姉さん……怒ってる？」

「神楽ちゃんを殺そうとしてくれた上に吉原の太陽にナメた口利い

てくれたんですもの。当然よ」

広がる殺伐とした空気に、夜の王の乾いた笑い声が響く。

「面白いではないか！」

鳳仙は兎の像へと跳躍し、兎の頭の上に両足を着けた。

袖から手を抜き取り、着流しの上部だけを脱ぐ。筋肉がその強さを物語っていた。

「その絆とやらの強さ……見せて貰おうではないか！」

それを見た銀時は、一度鳳仙を睨んでから、日輪が隔離されていた扉の方へ向かう。

貴様等が、ワシの鎖から解き放てるか……

ワシが、奴等の絆を断ち切れるか……

「勝負と行こうではないか!!」

兎の口に挟まった傘を取る者。扉に刺さったままだった木刀を抜く者。

小刀の柄を咥え、懷に指を滑らせるもの。兎の像に座ったまま笑みを浮かべ続ける者。

「地球人風情にこの夜王の鎖……断ち切れるか！」

「エロジイイの色んな汁の糸で出来たような鎖なんざ……一太刀で仕舞ェだ」

明けねえ夜なんざこの世にはねえ。この街にも朝日が昇る時が来たんだ。

夜の王は……

女性の魅力の「み」の字も分からないようなお子様は……

「日の出と共に、おねんね（しやがれ！／してなさい！）」

く143話がまだ終わらない。あ、ヤベ。タイトルで愚痴っちゃったく（後書き

11月、絵描き物書きとしては、もう一つ待ち構えているイベント。

それは、11月22日。いい夫婦の日。私も、是非参加したく思っているのですが、皆様の中で、どれ程の方が11月22日に乗っかるんでしょう（ゝゝゝ）

初参加（の意志がある）梨栖さんとしては、どんな感じでやってけばいいのか是非聞きたいですん！ゝ（へ▽へ）ノ

く四本足で立つのが獣 二本足と見栄で立つのが男く (前書き)

一昨日はポッキーの日でしたね^^

その日が誕生日だった友達には、借りていた3Zの小説をプレゼント。

生憎ポッキーを調達できなかったのでトッポを代用。トッポ三本揃えて、三刀流の真似をしてゾロの誕生日を祝いました！

11月11日に祝うべき人、物……私は全て祝えました！幸せです
(。▽。)

く四本足で立つのが獣　二本足と見栄で立つのが男く

「銀さん！　時雨姉！！」

それぞれの敵を目掛けて、最初の一太刀を振るう銀時と時雨。

最初に、クナイをぶん投げて神威に仕掛けたのは時雨だった。

容赦なく急所を目掛けて飛んでくるクナイを、神威は一旦兎の像から離れ跳躍。

像を踏み台に同じくらいの高さまで昇る時雨は、啞えた小刀の柄を握る。

小刀を振るう相手は、無論空中にいる神威。

「おお怖い。困ったなあ……俺に女を殺す趣味はないのに。特に強い子を産みそうな女は」

連続で繰り出される斬劇を難なくかわしながら神威は言う。

「そうだったの。でもね、銀河上に生息する男を殺すのは……」

小刀を振るう手を止め、体をひねって蹴りを繰り出す。

その直後、部屋の柱の一本が酷い音を立てて崩れ、兎の像にヒール音が短く鳴る。

「私の趣味なの」

やったか。

遠目で土煙を眺める。が、その甘い考えはすぐに訂正した。

背後に感じる気配がそうさせたのだ。振り向いて、キッと睨む。

「夜王に傷を負わせただけの事はある、ここまで容赦ないとは思わなかったヨ」

「今のは避けられると思って無かったわ。流星は春雨の団長さんね」

次はどういう手に出ようか……小刀を握り閉めた時だ。

ズゴシャアー!!
すざましい音に首をやれば、先程まで銀時達といた橋が無い。

土煙が少し晴れて見えたのは、傘を振り下ろして、下に着地した鳳仙。

状況的に考えて、彼が傘を振るったのは銀時を殺すため。

橋の破壊は、そんな夜王の攻撃の巻き添えを食らった被害者だろう。

なら銀時は……目を凝らして見ると、確かにそこに、人影があった。

ほう、と鳳仙が傘を地面目掛けて押し付けながら言う。

「ワシの一撃を止めたか」

ふざけやがって。攻撃を受けながら銀時は思う。

たったの一撃……たった一太刀受けただけで……

身体中の気力も体力も全部削ぎ落とされた気分になる。

『別に。激昂してる相手の隙を突けば誰でも倒せるわよ』

今なら時雨のあの言葉の意味が分かる。成る程コレは正面から殺り合うには辛い。

夜王鳳仙……コイツが夜兎の王と呼ばれた男の力ってわけかい。

隕石でも落ちてきているかのような衝撃に耐えていると、不意に拍手の音が聞こえた。

「スゴイスゴイ。あの夜王相手に十秒もつなんて……こいつは面白くなってきた。頑張ってヨお兄さん。俺応援したくなっちゃった」

その神威の声に、銀時は汗を浮かべながら、足を震わせて立ち上がった。

「ナメんじゃねえクソガキ。十秒どころか天寿まっとうしてやるよ！ 孫に囲まれて穏やかに死んでやるよコノヤロー！」

「貴様の天寿などとうに尽きておるわ。この吉原に、この夜王に盾突いた時からな」

その瞬間、双肩に段違いの重みが落ちて来る。

おかげで、一度は立ち上がった銀時は、膝を折ってしまう。

「うがあああああああああああああ！！」

掛け声と共に、銀時は叩くように地面を……橋を形作っていた木を踏み付ける。

それに反動して、シーソーのように持ち上がる、木材は鳳仙に直撃する。

無論、それで手傷を負うような男ではないが、銀時から注意を逸らすには十分だった。

しかし、手傷を負わせる気で振るった木刀はかわされ、踏み付けられそうになる。

距離をとろうとしたその時……銀時の視界に、鳳仙の掌が見えた。

「銀さん!!」

瞬間に、清太の叫び声が響く。次に神威が呟いた。

「あーりゃりゃ。もうお終いか……つまんないの。ねえ、影蜘蛛さ……」

夜王壁に叩きつけられた銀時を見た神威が声をかけた時、そこには誰もいなかった。

「……デカイ口を叩くだけはあるらしいな。あくまで地球の中だけでの話だが」

所詮は我等天人から国さえ護れなかった貴様等侍に我が鎖、断ち切る事など出来る筈がなかったのだ

獅子は縄張り争いに負ければ縄張りと共に己の保有する雌をも明け渡す

「分かるか！ 貴様等侍にはもう居場所も、その手で女を抱く権利すらありはしないのだ」

とつくの昔に縄張りも、雌もワシ等のものになってしまったのだから

そう……この街も女も日輪も全てこの夜王のもの

奴等はワシの鎖に繋がれた飼い犬だ。何処にも逃げられはせぬわ

そして貴様等負け犬に、これを止める権利はない！

悪いのは何も護る事の出来なかった貴様等弱者なのだからな

そして……

「ただの保有物に過ぎぬ貴様が我等に盾突くなど以ての外!!」

銀時を押さえつけている途中に鳳仙が振り向いた先にいたのは、
夜王にクナイを投げかけた時雨

その手首は、いとも容易く鳳仙の空いた手に掴まれ、壁に叩きつけられる。

「かはっ……!!」

苦しげなうめき声と共に、衝撃でめり込んだ壁をずり落ちた時雨は暫く動く気配がなかった。

これで後はこの弱者を殺せば……そう思った時、右目に痛みが走った。

そこに右手を持って行ってやると、自分の目玉に棒状のものが刺さっている事が分かる。

先が金属で出来ていて……何だコレは……

「負けてなんかいねーよオ、俺達ア……今も戦^{コイツ}ってるよ俺ア。時雨も……テメーが保有するにや有り余りすぎる」

「きつ、貴様ア!!」

銀時は、目玉に煙管を挿しながら睨む鳳仙を蹴り飛ばして、その場にへたり込む。

「銀さん！」

「来るなァ！」

身を案じて上から駆け寄る清太を銀時は大声で制止した。

「何してんだテメエ……さっさと行かねえか！ 母ちゃん連れて、早くここから逃げんだよ……！」

「い、嫌だ……！ 銀さんを見捨てて、おいらだけ逃げろって言うのかよ……？」

その上、勝手にこんな事に巻き込んで、そんな事が出来る筈もない。

清太の言い分に、銀時はせせら笑いながら言う。

「『巻き込んだ』？ 勝手に顔突っ込んだの間違いだろ」

行けよ。お前等親子に何かあっちゃ俺達あ、ここへ何しに来たのか分からねえよ

そう続ける銀時に、清太はもう一度、嫌だと言った。

「そんなの絶対嫌だ！！ 役には立たないけど、おいらが銀さん達を助ける！！ ずっと最後まで一緒にいる！！」

銀さん言ったじゃない！！

清太の瞳に、みるみる涙が溜まっていく

血は繋がってなくても、家族より強い絆があるって

そうさ、血なんか関係あるかよ

おいらを泥棒から足洗わせてくれた。まともな生活が送れるようにしてくれた

一人ぼっちのおいらと、一緒にいてくれた。短い間だったけど楽しかった

じいちゃんが死んでから初めてだった。あんな楽しかったの

母ちゃんと何も変わらない。皆は……銀さんは……

「おいらにとっちゃ、大切な家族なんだよ!!」

大切な事を数え切れないほど教えてくれた、かけがえのない人達
……

ここで逃げると言うことは、そんな人達をこんな所に捨てて行け
という事か

こんな所で見殺しにして行けという事か!

「それが聞けただけで俺アもう十分だよ……行ってくれ」

銀時は、清太と目は合わさずに、笑ってみせた

俺をまた、負け犬にさせないでくれよ……

次の瞬間、銀時はもたれかかっていた壁ごとめり込んだ

く支え支えられるのが親子く（前書き）

お久しぶりです！学校生活もひと段落ついたし、番外編ばかり投稿して、

「デメエさつさと本編進めろやこのへボ作家」とお思いの読者様も多いと思います！

待たせたなお前等！ヒーハー、（。D。）。ノ

く支え支えられるのが親子く

「行ってくれ……俺をまた負け犬にさせないでくれよ」

銀時のその言葉の直後。清太の目には、全てのものがスローモーションで見えた。

吊り上る銀時の唇。でも鳳仙が起き上がってきて……それから……

スゴンと鈍い音がして。壁の穴が開いて。その壁の穴に動かない銀時が……

「銀さああああああああああん！！」

「哀れな男よ」

静まり返った空気を、鳳仙の無機質な声色が破る。

国も主君も護るものを全て失い、最後は他人の者を護って死んで
ゆく

己の剣にそんなに意味が欲しいか！？ そんな剣では何も守る事は出来はせんわ！

そう、己の命さえ！

「銀さん……銀さ……っ！」

先程とは違い、か細い声で繰り返し彼の名を清太。遠目でも泣いている事が分かる。

「泣いてる暇なんかないんじゃないのかい？」

自分を母親の元まで手引きしたあの青年の声に、清太の顔が上がった。

「男が己の命を賭した最後の頼み、こいつは聞いてやった方がいいんじゃないのかな？」

清太はその言葉に返事をせず、もう一度銀時を見る。

それから、全力で日輪のいる場所まで走った。まるでさっきまでの記憶を振り払うかのように。

それほど必死に走っていたため、聞こえなかったのだろう。

「無駄な真似を……」

鳳仙は清太を目で追いながらそう呟いた。

「母ちゃん！」

背を向けた母、日輪の元に着いた清太は、開口一番に呼びかけた。

「逃げよう！　今すぐおいらと、一緒にここから逃げるんだ！！」

そう呼びかけられても、立ち上がろうともしない日輪。

焦りから、痺れを切らした清太が彼女の手を引く。

それでも日輪は、その身を、一寸たりとも動かそうとはしなかった。

「……母ちゃん？」

どうして、何も……どうして一歩も動こうとしないの？

そんな清太の問いに、日輪はまた背を向けながら答えた。

「あたしは逃げられない」

やっと分かり合えたのに何で……視線を投げ掛けながら清太はそつと引いた手を下ろす。

「ここから逃げる事は出来ないんだよ……あたしは」

振り向きながら言う日輪の顔は、能面のように表情がなかった。

「何言っただよ……今更！ 何言っただよ！ 母ちゃん！！」

「ごめんよ清太。アンタだけでも逃げとくれ」

「かあ……」

言いかけて、清太はふと一つの可能性に気付いた。

一見、鳳仙を恐れてるように思える。また、鳳仙の手から自分を護るためのようにも聞こえる。

無論、彼女の言葉にはそんな意味も含まれているのだろう。

ただ……本当にそれだけか？ 清太の思考回路がぐるぐると回る。

もしかして

そう考え付くや否や、清太は、母親を飾る煌びやかな着物を捲く
っていく。

日輪の制止の声にも耳を貸さずに、何枚も重なっている着物を捲
くっていく。

やがて、彼女の素足が見えた時、清太の目の色が、濁った。

「言っただけだ。吉原の女は……日輪はワシのものだと。何処にも
逃げられはせぬと」

地上に飛び立とうにも、此処には空などない。

ましてや飛ぶための翼など、とうの昔に千切れ落ちておるわ。

「最早その女、一人では歩く事はおろか、立つことさえまならぬ」

清太が目にしたのは、日輪の踵の少し上、足の筋の筋を両断する
ように在る、バツテン印。

「もう何処にも行けはせんのだ。ワシの元から飛び立つ事など……」

出来はせんのだよ。

「……千切れ落ちた？ 貴方が無理矢理千切って落としたの間違い
でしょうに……」

片腕だけの力で上体を起こし、壁に背中を預けて座った時雨が言う。

それを見た鳳仙は、まだ生きていたかという表情で、一瞥し、清太のいる方へ向き直った。

「……酷いよ……母ちゃんが、一体何したってんだ。何で母ちゃんだけ一人、こんな……」

「いいんだよ」

泣きながら、そう言ってくれる清太に、日輪は優しくそう言った。

「もう十分だ。アンタはもう私を救ってくれたよ、清太」

アンタに一目会えた。もうそれだけであたしは十分だよ

母ちゃんって呼んでくれた。それだけで私は、もうどこでだって生きていける

「だからあたしに構わず早く行きな。生きておくれ清太」

アンタは私の……吉原の希望なんだ。

アンタの産声が。表情が。

女にも母親にもなることが出来なかった彼女等にとって、どれだけ嬉しかったことか。

「アンタが生きてさえくれば、あたし達はどんな地獄でだって生きていける。どんな辛苦にだって耐えていける」

だから、私達の分まで力一杯、自由に生きとくれ。

その台詞が終わった途端に聞こえる、鳳仙の人を嘲る笑い。

「八年前と同じだな。希望を託し童を地上に逃がす女……全く同じだよ」

一つ違うのは……と、逆接の言葉をおいてから、次の台詞へ繋げる。

「今回童は逃げられぬという所だけだな」

地面に刺していた傘を抜き取って、肩に担ぐ。

「母親ごっこはもうお終いだ日輪」

薄汚れた遊女が、母になど成れるわけもない！
どなれない
お前は母親にな

「証明してやる。その童を……殺してな！」

その直後、カツンと鳴る足音。

見れば、時雨が、クナイを持って、構えているではないか。

「ゴチャゴチャ御託並べてんじゃないわよエロジジイ」

女性としての価値も、者としての価値さえも奪って、それでも傍へ置いておく。

「……要するに、日輪様が必要なんでしょう？ 一人の男として」

一瞬、片目を見開いた鳳仙だったが、すぐにあの、嘲笑が飛んできた。

「必要なもの？ 何を抜かすかと思えば。むしろその逆だ」

これまでワシはこの力で、金も。権力も。女も。好きに手に入れた
てきた

「だがこのワシにも一つだけ手に入れられないものが在る」

自分で広げた掌を、忌まわしげに見下ろして、続ける。

この夜王を以ってしても屈せざるを得ない相手が……在る

ワシが、こんな地下にまで追い込んで逃げ込んだ。だが奴は！
この常闇にあっても変わらぬ姿で存在している

ワシにとって……いや、夜兎にとって最も忌むべき存在。唯一無二の天敵……そう、太陽が

どれ程の苦難にあっても決してその瞳は光を失う事はない

どれほどの苦界に身を堕とそうと決してその魂は堕ちることはない

その気高き姿はまさしく……あの忌まわしき太陽

「……渴きが癒えぬのだ」

どれほど酒を食らおうと。どれほど女を抱こうと。どれほど血を浴びようと

太陽が輝く限り、ワシの渴きが癒えることはない

太陽を地に引き摺り下ろす！！

死を以ってではない……あの気高き魂を引き摺り下ろし、我が前に日輪を屈服させる

泣き喚き、ワシに助けを請うまで追い詰める

太陽を手に入れる！　それ以外にこの魂の渴きを癒す手は在りはせぬ

「お前の全てを壊し、お前の全てをワシが手に入れてやるわ！　我が下に沈むがいい！　お前はワシのものだ！！」

その瞬間、鳳仙の頬を掠めて、クナイが飛ぶ。

「ごめんなさい。おじいさんの話に興味無くてね。聞いてなかったわ」

クナイを投げた本人は、涼しい顔でそう言い放ってから、次の台詞を口にする。

「教えてあげましょうか。翼を失った鳥が、もう一度、陽の元で羽ばたく方法」

「ついに気が狂ったか。何を世迷言を……」

「沈められるものなら沈めてみろよ」

鳳仙がそう言いかけた時、ギシッギシッ。重たい人間が、床を歩くような音がした。

例えお前が、何度太陽を沈ませようと。空が晴れている限り太陽は昇る

何度でも

例えお前が、何度空を曇らせようと、おいらが真っ青に晴らす

何度でも！

例えお前が、何度母ちゃんの顔を曇らせても、おいらが笑顔に戻す

何度でも！！

折れた端の前で、木材の軋む音が止む。

そこにいたのは、母子のように背負われた日輪と、膝をガクガクと震わせた清太だった。

く支え支えられるのが親子く（後書き）

近況報告…ロビンちゃん好きすぎて辛いですロビンちゃん。）。
0 ^。。

ゝ寝物語は信用するなゝ（前書き）

どうも！漫画読んで、メリー号との別れにボロ泣きした夜にCP9に追いかけ回されるという末恐ろしい夢を見た梨栖です（＾０＾）ノ

しょーもない事がしくて、しょーもない企画思いついて、コソコソやっています！ 詳しくは、私の活動報告「ゝ企画起こしてみせるぜっ！！ゝ」をご覧下さい！参加頂けたなら尚更嬉しいです^^v

「寝物語は信用するな」

橋の上から、啖呵をきった晴太は、そのまま外へと向かう。

「童！ 貴様……」

後を追う事を許さない視線を確認した鳳仙は、そう言って晴太を睨む事しか出来ない。

何もかもに目もくれず、晴太は思い足取りで、地上へと向かう。

「清太、離しな！ アンタ、大人一人背負って吉原から逃げられる
とでも……！」

「……ギャーギャー騒げばいいや……」

そうやっておいらも、母ちゃんの腹の中で騒いでたんだろ？

赤ん坊の頃は、親に背負われて

大人になったら、今度は年取った親背負って……それが親子って
もんだろ？

「背負わせてくれよ、おいらにも。自分ばかり背負って、終わら
せないでくれよ」

母ちゃんの一人や二人、息子なら背負って当然だ。

何にも重かねえや……今まで何も背負ってこなかったんだ。

えん
これくらいが丁度いいんだ……この重さが、嬉しくてたまんね

「せ、晴太……」

背負われた日輪は、自分を背負ってゆっくりでも一歩一歩踏みしめて歩く息子の名を呼ぶしかなかった。

「そいつは頼もしい話じゃなあ」

その時、晴太達のいる廊下のまた一つ上の階の廊下から声がした

凜とした声の後に降ってくるクナイの雨嵐。

大した危機感を感じずに避けた鳳仙。しかし、内心はこれでもかというほど動揺していた。

この吉原に……目の前の影蜘蛛を除いて……クナイを扱える人間。

そんな人間……いや、自警団は一つしかない。

ヒールブーツが床を踏みしめる音。しかも音の厚みから、一人や二人ではない。

「ならば背負って貰おうかのう、ここにいる皆を……貴様の母親、50人!」

優しい息子を持って幸せじゃ……わっちゃ

「私は息子に背負われるだなんてゴメンだけどね」

簡易な包帯巻きのみの手当てを施されている月詠の姿をあえてみずに、時雨は言った。

「貴様等……何の真似だ!」

先程から自分を見下ろす姿勢と、態度をやめようとしないう月詠。

彼女が従えるのは、自分に……この夜王に向けて刃を向ける百華の者達。

こやつ等……何の真似を……よもや……

「謀反？ このワシに……この夜王に謀反を起こそうのか！
」

「わっち等は知らぬ。悪い客に引っ掛かっただけじゃ」

吉原に太陽を打ち上げてやるなどという大法螺おおぼらを、寝物語で聞かされた

この者共も、皆その男に騙されたクチでのう……ほら、あそこで

伸びている奴じゃ

信じてきてみればこの様。

「……笑わせるではないか。偉そうな事を言って何じゃこの体たらくは！」

光もなく、未だ夜の王がのさばっているこの吉原に……

太陽など何処に上がっている？

「ぬしに期待したわっちが馬鹿だった。こんの……」

マウンドのエース顔負けのスイングで振りかぶる。

「大法螺吹きめがアアア！」

シャン……と金属の擦れる音と共に、投げ放たれたクナイが大法螺吹き目掛けて飛ぶ。

そのコンマ数秒後、シュツと音がして、銀時の目の前で、クナイ

が止まる。

クナイの両側面を挟む、日本の指が確認できた。

「……法螺なんざ吹いちやいねーよオ……太陽なら上がってるじゃねーか」

そこかしこに、たっくさん

立ち上がった銀時は、緩慢な動きで歩を進め、真剣の方を手にとった。

「眩しくて眠れやしねえ」

「貴様……!!」

「銀さああああああああああああん!!」

「立った立った。アハハハ……まだやるんだ」

予期せぬ、銀時の復活。喜ぶ者あれば、憂う者、また別の感情を思ふ者もいた。

「これは悪い事をしたのう……てっきり死んでいるものと思ったが……」

その様では役に立ちそうもないのう。意地の悪い笑みを浮かべて月詠は言ってやった。

「ほざけアバズレ。そりゃこっちの台詞だ。」

今更ノコノコよく来れたもんだぜ

私怨を辿って地獄から這い出てきたのさ

ご足労痛み入るがねえ……あんまり来んのが遅かったからしゃぶっちゃまったぜ

と、血だらけの煙管を顎でしゃくる。しかし、月詠はそれに鼻を鳴らした。

「何の話だ。そんな汚い煙管、覚えがないわい」

飛んだかと思ったのは一瞬。次見た時には下に下りて鳳仙を見ながら続ける。

「わたちの煙管は、そんな安物ではない。ブランド物『ヴィッチ』……ここでは手に入らぬ上物じゃ」

失くしたのなら買って返せ……地上でな。

「つたく……これだから水商売の女は嫌なんだ。たかりもいいところだぜ」

勝っても負けても……地獄だコリヤ。

「死に損ない共めが！」

うぬ等雑魚が何匹集まろうと、何も変えられぬということが何故分からん

何故死なぬ。何故立ち上がる

何故貴様がその目をしている！！

気に食わん……気に食わん。その目！

傘を掲げて、声高に叫ぶ。

「その目を止めぬかアアア！！」

「行けエエエエエ！！ 晴太アアアアア！！」

「銀さアアアアアん！！ 月詠姉エエエエエ！！ 時雨姉エエエエ！！」

百華の者達に日輪と共に連れて行かれた晴太を見届けてから、鳳仙の両脇の銀時と月詠達が斬りかかった。

二人の攻撃を傘と素手で受け止め、正面が空いた鳳仙に向けて、百華数人が武器を振りかぶる。

しかし、そう易々と切り付けさせてくれるはずもなく、放り投げられた自分達の頭と一緒に吹き飛ぶ。

その一瞬の隙を突いて、柄で鳳仙のあごを殴った銀時。

技こそ綺麗に入ったものの、夜王のチョップで刀が碎けてしまった。

動揺した隙を突かれ、思い蹴りを極められた。

既にボロボロの銀時が、その衝撃に耐え切れずに、障子を突き破る勢いで吹き飛んだ。

「今よ、討って!!」

時雨の合図と共に、降るクナイの雨霞。鳳仙は傘で地面を叩き、土煙を舞わせる。

時雨は、率いた百華三人と共に着地し、土煙を睨んだ。

「やったか!？」

音沙汰のない土煙を見て、誰かがそんな事を呟いた。

しかし、土煙が薄くなった頃に、傘をめい一杯広げた影が見えた。

「まだよ! 全員逃げ……」

最後まで言う暇の与えずに、開いたままの傘が、こちら目掛けて弾丸のように迫り来た。

乾く。どうしようもなく乾く

何度地にひれ伏させても。何度希望を断ち切っても。何度でも立ち上がる

……同じ。この瞳は。この気高い魂は。日輪と同じ

ガシヤアアン!!

「月詠!!」

「うう……っ！」

飛びそうになった意識を何とか繋ぎとめて、ふと、脇の方を見る。

何気なしに目を向けたその先に、ある物を見つけた。

「要らん。この常夜に。このワシに……太陽など要らぬわ!!」

傘を持っている手に力が入るのを見た時雨は、大きく目を見開いた。

「待ちなさい!! その子に手エ出したら……」

「今の貴様に、ワシが殺せるか!？」

思えばまたこれも、八年前と同じ……

晴太を地上へ逃がした日輪の足の筋を切った鳳仙に激昂して切りかかったあの日と。

刺し違えても殺してやると牙を剥いて、月詠を危機に晒しているのも同じ。

でも、と時雨は続ける。

何もかもが八年前と、何もかもが同じである筈がない。

握った小刀にギリギリと力を入れた。

あと少し……あと少し……背後の鳳仙を気にしつつ地面を這う月詠。

あと少し、あと少し。念じ続けてようやく手の届く範囲に行き着いた。

手を伸ばすと同時に、自分の体に、重なる大きな影。

「ふんぬおおおおおおおおおおお！！」

キン……

静かな金属音と共に、鳳仙の傘の切っ先と、時雨の小刀の刃が交差する。

「何度ワシの国で……ワシの邪魔をすれば気が済む……影蜘蛛！」

「もう此処は……貴方の国じゃない……貴方の物なんてなんて、もう此処にはありはしない」

成人男性一人が、両腕で受けても劣勢を強いられる鳳仙の一太刀。

女の細腕……まして片腕で耐え忍べる時間など高が知れている。

現に、小刀で受けているこの腕の骨、己の体重と衝撃を支えている両足の、骨の髄まで泣き叫んでいる。

ついに耐え切れなくなって、膝をガクンと折る。

その瞬間、時雨の中の何かがプツリと切れて、そのまま倒れこんだ。

鳳仙の傘は、時雨を避けるように腕ごと逸れた。

「時雨!!」

「その小刀で攻撃の軌道を変え、辛うじて即死は免れたか……だが、終わりだ」

時雨の、僅か右に逸れた傘をもう一度、振りかざし。風を吹かす。

その時、土煙の中から飛んできた、一本のクナイが鳳仙の腕に刺さった。

その痛みに、顔をしかめながら土煙の方を見る。そして確かに見た、あの生意気な、銀髪の男を！

「貴様ア！！！」

銀時が間合いを詰めて持って来た薙刀を投げるのと、鳳仙が軌道を変えて、銀時の脇腹に傘を当てたのは同時。

銀時がよろけたのを見た鳳仙は第二撃を準備する。

繋ぎ止めろ、魂を

手繰り寄せろ、生を

しがみつけ、縋りつけ

噛みつけ、泣きつけ

どんなになっても……

銀時は折れた刀で立ち向かったが、今度は粉碎される。

どんなになっても、護り抜け

銀時の渾身の一太刀は、鳳仙の右頬を捉えた。

「寝物語は信用するな」(後書き)

12月は、色々な方とコラボさせていただきました。ウチのバカ娘達が色々な人気作家さんの娘さん息子さんに粗相しでかしたお詫びもかねて、ここで大々的に宣伝させて頂きます！

玖月さん家の(若かりし頃の)松光兄様がちっさい時雨さんに希望の光を与えてくれました！

「雨の中の光」

<http://ncode.syosetu.com/n5260z/>

続いて、恋歌が将来の義妹……いや、土方さんの妹さん、土方葵ちゃんにお誕生日プレゼントを渡すべく、冬瀬志保さん家にお邪魔しました！

「姉妹」

<http://ncode.syosetu.com/n5968z/>

二人とも、とても素敵なお話をありがとうございます！
お陰で幸せすぎて死にそうな梨栖さんなのだ。(͡° ͜ʖ ͡°)ドキム
ネ

～夜明け～

「日輪様、もうしばしの辛抱です。お気をしっかり！」

日輪を担ぎながら言う、百華の一人。

その声の前を、先導役の百華の者と一緒に走り抜ける晴太。

このまま一気に突き抜けようとしたとき、目の前に、女達が立ち塞がった。

「いたぞ！ 反逆者共だ！！」

戦いが始まるのに、時間など要らなかった。

キーン！ キーン！！ そこかしこで聞こえる鏝迫り合いの音。

お互いの実力が五分五分なだけに、混戦、長期戦は必至である。

「鳳仙の方に人員を割きすぎたか……まさかまだ鳳仙に与する者がこれだけ残っていようとは！！」

晴太達親子と共に外へ出ようとした百華達は、皆鳳仙派の者達を迎撃している。

手が空いているのは階段の影に座らされた己と、息子のみ。

しかし先程のように晴太が自分を背負っても、敵にとっては格好の餌食。

日輪はゆっくりと瞼を閉じてから言った。

「こりゃ逃げ切れるもんじゃないね。晴太、アンタだけでも行ってくれ」

「母ちゃん!!」

また、自分を犠牲に逃がそうというのか。という意味を込めた「母ちゃん」が返ってくる。

日輪は、笑いながらかぶりを振った。

「安心しな。お前だけ逃げろだなんてもう言わない……戦おう。一緒に皆と」

それから、日輪はこれからの事を晴太に話した。

自分がここにいれば敵を引き付けられる。その間に管制室に向かえと。

いくら銀時に月詠や百華がいて、それらが束になってもあの鳳仙を倒す事は難しい。

あの子もいたようだが、あそこに行き着くまでに深手を負ったらしい。

銀時達のサポートに徹していたあたり、鳳仙を仕留めるだけの力など残っていないだろう。

でも決して歯が立たないわけではない。

「夜王が何故この地下深くに、吉原を築いたか分かるかい？」

そう。ここは誰のための桃源郷でもない。

あの男が、陽の光から逃げるために作った、あの男のためだけの桃源郷。

鳳仙は何よりも太陽を憎み、畏れている。

そうでなくても陽を嫌う夜兎。

それも、何年も陽を浴びていない夜兎が太陽の下に晒されればどうなるか。

この吉原に築かれた地下は、元は幕府の艦船を製造していた造船所なのだ。

仰いでも見えやしないが、船を出し入れするハッチが天井に存在

する。

「管制室へ行くんだ。そこへ行けば、この鉛色の空をこじ開けられる」

一通り話を聞いた晴太だったが、その足を進めようとしな

「その為に母ちゃんを囚にしろってのか。そんなの……」

「逃げた先に自由なんてありゃしない」

晴太の台詞を遮るように、日輪は低いトーンで言い放った。

「戦わなきゃ……」

檻の中で戦わなきゃ、檻を蹴破らなきゃ。本当の自由なんて手に入りゃしない。

「最後まで戦わせとくれ。晴太」

そこまで聞いた晴太は、ようやく母に背を向けて、ぼそりと呟く。

「今度会う時は……鉄格子なんてないんだから……思いっきり、甘えさせてくれよな」

苦渋の決断をした晴太の前方から、足音が聞こえた。

足音は晴太の数歩手前で止まり、止まったと同時に声が聞こえる。

「オイ！ 準備は出来たか……マザコン野郎」

顔を上げれば、新八と神楽が、怪我を追いながらもしゃんと立っていた。

「さあ、行こうか」

吉原に太陽を取り戻しに

「行っけエエエエエエエエ!!」

月詠の願いが届いたのか。遂に鳳仙の頬を銀時の木刀が捉えた。

しかし、そのまま倒れてくれる相手ではない。辛うじて踏みとどまり、反撃の拳を固める。

銀時はそれが振りかざされる前に、もう一太刀浴びせた。

反撃する暇を与えるな。息さえさせるな

もうチャンスは二度と無え。これで決めなきゃ負ける

終わりにするんだ！

「おおおおおおおおおおおー！！」

掛け声に、構えた木刀に、それら全てを込め、最後の一撃にかか
る。

切っ先が、もう動く気力も無くした鳳仙の鳩尾に刺さるように当
たった。

そこから鳳仙は、カートのように押されていく。

後ろに銅像を支える為の壁……障害物があつた事をしばらく経っ
てから思い出した。

「これで……仕舞えだあああ!!」

もっとも、思い出したからといって避けられるはずもないが……

その頃、管制室に行き着いた晴太は、目の前にズラリと並ぶボタ
ンに圧倒されていた。

何処を押せばいいのかも分からない。加えて

「晴太君!!」

「早く!!」

追っ手と応戦してくれている新八と神楽が踏ん張っている内にや
ってしまわないといけない。

晴太は余計に焦った。

オロオロしてボタンの列を眺めている内に、一つ大きなボタンが
目に入った。

これだ！ 直感して、押してみたら、真っ暗だった液晶がにわか
に光りだす。

よく分からない文字の羅列が、次から次へと雪崩のように浮き上
がる。

最後に大きく『開錠』と書かれたウィンドウが現れて、ボタンの
群れの隣に、レバーが現れた。

すぐにレバーを引っ張るが、長年使われていないせいなのか、子

やった。銀時がそう思ったのは束の間、壁に押しやった鳳仙とバチリと目が合う。

しまったと思うより先に、鳳仙の左の掌が風を纏って迫り来る。

もはや銀時に反応して避けるだけの力もない。

捉えた。鳳仙はもちろん、彼と同じ状況に置かれた者なら誰でもそう思うだろう。

しかし、銀時の鼻に触れる寸での所で、鳳仙の掌に、クナイが刺さる。

そう。彼はその時まで、百華達の事など、頭になかったのだ。

「打てエエエエエエ!!」

その言葉を合図に、百華達は、クナイを思い切り投げ付けてくる。

傘もない。暴風雨のような量のクナイ相手では、流石に防御も間に合わない。

隙を見て跳躍して避けた銀時が着地した時には、土煙で鳳仙の姿が見えなくなっていた。

誰もが息を切らせながら、眺めた。もう起きてくるなど。

見守っていても、土煙から鳳仙は出てきやしない。

女たちは、確信した。

「やった……遂に……やった!!」

「鳳仙を……あの夜王を遂に倒した!!」

誰かがそんな事を呟くと同時に、女達の歓喜の声が一斉に挙がった。

自由だ!!　これで吉原は……私達の、自由だ!!

そんな雰囲気の中から、百華が二人、時雨が横たわる瓦礫の方へ走って来た。

「時雨さん！　ホラ、あたし達もう自由ですよ！！」

嬉しそうに声を掛けながら、体を抱き起こす彼女に、ええと微笑み返した。

「良かった……貴女達のそんな嬉しそうな顔。初め……」

言い掛けて止めた。何か気配を感じたからだ。気配を視線で追えば……時雨は目を見開いた。

「まだだ！！」

時雨が声を張り上げる前に、銀時の声が響く。

その直後、三本のクナイが、月詠目掛けて飛んで来るのが見えた。

彼女も倒したものだと思い込んでいたのだろう。突然の出来事に対処出来ていない。

「月詠!!」

本当はすぐにでも飛び出して、彼女の盾になりたい。

何で言う事を利かないのよ!! この足!!

程なくして、刃物が肉に刺さる、痛々しい音が三回聞こえた。

しかし、鳳仙の不意打ちに膝を突いたのは、銀時だった。

不意打ちに対処しきれなかった彼女を押し退けて、身代わりになったのは、銀時だった。

「ぎっ……銀時っ!!」

自分を庇ったせいで、追い討ちを食らった銀時に、月詠は慌てて駆け寄った。

土煙を掃うように、低い笑い声と、動く人影が現れる。

「ぬるい……ぬるいわ!!」

貴様等如きか細き陽がいくら集まろうと、この夜王を干乾びさす事は出来ません。

この深き夜を照らすことなど……

「出来はせぬわ!!」

雄たけびと共に、刺さったクナイを全て弾き飛ばした。

「バカな……あれだけやっても……まだ……」

「太陽などとは程遠い、吹けば一瞬で消える蠟燭の陽のような脆弱な光……それが貴様らだ!!」

大人しく死んだような目で我が鎖に繋がれておれば生かしてやつたものを……

まさか、一度は我等に消された残り火から、飛び火を貰おうとは……

「火種は消さねばなるまい……その、鈍く光る光を!!」

武器を構え、応戦の意志を表した月詠達の前に、銀時は腕を上げた。

「……もういい。もう俺だけで十分だ。その陽はとつときな……明日の煙草のためにな」

「『武士道』とやらか」

嘲笑いの表情を崩さぬまま、鳳仙は吐き捨てるように言った。

「殊勝な事だな。己一人の命を捧げて女達の免罪を乞おうと言うのか？」

「消させやしねえさ。もう、誰も」

銀時の言葉に、鳳仙は遂に笑顔を消した。

たとえか細い蠟燭の火でも集まれや闇も照らせる

たとえ陽が消されても、一本でも火が残っていればまた火を灯せる

「お前には……俺の火は消せねえよ」

何度吹き消そうとも無駄な話だ。俺にはとっておきの火種があるんだ

絶対に消えねえ、火種がついてんだ

奴等がいる限り……俺ア何度消されても、何度でも燃え上がる

その時。銀時の背後の、壊れた障子から、光が漏れる。

何だ？

吉原に住まい、その暮らしに慣れたものにとっては、そう言うしかない。

いつも見上げていた、あの鉛色の空。

少なくとも、真つ二つに分かれて退いていき、そこから眩しい光が漏れるなど、想像だにしていなかったのだ。

その場にいる人間たちは、ただ呆然と、あの眩い光を眺める事しか出来なかった。

達の光は消せやしねえ」

「お前なんぞに、俺

〜夜明け〜（後書き）

以上が新年一発目の「うつくも」でした！

皆様、新年明けましておめでとうございます。

処女作から併せると執筆してから二年が過ぎました。早いものですね^^

ここで二年書かせて貰えたお陰で、貴方という素敵な方に出会えることが出来ました。ありがとうございます。

二年たっても相変わらず、原作者様、運営様に怒られかねないハナクソ小説しか掛けないハナクソ野郎ですが、今年度も宜しくお願いします。

ゝ人の絆は十人十色ゝ（前書き）

いよいよ完全決着!!

いや、これまで憎しみをもって書いてきた鳳仙さんが急にいい人じやね? って思えてきた不思議（・ω・）

ゝ人の絆は十人十色ゝ

はけて行く鉛色のハッチから現れた、正真正銘の空。

「お前なんぞに、俺達の陽は消せやしねえ」

お前なんぞに、この光は……消せやしねえ

「これは……この光は……まさか!」

その眩さに、身をすくめる夜王の上に広がるのは

正真正銘。私達が普段仰ぎ見る、太陽と青い空。

レバーを下げた晴太は、追っ手の足止めをしていた新八と神楽は声を重ねて言った。

「「行っけエエエエエエエエエエ！」「」

銀さん！！

「「夜王の鎖を……掻っ切れエエエエエエエエ！」「」

最後の一太刀は、今度こそ。夜の王を陽の元に晒すことを成功させた。

シャボン玉のように屋根高く飛ぶ鳳仙の頭の中に、一人の女の子の声が響く。

ねえねえおじちゃん。何でこんなに晴れているのに、傘なんて差すの？

きよとんとした、あどけない顔で聞く少女を、鳳仙は無表情で眺めていた。

すぐに子供の親らしき男がその子の頭を殴りつけ、媚びるように詫びていた。

吉原に住まわせ、親と引き離せばと思ったが、それでも女の子は依然として聞いてくる。

ねえねえおじちゃん。

「おじちゃんは どうしてこんな土の中に住んでるの？」

そんなにお日様が嫌いな の？ それとも、おじちゃんがお日様に嫌われてるの？

答えずに、女の子を見つめていると、今度は姉貴分と思しき遊女が自分に託びて彼女を連れて行く。

また、何を思ったかは覚えていないが、折檻部屋に足を運んだ時もそうだった。

「随分と精が出るな」

声を掛けた者は、自分を確認すると慌てふためいて、鳳仙様と呼ぶ。

そ奴がすぐさま何か隠したのを、鳳仙は見逃さなかった。

「またお前か……今度は何をやらかした」

聞いてみると、そ奴は曖昧な返答をし、隠した手により一層力を込めた。

手に持っているものを見せるよう命じ、半ば強引に引っ手繰って拝見する。

そこには、何てことはない。画用紙に、真っ赤なクレヨンで太陽が描かれていたのだ。

何より太陽を嫌う自分にこんなものを見せたなら……先の事を恐れて折檻していたのだらうとすぐに察した。

「おじちゃん……今はそれで我慢してね」

布団に包まれ、吊るされていた女の子が、鼻血を付けた顔で微笑む。

「でもいつかきつと……私が、お日様と仲直りさせてあげるからね」

体が乾きゆく中、止め処となくその女の子の事が頭に浮かんでくる。

中でも、画用紙を破って、末は太夫も夢ではないと踵を返したときに言われた一言だった。

『おじちゃん。お日様は、どんな人の上にも、おんなじに輝くんだよ』

皆に、光を当ててくれるんだよ。

おじちゃんにもきつと……きつと、おじちゃんの冷たくなった心を暖めてくれる。

だからおじちゃん。

お日様を、嫌いにならないでね。

「我が、天敵よ……」

久しぶりに会っても、何も変わらぬな。遥か高みからこの夜王を
見下ろしておって……

全く、何とも忌々しい……唇を吊り上げながら太陽を仰ぐ。

「だが……何と美しい姿よ」

その時、誰かの足の裏が、屋根の瓦を叩く音がした。

「人とは哀れなものだねえ……己にないものほど欲しくなる。届かぬものにほど手を伸ばす」

先程まで、楽しそうに戦いを眺めていた神威が、傘を差して鳳仙の元まで近付く。

「夜王にないもの……それは光」

それまで、例の仮面のような笑みで語っていたのを、急に鋭い目つきで話し出す。

「旦那。貴方は太陽のせいで乾いていたんじゃない。貴方は、太陽がないことに乾いていたんだ」

誰よりも疎み、憎みながらも。誰よりも羨み、焦がれていたんだ。

冷たい戦場より、温かい光を。決して消えない、その目の光に。

「故にその光を奪った女達を、己のいる夜……この常夜の国に引きずり込んだ」

そして、それでも尚消えぬ日輪ひかりを……憎み、愛したんだ。

そこまでのたまった神威に、鳳仙は、あの人を小馬鹿にした笑い
声を出す。

「愛？ 一体そんな言葉、どこで覚えてきた、神威」

そんなもの、持ち得ぬのは貴様が一番良く知っている筈だと、あ
ざけ笑った。

ワシと貴様は同じ。戦う術しか知らぬ。

欲しいものは全て戦って力づくで奪う。気に入らぬ者も全て戦っ
て、力づくでねじ伏せる。

愛も憎しみも、戦う事でしか表現する術を知らぬ。

「神威。お前もいずれ知ろう。年老い、己が来た道を振り返った時……」

我等の道には何もない。本当に欲しいものを前にしても、それを抱き締める腕もない。

ただ爪を突き立てるだけ。その爪は、引き寄せれば引き寄せるほど深く食い込む。

手を伸ばせば伸ばすほど、遠く離れていく。

腕を太陽に伸ばし、掌を差し出す。乾いた皮膚が氷の破片のように散って行く。

しかし太陽は、そんなもの関係ないと言わんばかりに、鳳仙を強く照らす。

「何故……お前さえもワシを嫌う……何故……お前さえもワシを拒む」

何故……こんなに焦がれているのに……

ワシは……乾いてゆく

眩しい太陽に目が眩んだのか。もはや身がもたなくなったのか。
あるいは両方か。

次に鳳仙の目に飛び込んだその世界に、もう太陽の光はない。

太陽の光はおろか、ランプの光も、蠟燭の光すらない。本当の真っ暗闇。

立ち尽くして、闇を眺めたが、フツと笑って、闇の奥を進み始めた。

死して尚、夜に行くが夜王の定めか

その定めを、受け入れるかのように、振り返ることなく進んでいた鳳仙。

しかし、背後から、闇が晴れていくのを感じて、振り返った。

視界に捉えたそれは……

太陽に、優しく包まれて目を覚ました鳳仙の目に飛び込んだのは太陽。

しかし、先程のような遠くで夜王を見下ろす太陽ではない。

極近くで、光のない凍りついた目に浴びせてくれる、優しい太陽。

「日輪……」

名を呼ぶと、太陽は柔らかい笑みを浮かべた。

くお爺ちゃんは労わるべきく（前書き）

おじちゃん。お日様は、どんな人の上にも、おんなじに輝くんだよ

皆に、光を当ててくれるんだよ

おじちゃんにもきっと……きっと、おじちゃんの冷たくなった心を暖めてくれる

だからおじちゃん

お日様を、嫌いにならないでね

「お爺ちゃんは労わるべき」

「やっと……見せてあげられた」

鳳仙の頭を膝に乗せてやって、日輪はそう言った。

「ずっと、見せてあげたかった……この空を、貴方に」

言ったでしょ？　きっとお日様と、仲直りさせてあげるって。

それまで、寝物語を聞く子供のように日輪の言葉に耳を傾けた鳳仙が目を見開いた。

どうしてそれを知っている？　そう言いたげな顔を彼女に向ける。

「私、知ってたのずっと……」

どんなに威張り腐ったって、どんなに酷い事したって

貴方が夜王なんて大層なものじゃないって事くらい

「貴方はただ、こうしたかったのよね」

こうして日向で居眠りしたかっただけの普通のお爺ちゃんなのよね

ただそれだけなのに、なのに……

こんな馬鹿げた街まで作って。皆を敵に回して

「馬鹿な人……本当に……馬鹿な人……」

太陽の涙を頬に浴びた鳳仙は、ふわりと笑ってから、永い居眠りを始めた。

パチ、パチ、パチ、パチ

「よっ、お見事！ 実に鮮やかなお手前」

暖かい雰囲気、青年の拍手により一瞬で凍り付いて剥がれる。

拍手を止めた神威の手は、傘の取っ手を掴みなおす。

「……とは言い難いナリだが、いやはや恐れ入ったよ」

小さき陽が集い集って、遂に夜王の鎖を焼き切り、吉原を照らす太陽にまでなったか。

「まさか本当にあの夜王を倒しちゃうなんて……遠くまで来た甲斐があったなあ」

久しぶりに面白いものを見せて貰ったよ。

皆一様に、彼の放つ不気味な気配を感じながら話を聞いていた。

「だけどころな事したって吉原は何も変わらないと思うよ？ 吉原に降り掛かる闇は夜王だけじゃない」

俺達春雨に、幕府中央暗部。闇は限りなく濃い。また第二第三の夜王がすぐに生まれることだろう

……その闇を、全て払えると思っているのかい？

本当に吉原を変えられると思っているのかい？

神威は機械のように淡々と、それでいて事態の恐ろしさが嫌ほど伝わるように話す。

しかし銀時は、バツサリと答えた。

「変わるさ」

人が変われば街も変わる。

これからお天等さんも機嫌を損ねて、雲から面出さなくあるだろうが

こいつらの光は、もう消えねえよ

「そうかい」

笑顔を崩すことなく答えに反応する。

「じゃあ早速、この第二の夜王と開戦と……」

神威は言葉を遮るように、屋根瓦に風穴が開く。

難なく避けた神威。屋根に穴を開けた主が、いきり立って現れた

「神威イイイイ！！ お前の相手は私アルウウウ！！」

出て来たのは、てっきり死んだものだと思っていた妹だった。

もっとも、あの銀髪男が生きている時点で、薄々感づいてはいたが……

「その捻じ曲がった根性、私が叩きなおして……!!」

「ダメだよ神楽ちゃん！ その体じゃ無理だ!!」

少年が止めているため、第二撃はないと踏んだ神威は銀時に向き直る。

「出来の悪い妹だけど宜しく頼むよ。せいぜい強くしてやって」

あと、と神威は付け足す。

「君ももっと修行してヨ」

それだけ言って、去り行く神威に、銀時は声を掛ける。

「……好物のおかずはとっというて、最後に食べるタイプなんだ」

言い残して、神威は屋根から飛び降りた。

その頃、影蜘蛛が暴れた形跡のあるあの部屋に、一人取り残された少女が太陽を眺めていた。

「あらまあ。やられちゃったか……あのジジイ」

上の方から落ちてきた、自分の上司を見て、もっとも。と望朔は付け加えた。

「やられんのはあたしも一緒かな」

「どうしたの？ 随分と派手にやり合ったようだけど」

蜘蛛の巣のように張り巡らされたピアノ線。地面に大きく開いた穴。

「別に。また本気で勝負したいかなって思っただけ……悪かったよ」

ツカツカと歩み寄る神威。望朔は黙って座り込んだ。

「……何してんの。阿伏兔拾って帰らないと」

予想とは大幅に違って、手招きをする神威。

「はいい？」

「俺も同じだよ。先が楽しみで二人ほど殺せなかった奴がいる」

ふうん。と興味なさ気な生返事を返した望朔は、傘を広げて言った。

「ま、いずれにせよ。今回の事、上は黙っちゃいないだろうね」

文句を言うだけなら可愛いものだが、何せ有象無象の兵が集う海賊の上層部だ。

自分達に刃向かった街、人、そこに派遣した船員^{クルー}。

それら全てを見せしめとして灰にする事でしか威厳を保つ方法を

知らない連中。

神威の言う『獲物』も何をされるか分かったものではない。

「俺は世渡りが苦手なんだ。お前達に死なれちゃ困る」

その言葉には、お前と阿伏兔で上を説得し、吉原に被害が及ばぬ手を考えろという意味が含まれていた。

「ふふっ、あたしは面白きゃ何でもいーけどさ」

副団長が五月蠅いよ？
大丈夫。阿伏兔は何だかんだでやってくれるから

『神威。お前もいずれ知ろう。年老い、己が来た道を振り返った時……我等の道には何も無い』

旦那。俺はそれで結構だ。欲しいものなど無い。振り返るものなど無い

前しか見えない。

眼前に広がる新たな戦場……それこそが俺の求めしもの

誰よりも強くなるため行く。何よりも強くなるため進む

例えそこに、護るものなど何

も無くとも

くお爺ちゃんは労わるべきく（後書き）

今回。阿伏さんの登場を期待した読者の皆様。大変申し訳ございません。

いや、でも……遠回しに望朔ちゃんの無事を報告したかったんです
他意はございません！だから許して！

〈昼間に飲む酒は一味違う〉（前書き）

吉原炎上篇リメイク、完結。

諸事情により、後書きではコメントできませんので、前書きの方で先に言っておきます^^;

（・ー・）えー……（p）ゴホン！

読者様。この瞬間までに、長い時間を費やしてしまい、大変申し訳ございません。

辛い時も苦しい時もありましたが、皆様のお陰で、この瞬間を迎える事が出来ました。

最後まで書かせてくださって、ほんとうにありがとうございました！

「昼間に飲む酒は一味違う」

吉原に日が昇って数日後、茶屋にいた銀時達は、その後の吉原の事を日輪から耳にしていた。

鳳仙は、神楽の兄の神威が、鳳仙を見限って殺したことにしたらしい。

春雨にとって鳳仙は、強大な力を持った邪魔者。

気を良くした春雨は、神威に吉原の全権を任せたと話す話だ。

その話に一瞬、顔を暗くした一行だったが、現段階では何もされていないと聞き安堵した。

結果オーライだと喜んだ新八が、神楽に殴られて

「その気になれば奴等いつだってこの街どうにか出来るってことアルよ!!」

と、苛立った様子だったが、新八がそんな彼女を落ち着かせるために話題を変えた。

「そういえば時雨さん、これからどうするんですか？」

「私？」

まさかこのタイミングで自分に話題がふられると思わず、自身を指差した。

「だってホラ、時雨さんって吉原から万事屋に来たんですから……
えと……」

どもりだした、新八の言いたい事は大体分かった。

最初の時雨にとっての万事屋は、鳳仙から身を隠すための止まり
木に過ぎなかった。

そして、鳳仙がいなくなった。

彼女にとってそれは、嫌々万事屋にいる理由と、吉原から逃げる
理由を同時に失う事を意味する。

「それはその子が決めればいい」

まだ紡ぐ言葉を探す新八に、ぴしゃりと言ったのは日輪。時雨は
目を見開いた。

「日輪様……」

「アンタの人生なんだ。どうしたいかはアンタが決めればいい。そうでしょ？」

と、目配せをして銀時に同意を求める。求められた銀時は、おー。と生返事をした。

「お気遣い、有難く頂戴致します」

背中を丸めて日輪に言う。どうにもこの女性には頭が上がらない。

高圧的な時雨しか知らない銀時は、その姿を見てにまりと笑った。

すぐに気付いた時雨が、銀時をジロリと睨みつける。

「……何よ」

「いや、お前に敬語が使えると思わなくてよ」

「ああ、自分が使えないから羨ましいのね」

「誰が無礼モンだ!! お前俺の敬語スキル見た事あんのかよ! 言っとくけど……」

大人たちが繰り広げる、大人気ない口論。

と言っても、熱くなっているのは男だけで、女は依然とクールに喧嘩言葉を捌く。

時雨の味方という形で神楽が参戦し、それを新八が止めに入る。

時雨が来てからの、万事屋の日常だ。

「変わったね。時雨」

「ああ」

日輪と月詠は、その光景を目を細めて眺めていた。

目の前の時雨と、八年前の今にも死にたそうな顔をした女を思い浮かべる。

重ねようとしても重ならない面影に、日輪は改めて思う。

本当に変わったね。それとも……

「この人達が変えちゃったのかしらね」

項垂れた銀時に踵を返し、月詠の手を引っ張って茶屋を出た時雨の耳には届かなかった。

一番日の当たる崖。少し盛り上がった土の上に鳳仙の傘が刺さっている。

せめて黄泉では、たくさん太陽を浴びせてやろうという遊女達の総意でたてられた墓。

踏み散らしてやりたいのを堪えて見下ろす。右手に握っていた雑草の花を投げ捨てるように飾った。

「……ごめんなさいね。急に引っ張ったりして」

時雨が振り返った先にいた月詠はもう慣れたと言う様に煙管をふかした。

「まさか吉原で太陽が拝めるとは思ってもみなかった」

煙と一緒に台詞を吐いて空を仰ぐ。

「私も久しぶりに見た時は感動しちゃったわ」

「ぬしからそのような言葉が出るとはなあ」

「あら失礼な。私だって綺麗なものを見たら感動くらいするわよ」

時雨の台詞が可笑しかったのか、クスクスと笑う月詠。

それにつられる形で時雨も笑い返す。そして青空を仰いで、独り言のように言う。

「……もつと早く見せてあげたかった」

低い声で呟く時雨をよそに、月詠は煙管の火皿をひっくり返して燃えかすとなった刻み煙草を土に還す。

「……ぬし、これからどうする気じゃ？ 少し迷いはあるだろうが、もう決めておるんじゃないだろう？」

「あら、バレた？」

「何年ぬしの隣におったと思うておる」

敵わないわね。と言いたげに肩をすくめて笑ってみせた。それから無表情に戻る。

「言いたい事がある……って言ったわよね？」

『……貴女に言いたい事が、一つだけあるの。陽の下で待ってるわ』

あの遊郭に入り、月詠に百華達を預ける際に捨てて行った台詞を
思い出す。

吉原を出て行って、いつか鳳仙を倒して。

こうして吉原で太陽を見上げられるようになったら、ずっと言い
たかったの。

「……ただいま」

新しい刻み煙草を詰めて、火を点ける。吐いた煙が風になびいて、溶けるように消えた。

二人で茶屋に戻った頃、二人。途中で何度か人とぶつかった。

ただいま。というと、気の抜けたおかえり。嬉しそうなおかえり。様々なおかえりが帰って来た。

銀時は、遊女達を見て、しかし……と難儀そうな目で見る。

「さっさとこんな面倒な街見捨てて、地上で生活すればいいだろう
にな」

「ここには物心つく前から吉原に来た子が多くてね」

地上に生きていくにも、どうやって生きていけばいいか分からない
い者。

自由の意味さえ知らない者も大勢いる。

そんな遊女達を捨て置けないと、日輪が残ったのだ。

私達で新しい吉原を作っていこう。

私達の子供に見せても恥ずかしくない、立派な街を作ろうと。

その話を聞いて、新八は街を見渡す。そして、第一感想を率直に述べた。

「……どの辺が変わったんですか？」

「よく御覧なさいな新八君。遊郭がなくなって、【自主規制】とか【自主規制】が増えてるじゃない」

「あとキャバクラ、【自主規制】、【自主規制】、【自主規制】なども人気だなア」

「全然変わってねえじゃねえか！！ 全然子供に恥ずかしいだろうが！！」

早々に生まれたボケを、早々にツツコむ新八を、銀時はまあまあと宥めた。

「今までは強制されてたのが問題だったわけで。今は選択の自由があるわけでしょう？」

着物だけでなく、ナースにミニスカポリス……色々。

「本物のむさいポリス呼ばれなくなければもう黙っていなさい」

膨らみかけた銀時の妄想を叩き割った時雨は、フォローを入れるように話を続ける。

「まあ、鎖は解けたわけだしいいじゃない？　もう呪縛は解き放たれたんだから」

と、S【自主規制】真っ最中の男女を目の前に言う。

「思いっきり鎖につながれてる人いるよ!?!? 自分から呪縛されてる人がいるよ!?!?」

相変わらずの、（別の意味での）大人ぶりに新八は一つ疑問が残った。

晴太。また八歳のいたいけな少年は、こんな街で暮らしていけるのか。

月詠に訊くと、それなら問題ないと答えた。

「日輪と共に寝泊りし、あそこのおもちゃ屋でバイトしておる」

と、月詠が指差す方には想像通りの世界が広がっていた。

お約束として「ただのモザイク屋じゃねーかアアア!!」とツツコんでおく。

新八のツツコみの声に気が付いたのか、晴太がとんでもないものを持ってこちらへ来る。

「銀さーん！ 皆ー！ 久しぶりー!!！」

「オメーはそんなモン持ってこっちに来るんじゃねエエ!!！」

そんな新八の言葉には耳をかすことなく、こちらへ来る。

その最中に、晴太と刺青を入れた男の間に、衝突事故が発生した。

「どうだい？ 私達の街は」

それを眺めていた銀時達に、日輪が言った。

「……どっかの町とそっくりアル」

「そうだな。俺達の街と何にも変わらねえ」

下品で。凶暴で。優しくて。冷たくて。笑顔も。涙も。お天道様もある。

「ただの普通の町だ」

吉原の太陽は、ニッコリ笑って酌をしながら言う。

「素敵でしょ？」

酌をされた男は、猪口に注がれた酒を飲み干して、空を仰ぎ見て言った。

「うめえ」

f
i
n.

く昼間に飲む酒は一味違うく（後書き）

Epilogue

夕暮れ前に、銀時達が帰ってしまい、日輪と月詠がそこにいた。

日輪は月詠に笑いかけ、口を開く。

「……何の話をしていたの？ 時雨と」

「これからどうするつもりかと訊いておったんじゃ」

「素直じゃないからね。あの人達にも、女達にも面と向かっては言えなかったんでしょうけど」

せめて私には直接言っただけだった。

と、ブツブツ言いながら夕飯の奥の間に消えてゆく日輪を見届けながら、時雨の言葉を思い出した。

「……ただいま」

時雨はそう言った後、少し間を明けてからこう言ったのだ。

「ホントはそう言うつもりだったけれど、予定が狂っちゃったわ」

そう言ってみせた時雨の笑顔は、月詠の初めて見る顔だった。

e
n
d

（夢見ながら小説書いたらエライことになる）（前書き）

※最近気付いた事※

皆さん、驚いて聞いてください。何と前回までの吉原炎上篇リメイク……

・最終話が丁度三十部目。
・「吉原炎上篇リメイク・序章」から「昼間に飲む酒は一味違う」までにかかった部数20。

数字的には非常にキリのよい終わり方でした！
しかし、話のクオリティ的には非常に残念でしたね！仕方ない、だって梨栖さんだもの

さて、本日からはいつも通りのギャグパートに……はうっ！？

作者は何者かに後頭部を殴られ気絶した。

気絶させた人間達は、気絶した作者を抱えて、ダンボールに入れて持ち運んだ。

く夢見ながら小説書いたらエライことになるく

「ん……」

目を覚まして、真っ先に視界に入ったのは、フローリングの床。

また執筆中に寝てしまったのかな。と呑気に体を起して伸びをした。
た。

伸びをして改めて周りを見た瞬間、作者……梨栖は固まった。

目の前に広がる景色に、梨栖の知る自宅の家具は何一つ無かった。

ローテーブルも、デスクの上に置いてあるノートパソコンもない。

だが、妙に見覚えはあったのも事実だ。

起き上がった目の前にあるテーブル。それを挟むように並べたソファ。

その奥にドンと構える事務机のうえの黒電話。丁度上に飾られてある「糖分」の額縁。

ますます不思議な感覚に囚われながら、記憶を遡らせる。

確かに私はこの部屋を見た事がある。しかもほぼ毎日。

しかし梨栖の自宅にこんな部屋はない。こんな部屋を持っている友人もない。

しばらく額縁をぼうつと眺めていた梨栖だったが、ワンツと声が聞こえて、振り返った。

振り返った先にいたのは、白くて大きな犬。飼ってはしないが、

梨栖はその犬を知っていた。

「え？ 定春……？」

その犬を呼んだのが最後、梨栖は頭から定春に齧り付かれる。

「あだだだだだだっ！！ちよっ待っ……いだいだいだいあああ
ああああ！！」

などと、叫びながらもがいていると、襖が開いて、しばらくしてから閉まる音がした。

勘だが、三、四人くらいはいる筈だ。

「やっと来やがったかこの腐れ作者^{ポケ}」

「え!?!? あ、その声! 杉……銀さん!?!? 銀さんじゃない?」

「オイ今なんて言いかけた!! 新年早々やらかそうとすんじゃねえよ!?!」

「定春。そんなモン食べたらばっちいアル。ほら、ペツ!」

少女の声で、ようやく梨栖の頭から口を離した定春。

涎まみれの顔面や頭部を拭きながら、面々を見て確信した。

此処、銀魂の世界!?!? いや……より正確に言うならば

「ちょっと、なあにあの作者^{きたないの}。早く捨ててきて頂戴」

汚いものを見るような目をした時雨が言う。

そう、梨栖はこの「美しき蜘蛛に睨まれて」略して「うつくも」の世界に引きずり込まれたのだ。

「つまり……アレか……私……遂に……」

「まあ、急にパニックになって帰りたくなるのは分かるんですけど。とりあえずおちつ……」

「夢の国^{にじげん}に来ることに成功したのかアアアアア！！ ヒヤッホー！！」

何かを説明しようとした新八の声を遮るように歓喜の声を挙げた。

ヘルプミー！　とでも叫ぶものかと思っていた一行は不意打ちを食らってしまった。

「此処で銀さんに求婚、屯所行って土方さんに求婚、吉原行ってツッキーに求婚。そして彼等と所帯を持って幸せになるという夢をかなえられる日がついに……ブボボッ」

ありもしない未来を想像して、鼻血を出した梨栖に万事屋四人は待ったをかけた。

「落ち着けエエエエ！！　早まった妄想すんなアアアアア！！」

「俺は結野アナ以外に興味ねえんだよブチ殺すぞ作者^{カス}！！」

「お前何言ってるアルか！！　恋チャンに言いつけてミンチにしてもらうアルよ！！」

「もしもし月詠？　もし作者^{ヘンタイ}がそっちへ行ったら百華総出で始末し

て……」

「オiiiiiiiiiii！！ 冗談だってば！ だから殺さないでお願い！！」

あくまでも冷静な処置を取ろうとする彼等に、梨栖は声を張り上げた。

「で、何で私がここに？ ああ、小説に作者が出て来ちゃいけないって決まりご存知？」

「知ってますか、^{ばか}梨栖。最近『ドリーム小説』なんてものがあるらしいですよ」

「誰がバカだ眼鏡コラ。出番無すぎ眼鏡コラ」

「何で僕に対しては毒舌！？ 何で僕にだけ最高の脅し文句言ってくるの！？」

茶を啜りながら、繰り広げられた言い争いを、残りの三人は呆れ顔で言う。

「で、ぱっつあん。そのドリーム小説って何よ？」

「小説に、その作者が登場人物として現れる小説の事です。最近出て来たジャンルですね」

その説明に、へえー。と頷いた銀時達だが、やがて時雨が思い出したように言った。

「ああ。じゃあ折角^{マダオ}作者がここにいるんだし、アレやりましょう」

「おお！ いいアルな！」

「え？ アレ？」

疑問に首をかしげる梨栖をよそに、銀時と神楽が大きく息を吸い始めた。

「だいいっかい！！」

「チキチキ☆ドリーム小説書くに当たって作者にあれやこれや聞いて来いやドンドンパフパフー!!」

パパン!! 新はちと時雨が紐を引いたクラッカーの音にビツクリしながら、梨栖は思い出した。

「ああ! 企画だから私がこの世界にいるんだ!!」

「」「イヤ今更かい!!」「」

「いやだって、今まで吉原炎上篇に必死で……」

などという言い訳に耳を貸すはずもなく、銀時は最初のお便りに手を出す。

ハンドルネーム

「HN灘さんからの質問だ。えー、『オリキャラの方々は周りの方々のことをどう思っていますか?』」

「ほほーう。中々いい質問ですねえ。じゃあ、カモン、オリキャラーズ!!!」

「いや。急に作者みたいな顔しないでくんない? ウザイから」

銀時の中傷の言葉の直後に、居間の襖が開け放たれた。

李麻、芽衣子、が現れて梨栖の隣に座っていた時雨の隣に座る。

同時に、テーブルに置いてあったファックスが唸り声を出して紙を吐き出した。

梨栖はそれを取り出し、オリキャラ達に見せる。四人は顔を見合わせて、せーので言う。

「「「家族と同じくらい大事に思っています!!」」「」」

梨栖は言いながら『家族と同じくらい大切です 恋歌』と書かれた紙を銀時達に見せた。

「いやその一言のための準備が大掛かり過ぎんだろオオオオオオオ
!!」

「しかもオリキャラクターとか言ってた割に人数少なぞ!!」

「はいはい。男達はほつといて次いくアルよー」

ツッコみに回った銀時と新八の声をBGMに、神楽は次のお便りを手に取り、読み上げた。

「HN美緒菜さんからの質問ネ。『オリキャラの方々のプロフィールを教えてください』だって！」

「これは事前に一人一人に書いて貰いました！ 望朔ちゃんとかマジ命がけでしたけどね」

> i 3 8 6 5 4 — 3 6 5 9 <

> i 3 8 6 5 5 — 3 6 5 9 <

> i 3 8 6 5 7 — 3 6 5 9 <

> i 3 8 6 5 9 — 3 6 5 9 <

> i 3 8 6 6 1 — 3 6 5 9 <

「絵でまとめやがったアアアアアアア！！」

「仕方ねーだろ文字で書くと大変な上に尺が大幅に潰れるし」

「イヤ、絵の方が確実に尺潰れんだろ！！」

突っ込む新八を冷たくあしらった梨栖は、マル秘と書かれた紙の束を出してきた。

「そして、お喜びください青少年諸君！　今回は貴方の為、女性陣のスリーサイズを調べました！！」

「「「いよつ、作者様！！　太陽神の化身！！」」」

と、浮き立つ男性陣とは対照的に、凄まじい殺気を醸し出すのは女性陣。

「……神楽ちゃん」

「分かったアル」

意味有り気なやり取りの直後、梨栖の鳩尾に神楽の膝がきれいに
入る。

時雨は挙げた歓声をようやく引っ込めた男性陣の額を狙ってクナイを投げ刺した。

その間芽衣子は、真剣を二本取り出し、マル秘メモを紙ふぶきに変えて散らした。

ひと段落して、万事屋の居間が静寂に包まれた時、時雨は梨栖に向けてニコリと笑って言った。

「次の質問に移りなさい」

「……はい」

顔を真っ青にした梨栖は、震える手でお便りを手に取った。

続く！

く夢見ながら小説書いたらエライことになるく（後書き）

さあさあ唐突に始まったドリーム小説篇。

年末に活動報告で書かせて頂いた、「企画起こしてみるぜっ!!」にて募集し、読者様から頂いた貴重なご質問に答えるべく「うつくも」の世界へ引き込まれた梨栖さん！

読者様の納得のいくような答えを出すことができるのか!!！

く夢見ながら小説書いたら、夢の世界が広がっているく（前書き）

前回の続き!!

何者かに襲われ、「うつくも」の世界へ引きずり込まれた作者。

読者様に寄せられた質問を、一つずつ返してゆく……

く夢見ながら小説書いたら、夢の世界が広がっているく

「そそ、それじゃあ……美緒奈さんがもう一問質問なさってるので……あの、それ解決します」

怯えながら時雨に向けて言う梨栖に、時雨はよしよいい子ねと笑顔を向けた。

「『梨栖先生の名前の由来はなんですか?』というご質問。えーつと、『リス』って響きが気に入ったからです。漢字は可愛い感じがした物をピックアップしてつけました」

「お前名前の決め方ホントにテキトーなのな」

李麻は冷静にツツコんでから、次のお便りを手に取った。

「えーっと、次はHN菜ノ花さん。『銀魂キャラのオリキャラに対する第1印象と今の印象を知りたいです!』だって」

「因みに菜ノ花様は、銀時殿達や土方十四郎にコメントを所望しておいでですわ」

「ご苦労、李麻君。芽衣子ちゃん。じゃあこれは今この場で発表して頂こうかね」

と梨栖が言った直後、また今と廊下を仕切る襖がガラリと開く。

そこには、近藤、土方、沖田、山崎。御馴染み真選組が登場した。

「ホントにタイミング良すぎる……まあ作者が絡んでるんだし……」

言いかけた言葉を新八は止めた。先程まで向かいソファにいた梨栖がいない。

まさか、と思った時にはもう遅かった。

「土方さんやあああああ！！
TVで見るより男前やわあ。一緒に
写真取ってくれるう？」

と、お気に入りアイドルを見つけた大阪のおばちゃんのように、
土方の腕に自身の手を巻き付けていた。

「オiiiiiiii！！
何やってんだああああ！！」

新八のツツコみで、土方の方を見た一行は「げ」という表情を作る。

「ヤメロ!! お前コレ……全国の土方さんファンに袋叩きにされんぞ!!」

「お止めなさいみっともない!! 後、方言出てますわよ!？」

と、自重を忘れた親を、土方から引き剥がそうとする李^{むすこ}麻と芽衣^{むす}子^め。

その時、テーブルのファックスが音を立てながら紙を吐き出した。

『今すぐ離れろ さもなくば殺す 恋歌』

送られたファックスを確認した梨栖は、目にも留まらぬスピード

でソファに正座した。

「ささ、さあさあ、皆さん。液晶の向こうの菜ノ花さんをお待たせしちやいないよ！」

「そ、そうですね。じ、じゃあ近藤さん達も座ってください」

「じゃあ、私が名前言っていくんで。知ってる人の印象と自分の名前叫んでください」

「「「「「はーい」「」「」「」

第一印象からいきますからね。と言った後にも、同じような返事が続いた。

恋歌！

「男だらけのムサイ連中の中に現れたから美人に見えた！ b y 銀さん！！！」

「僕も美人だと思いました！ b y 新八！」

「何者アルかこのアマ！！ と思いました。 b y 神楽」

「可愛い女の子。 b y 時雨」

「しまった！ ストーカーがバレた！ この子何者！？ b y 近藤」

「誰だコイツ。 b y 土方」

「土方さんと互角に張り合ってら。そのまま殺してくんねーかな。 b y 沖田」

「イキナリ刀突き付けてくる美人さん。 b y 山崎」

「ベッピンさん。b y 李麻」

「幼少の若を傷つけた無礼者。b y 芽衣子」

李麻！

「何だこのクソガキ！ b y 銀時！」

「可愛い女の子かと……b y 新八」

「何か気の合いそうな奴。b y 神楽」

「小生意気な坊や。b y 時雨」

「女の子かと思った。b y 勲」

「妙なガキ。b y 土方」

「不思議なガキ。b y 総悟」

「ロリっ子かと思ってました。b y 山崎」

時雨さん！

「誰！？ b y G I N」

「死体ィ！？ S H I N」

「カッケーお姉ちゃん。 b y G U R A」

「お妙さんの友人かな？ b y I S A O」

「毒舌女 b y 土方」

「……第一印象は自粛しやす。 b y S O U G O」

「……沖田隊長に同じ。 b y 山崎」

「……ザキに同じ。 b y 李麻」

「お綺麗な方と。 b y 芽衣子」

芽衣子！

「お人形さんみたいに可愛い子。 b y 時雨」

「二刀流の使い手か。 b y ゴリラ勲」

「神速使い。 b y 土方」

「ベッピンさん！ b y 李麻」

望朔ちゃん！

「不気味な奴。b y 銀さん」

「怖い人。b y 新八」

「敵に回したくない。でも敵だ……分かった時の空しさが胸に残ってるアル。b y 神楽」

「月詠に攻撃して神楽ちゃんにもけしかけようとした子ね？ b y 時雨」

一通り答えたので、今の印象に切り替える。

望朔ちゃん！

「第一印象と同じ。b y 一同」

芽衣子！

「第一印象と同じ。b y 一同」

時雨さん！

「精神破壊兵器。b y ホコリ」

「例え死んでも敵に回したくない。b y 眼鏡かけ機」

「すっごく優しいお姉ちゃんアル！ b y 神楽」

「絶対に対立したくない！ b y ゴリラに失礼な存在」

「もう一生関わりたくねえ。b y 土方」

「コワイ。b y ソウゴ13」

「オロソシイ。b y ジミー山崎」

「チョウゼツコワイ。b y キャロット13」

李麻！

「クソガキ。b y 一同」

恋歌！

「マブダチ！ b y 銀さん」

「僕の事嫌いすぎですよね？ b y 新八」

「まあ嫌いじゃないアル。b y 神楽」

「可愛い乙女。b y 時雨」

「自分の妹くらい大事！ b y 近藤」

「……ノーコメント。b y 土方」

「良い好敵手でさア。b y 沖田」

「怖いですけど優しい時もあります。でもやっぱり怖いです。b y

山崎」

「じゃじゃ馬。b y李麻」

「お友達の一人ですわ。b y芽衣子」

ツツコミ所は山ほどあったが、梨栖は敢えて触れない事にした。

「えーっと、次はオリキャラ達に質問だな。HN玖月さん。『皆さん（お仕事とか周りの人間のせいで）お忙しい毎日を送ってますがもし3日間お休みをもらえたら何がしたいですか？』だって！」

陽気な顔で近藤が次のお便りを読み上げた。

休みと言葉があまり存在しないオリキャラ達は、眉根を寄せて考え込む。

十分くらい経った後、梨栖が時間切れだとオリキャラ達の思考を止めた。

「僕は一回でいいからおっちゃんのリブ行きたい!!」

その返答に、誰よりも食いついたのは寺門通親衛隊長だった。

「じゃあ、僕達寺門通親衛隊に……」

「お前の傘下の下るくらいならファンを止める」

「一度でいいから男の生息^{ゴミ}していない場所へ行きたいわ」

「アマゾン・リリーへ行って来い。そして二度と帰ってくるな」

鼻をほじくりながら吐き捨てるように行った銀時に、時雨は好反応を示した。

「あら、何処の星？」

「ワンピ知らない奴に初めて出会ったよ。銀さんビックリ!!」

「私は……そうですわね。北大路様と外へお出かけしてみたいですわ」

そう言って、そのまま空想の世界へ旅立った芽衣子の言う事には、

誰も何も言わなかった。

最後に、『江戸へ帰りたいです 恋歌』と書かれた紙がファック
スから現れる。

「どんだけ江戸に帰りたいんですかこの人。もうホームシックに襲
われてるよ」

紙ににじんだ涙の後が、その切実さを表していた。

く夢見ながら小説書いたら、夢の世界が広がっているく（後書き）

最近、こういうところに書けるような出来事がないんですね。学校
始まったら一杯かけるかなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6456v/>

銀魂～美しき蜘蛛に睨まれて～

2012年1月9日19時52分発行